
ゼロ魔の王族でハーレムを作る

靴下を履いた黒猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロ魔の王族でハーレムを作る

【Nコード】

N4195X

【作者名】

靴下を履いた黒猫

【あらすじ】

転生チートでルイズと同じ年のトリスティン貴族に。魔法の才能で最初から無双状態、とりあえず誘拐してきます。原作知識は活用しますが、現代知識でお金儲けとか錬金で荒稼ぎとかしません。女の子と仲良くなればいいのです。目指せハーレム！

はじまりの幼児誘拐（前書き）

家族は悪ノリの結果です。考えるのが面倒でこうなりました。
父と母と兄は話に絡まないのです、似ている別人とでも思っ
て流してください。

はじまりの幼児誘拐

毎度のことながら特典つきで転生しました。四系統スクエア+虚無
全種+精霊魔法に精神力無限、新魔法開発能力まで。無双しろとい
うことですね。余裕です。

戦闘があるのかわかりませんが、偏在×100でカッタートルネー
ドとかすればハルケギニアの全ての軍を相手にしても負ける気がし
ません。虚無があるので解除で反射を剥がしてエルフの相手もでき
ますしね。

転生先は二次小説でも一、二を争う人気のトリステイン貴族。一見
派手な生活をしていますが、クルデンホルフ大公国のような金貸し
に借金しているかもしれないので要注意でしょう。まだ一歳の幼児
なので詳しくはわかりませんが、トリステイン貴族を侮るとすぐ没
落するので注意ですね。

父はルルーシュ・ド・ランペルージ侯爵。水のスクエアで黒い髪と
紫の瞳の妙に若々しい美男子です。発言が時々痛々しいのと嫁命な
のと親バカなのと頭がいいのに肝心なところでポカをすること以外
は、まあ、いい父親なのでしょう。人を操る魔法が得意らしいです。
禁術と呼ばれるギアスの魔法を使えるのかなんとか。

母親はナナリーお母様、風のトライアングルで栗色の髪と青い瞳の
優しくて美人です。目や足が不自由なんてことはありません。お母
様大好き！結婚して！

あと、年の離れた兄がいます。現在十歳、将来は魔法衛士隊に入る
！と元気いっぱいのおスザク兄さんです。栗毛と緑の瞳をしていて父
の遺伝子はどこにも見られませんが、母方の祖父に似ているそうで
す。

父との仲は良好で、魔法の腕はまだまだですが、剣の腕は兄の方が

すでに上回っているそうです。父はもやしなので。まあ、貴族は普通は剣を振りませんしいいんでしょう。よく喧嘩しているのはじゃれあいみたいなものです。

僕の容姿ですが黒い髪と青い瞳の可愛い男の子です。名前はウィルです。

あと、今日から妹ができました。
青い髪と青い瞳のジョゼットちゃんです。

魔法少女、集結せよ！

ジヨゼットが妹になってからは一日中一緒にベッドでごろごろして
ます。面倒みれることは全部やったりしていますが、一歳の体では
まだまだ無理なことばかりです。

それでも頑張りますけどね。夜泣きされても水の癒しを使えば元気
元気。

え？ 魔法をもう教えてもらっているのか？ 杖なんてその辺で拾
った木の枝で十分ですよ。みんなには秘密ですけどね。

まだ赤ちゃんのジヨゼットですが、やはり面倒を見てくれる人がわ
かるのか家族の中では僕とお母様に懐いてくれてみたいんです。

父と兄は僕たちに追いやられてしまい、拗ねて外で稽古をしていま
す。

あ、そうそう、何でガリアの王家のこの子がトリステイン貴族であ
るうちにいるのかですね。

簡単です。

瞬間移動でぱつと飛んで、ぱつと帰ってくる。

これで終わり、簡単ですね。

え、誘拐？ いやいや、ちゃんと孤児院に捨てられるまで待ちまし
たよ。捨て子なら誰が拾おうと構わないでしょう？

まあ、ある日突然僕のベッドに現れた赤ちゃんに両親も兄も仰天し
ていましたが、そこは心優しいお母様。ブリミルさまのお導きとだ
と言い、自分の娘として受け入れてくれました。父は青い髪を見て
何か察したようでしたが、僕の側からジヨゼットを離すと（僕が）
大泣きするので、結局諦めたようです。今では娘にデレデレのバカ
親父になっていますが、それほど甘えてくれないので寂しがって
います。

ジヨゼットは髪の色が一人だけ違つので大きくなつたら養子だと話すかもしれません、でもちゃんと愛情を注いで育てれば血のつながりなど些事です。孤児院での暮らしより幸せになるでしょう。

赤ちゃんつて可愛いんですよね。ほっぺぶにぶにで、たまに突きすぎて嫌がられます。

これからも可愛がる予定です。

僕五歳、ジヨゼット四歳になりました。

相変わらず甘やかしているのでジヨゼットは大きくなつても僕にべつたりです。兄妹仲は最高に良好です。将来は僕のお嫁さんで決まりです。

兄さんが魔法学院に入るといので入れ替わりのように僕たちも魔法を教えてもらうことになりました。

これまで使っていた木の枝は記念に部屋に飾っておき、初めてちやんとした杖を持ちます。契約は一瞬で完了したのですが、さすがにやりすぎだと思ったので三日ほど間を空けました。ジヨゼットは一週間ほどかかったみたいですけど、杖の契約は無事に完了。ジヨゼフが生きているのに杖の契約はできるんですね。

さて、その間にコモンの練習をしました。さすがに失敗はしません。一回で全部使ってみた僕にさすがは私の息子だ！と父が大喜びして高笑いしてましたが、そこは見ない振りをしてあげました。ジヨゼットの目と耳も塞ぎます。教育に悪いので。

その後は、まあそれっぽく調整して水と風が得意、土はそこそこ、火は苦手な演技をしました。お母様の喜ぶ顔はいいですね。心がほんわかします。二児の母とは思えません。

ああ、そういえばスザク兄さんは風のメイジです。本当に父が父なのか？とか考えてはダメなのでしょう。風の次に水が得意です。

ドットクラスの魔法は一月程度で使いこなし、その後も練習を続け

て半年でラインクラスに上がりました、という演技をしました。現在水2風2土1火1という設定です。ランペルージ家始まって以来の天才だそうです。

可愛いジョゼットはコモンすら何も反応せず、とても落ち込んでしまいました。それを慰めてあげて、ジョゼットに僕の練習の応援をしてほしいとお願したところ、今では僕の魔法の成長を自分のことのように喜んでくれます。

それでも影でこっそりと練習しているようなので、焦ることはない、ジョゼットには特別な才能があるけど、今はまだその時ではないんだよ、と言ってみました。ジョゼフが死んだらジョゼットが次の虚無ですから間違いではありません。

気休めと思われるかと思ったのですが、僕の言葉だからと素直に信じたようです。練習も一日一回杖を振るだけになりました。素直で可愛いです。

四系統の魔法が伸び悩んだ振りしながら、今度はコモンマジックの改良に手を出してみました。魔改造通り越して新魔法の開発しているんですけどね。

元となったのはディテクトマジックで、以前ジョゼットの居場所を探るために作ったサーチという魔法があります。

これを指定範囲内で条件に合致するものを見つけ出すように更に手をくわえました。

記念すべき第一回は、『魔法の才能がある平民』。

原作読んでいて、きっと平民メイジはいるんなどころにいると思っただんですよ。貴族の私児とかその子孫とか、ハルケギニアの貴族連中は腐ってますし、そのまま六千年も続いていますからね。

結果、平民の中に埋もれていたメイジの家系を発見。大人になりすぎていると魔法の覚えも悪いのですが、ドットでもいないよりはマシだろうと思い、父に平民メイジ候補だちを教えてくださいました。

すぐにその有用性を理解したわが父は彼らを確保、領主の館の近くに家を用意して魔法の教育を始めました。

ついでに僕は更なるサーチを発動。

『トライアングル以上の才能を持ち、将来美人になる少女』

メイジでメイドな魔法少女部隊を作るのです。

女子校をつくらう！

魔法少女部隊はそこその数がそろいました。一応カモフラージュに男も集めました。が、本命が魔法少女なのは当然です。貴族の血が入っているせいか、平民メイジの家系は他の平民より可愛い子が多いような気がします。

あと、平民メイジの人たちとは別にサーチに反応があった孤児と奴隷も連れてきました。奴隷購入資金は直接金貨を錬金して全額自腹です。両親には内緒ですからね。

各地に飛んでかなりの人数が集まりましたが、地元で集めた子達と混ぜて誤魔化します。

サーチ条件の年齢制限は十歳未満。

これは大きくなりすぎると教育を施しても手遅れだからです。大人の脳は新しいことを覚えるのに向いていませんし、これまでの固定観念がこびりついてしまっています。魔法少女部隊には将来の僕の側近候補という名目で、僕も一生懸命考えた英才教育を施す予定です。

魔法少女と、ついでに魔法少年を育成する為の学校を父を説得して作らせました。有能な人材は幼少期からのきちんとした教育によって育成されます。子供の頃から仕込めば忠誠心も高く有能な家臣になるでしょう。

建設した学校は男女で分け、それぞれを完全に隔離した状態でスタート。女子校は比較的近くですが、男子校は山一つ向こうです。

教育はまず文字の読み書きから始まり、女子は貴族の館で勤めるためのさまざまな教養、マナー、家政を主とし、男子は兵士としての体力作りや剣での戦闘、軍略などを主としました。男子校のグラウンドや鍛錬場を作るための広い土地が山向こうにしかなかったので

す。女子校には家政用の家庭科室などを作っておりあります。もちろんどちらでも最低限の教養は教え、魔法にも力を注いでいますが、折角英才教育を施すのにただの魔法バカでは困ります。

ああ、そうそう学校は全寮制で全部屋個室です。夜間の外出も禁止し、見回りもいます。

夜中に泣いたりする子もいるのですが、そこに僕が「泣き声が聞こえたけどどうしたの？」と颯爽と登場。

少女が寝付くまで一緒にいてやると、僕の株が彼女たちの中でうなぎ上りというわけです。実はこっそり偏在も使って同時に何人も相手をしていたりするのですが、それは知らない方がロマンチックというものでしょう。二人だけの秘密ということで口止めは完璧です。こっそりギアス使ってますから。

魔法の授業で見学と称しよく彼女たちに会いに行くので、僕は領主のご息様と生徒に知られています。女子寮内の見回りの真似事もOKなのです。

こうして女子校の中で着々と『憧れの王子様』ポジションを作り上げます。

彼女たちの親世代もメイジとして働き始め、我が領の税収も上がり。学校の規模を増やしなから、今度も新たなサーチを行ないます。

『美人・美少女な亜人』

いえ、メイジって近接戦闘を仕掛けられると弱いじゃないですか。ですので人間と比べて身体能力に優れた亜人が盾となり、メイジが後ろから大砲をぶつ放す、というネギま理論を拝借しようと思っただんです。

オーク鬼とかは不細工なだけじゃなく、人間を食べるので流石に無理ですが（最初から候補に入れようとも考えてませんが）、翼人や

吸血鬼、それに追放されたエルフなんかは狙い目ですよ。

サーチ結果を元にハルケギニア中を探してみると、翼人・吸血鬼・獣人・夢魔・エルフなどが引っかけられました。韻竜も微妙に反応ありです。どうしましょう。

とりあえず我が領内での生活を保障した亜人の皆さんがうちの軍に加入しました。

エルフの人はシェイプチェンジで顔を変えるのを承諾した人だけです。嫌がるなら勧誘の記憶を忘却し、放り出します。ガリアで薬師をしている人とかアルビオンでどこぞの大貴族に囲われてる人とかは放置。美人ですし、貴族に囲われている人もそこそこいるみたいですね。

ハーフェルフの子は迫害が酷かったようです。人間からもエルフからも爪弾き。むしろ生きてるのが珍しいくらいです。奴隷として売られているところを買うか、正体を隠してひっそりと孤児生活をしていたところを半ば無理やり拉致り学園に放り込みます。人間不信が強くて説得が面倒なんですよ。

夢魔の人たちはどっかの王族がやってくるかもしれないので、こっそりと認識障害の結界を張って誤魔化します。水魔法のギアスつて相手に気づかれずにかける催眠術みたいなものなんです。それを結界に流用すれば可能でした。夢魔が居るといふ噂は完全に封じ込められます。あの人たち、封印の場所を知っているだけで遠距離探知とかはできませんから。これで十分です。

あ、原作の吸血鬼の幼女もいましたよ。エルザちゃんという名前で五歳くらいの子。ちよつど村から村へ歩いていたところを直々に迎えにいきました。

僕がメイジだと知ると警戒されましたが、吸血鬼も保護をするつも

りだと言うと変な物を見るような目を向けられました。

その後、大人しく着いてきました。が、うちの領地に向かう途中で人間が牛や野菜を食べると、吸血鬼が人を食べるのと、どこが違うの？と聞かれました。

僕の目が気にいったので聞いてみたかったそうです。

そこで僕は、牛や野菜は一度食べたなら死んでしまっけれど、人間は少し血を吸っても殺さなければまた吸えるのだから果物みたいなものだよ、と言いました。

気に入られたみたいです。お兄ちゃんと呼ばれました。

その後、吸いすぎないようにギアスをかけ、試しに血を吸わせてみたらこんなに美味しい血は飲んだことがない！と大変好評でした。

エルザちゃんをはじめ、吸血鬼のみなさんには吸血行為や殺人行為にギアスをかけ、現在うちの領地の学校に通っています。非常時を除き、吸血行為は同意の上でなければ禁止です。僕も可愛い女の子同士なら許します。

うちの学校の生徒は特殊な教育をしているので、吸血鬼とか関係なく楽しそうに過ごしていますが、僕を見かけるたびに血をねだられるのは困りますね。もちろんあげるんですけど。水の癒しで増血して無理してでもあげます。

ああ、韻竜はそれぞれの住処にこっそり潜り込み、シルフィード以外の子に外の世界に出るかを確認しましたよ。興味はあるけど怖いそう。残念ながら失敗しましけどね。

うちの領に来た大人の亜人の方には、人間との融和政策の為と説明し子供たちを何人が学校へ入学させてもらいます。虚無の曜日には家族の下に返しますし、学校に来れば授業風景も見れるのでそこまですらで反発はなかったです。原作の翼人の人たちもうちの領に移住して

きたので、もちろんアイーシャも通っています。タバサの冒険が色々変わってしまいましたが、ついでにキメラドラゴンとかも狩っちゃいましょうか。

ちよっとした問題として、学校に通いだした子供たちに、我が家への忠誠心が芽生え始めていることで少し微妙そうな顔をしている人もいましたが、大人の中には安心して暮らせる場所があるだけで感謝している人も多いので問題はないはずです。

ネコミミの獣人の子供とかも懐いてくれて、すごく可愛いです。

急げ、空の王国！

珍しい金色の爪をしたグリフォンの子供を見つけたので、グリチャんと名づけ保護しました。大きくなったら騎獣にするのもいいですね。大人の手を借りながら、ジョゼットと二人でせつせと世話をしています。

三年ほどたちました。学校の方は順調です。魔法少女隊・亜人少女隊ともに力をつけてきたので、僕が引率として森のオーク鬼退治に出かけました。オーク鬼は人だけでなく翼人などの亜人も襲うのでみんなの嫌われ者です。

ちよつと前に男子組も連れて行き、そこでしつかりと指揮の練習を詰んでおきました。

その結果、こちらの被害は無く、オーク鬼は一匹残さず全滅しました。獣人の子の索敵によって気づかれることなく先制攻撃をしかけることができ、魔法による攻撃で混乱させたところで亜人のみんながつつこみ一気に首を刈り取りました。

元々亜人の子たちは人間より優れた身体能力があるのですが、学校での教育によりきちんとした戦闘技術と組織的戦術を身につけた今では無敵の軍団となっています。

最年長で13歳前後の外見の少女たちが、成人男性より大きなオークを圧倒する姿はかなり見ごたえがありました。

血の匂いなどで少し具合が悪そうな子もいましたが、ほとんどの子は今までの訓練の成果を出せたことを喜んでいきます。今後はより熱心に訓練に励んでくれるでしょう。学校に帰って戦勝パーティーを開いたところ、生徒のみんなにもみくちやにされました。

これは後に毎回の恒例行事となりました。

その後も得意分野で少女達は力を示して我が家に貢献してくれるよ

うになり、うちの領地で黄金時代が始まります。多数のメイジを抱えた結果、どこよりも低い税金にも関わらず、様々な公共福祉があり治安は良く、街道も整備され亜人や盗賊はすぐに殲滅されます。その結果、各地の平民が流れ込んできたりもしましたが、侯爵家という身分に相応しいくらい土地も広いので、メイジと一緒に次々に開拓を行い、税収も毎年大きく上がっています。他の貴族との間で何かあったようですが、そこは無駄に優秀な父が何とかしたみたいです。

僕のはのんびんだらりと過ごし、日々ジヨゼットや女子校の女の子たちといちゃついています。

僕が十歳になった頃、サーチに反応がありました。最近ではオートサーチ機能もつき、僕が求めている人材がいれば自動で感知するようになっていてのです。

さっそく瞬間移動を行い、向かった先はアルビオン。とある館に攻め入ろうとする兵士の姿が見えました。様子を伺っていると、とても美しいエルフの女性が兵士に切られそうに。

今こそ出番だと割って入り彼女を助けます。兵士にはスリープ・クラウドで寝てもらいました。

驚く彼女を連れてすぐに移動し、物陰に隠れていた少女たちも保護します。

使用人も生き残っていた人は助けて、全員眠らせました。

彼女たちに、妙な胸騒ぎがしてこの場所にやってきたこと、エルフであろうと人間に敵対しないのならば僕が匿うこと、そしてこの場所を離れる前に使用人と兵士の記憶を操作し、エルフは死んだと認識させなければならぬことを説明しました。

突然現れた僕を疑いつつも、自分たちが死んだということにするのは賛成した三人。

ハーフェルフの少女が『忘却』の魔法を使い、生き残った使用人や

兵士に偽の記憶を埋め込みました。後は館から金目の物を持ち出して火を放ち、使用人や兵士を適当なところで起こして放り出すだけです。

つじつまの合わない部分は魔法で勝手に保管されました。

その後は森に隠れ、まずエルフ親子の顔をフェイスチェンジで変えました。美人でもない凡庸な感じですが。エルフなら変化くらい高度な魔法でも使えると思うんですけどね。

目立たないように平民の格好をしてフネに乗り、トリステインの我が家まで案内します。我が家では偏在が影武者をしたので何も気づかれておらず、アルビオンでの一部始終は秘密にしておいて欲しいと三人に頼み、エルフとハーフェルフの親子を保護したとだけ両親に説明しました。

保護した少女の一人に父が見覚えがあったことから、うちで一緒に暮らしてもらうことになりました。どうやら以前アルビオンに行つた際に会っていたようです。

ジヨゼットはいきなり現れた新しい家族に戸惑っていたみたいですが、しばらく一緒に過ごしていれば仲良くなるでしょう。

こうして、マチルダさんとテファとテファのお母さんをゲットしました。

憧れのスザク兄さん

ジヨゼットとは十歳になった今でも一緒にベッドで寝ています。お風呂も一緒に入ります。

そこに新しくテファとマチルダさんが加わりました。

新しい家族に早く慣れる為にも一緒に部屋で過ごした方がいい、と説得した結果です。テファは人見知りが激しいのですが、こちらに来るまでに仲良くなり甘えん坊になっていました。僕と一緒に部屋も喜んでいます。

マチルダさんはお姉さん役ですが、家族を失くしたばかりでいろいろと落ち込んでいるので無理やり引っ張り込みました。

テファのお母さんは無くなったモード公の喪に服し、しばらくしたら修道院にでも入って静かに暮らしたいそうです。

僕との二人っきりの空間が壊されてご機嫌斜めなジヨゼットはいろいろと我がままを言って僕を困らせます。でも、ジヨゼットに甘い僕なので本当に無理なこと以外はなんでも叶えてあげます。人の迷惑になるようなことを言ったら叱りますけど。

キスをねだられた時は迷わずファーストキスをいただきました。美味しかったです。しばらくはご機嫌だったとだけ言っておきましよう。

お風呂に入るとジヨゼットは不機嫌になります。同じ年くらいのテファの胸が少しだけ膨らんでいるからです。マチルダさんの胸も大きいので、自分のペタンコな胸を見て落ち込みます。将来も期待できないと教えたらどうなるんでしょう、ちょっと見てみたくありません。

ちなみに僕は三人の髪と背中を洗う係です。異論は認めません。十歳だからセーフです。恥ずかしがるマチルダさんもレアでいい感じ

です。

テファは裸でも構わずに抱きついてくるので、ジョゼットも対抗して小さな胸を押し付けてきます。両手に花の僕たちを見て、マチルダさんが複雑そうな顔をしているのは見なかった振りをする。

寝るときは左右の腕にテファとジョゼットが抱きついてくるのですが、時々抜け出してマチルダさんを抱きしめながら寝ます。眠れない夜があるようで、声を潜めて泣いているのです。翌朝、小声でありがとうと言われるのも定番です。

ところで、僕が10歳、マチルダさん17歳。そして魔法学院から帰ってきていたスザク兄さんは20歳。

うちのマチルダさんは原作のような苦勞をしていないので姉御肌な感じではなく、ロングビルさんっぽいお淑やかで上品なお嬢さんです。ちょっと陰のある美人という感じ。

スザク兄さんの保護欲とか刺激しまくっているみたいなのですが、いつも回りに僕やテファがいるのでろくに話しかけることすらできず、遠くから見つめているだけです。

あと、兄さんが学院に行っている間に作った学校に驚き、平民に教育を施すということに感銘を受け、僕と同じように教師の真似事もしています。

僕は今は水3風3土2火1という公称で、兄さんは風3水2土1火1。

魔法の腕は僕の方が上なので、もっぱら剣を交えた戦闘方法などを指導しています。

女子校の方では護身以上の武術はあまり積極的に教えていないですし、亜人の子に混じると基本的な身体能力が違い過ぎます。武器を使った戦闘ではまず相手をするのは不可能です。ちなみに現在の亜人の子の教官役は亜人の大人たちです。翼人の翼を使った戦闘方法など種族独自の戦闘形式もありますからね。

で、そうすると、男子校の方に顔を出すことが多くなるわけで。
僕が女子のアイドル、兄さんが男子の憧れ、という住み分けが何となく生まれていたりします。平和ですね。

社交界デビュー

12歳になった僕はついに風のスクエアになりました。テファたちには10歳の時に僕が偏在を使っていたことを知られていますが、あれはなぜか体の奥から力が湧いてきたと適当な説明をし、テファたちの危機を直感したから一時的に魔法の力が上がったのだと理由付けました。僕はテファたちと出会う運命だったのです。運命っていい言葉ですね。

で、僕がスクエアになり、父がめちゃくちや落ち込みました。スザク兄さんも風メイジなので僕には水メイジになってほしかったそうです。でも、偏在が使えると便利なんだもん。仕方ないですよ。お母様は自分がスクエアになれなかつたので、僕がスクエアになれたことがとても嬉しいそうです。僕も喜んでもらえて幸せです。

それで、この話をどこで聞きつけてきたのか、各地のパーティーに呼ばれるようになりました。ガリアの天才と言われたシャルル公と匹敵する才能、とチャホヤされまくります。

これまでは父上と兄上に任せっぷりでほとんど顔を出していませんでしたが、折角の機会だと思つて諸侯に顔売ることに。同年代の貴族の子弟とも顔を合わせました。

丸っこい犬とか薔薇の人とかいましたね。薔薇の人は意外といい人みたいです。主に見ていると面白いという意味で。

モンモンは普通でした。そばかすはポーシオンでは消せないのかな？ 美容液とかはハルケギニアにはないんでしょうか。

美容液で思い出したのですが、うちの館にはシャンプーとリンスがあります。

最初は僕が錬金で作ったもので、植物由来の天然物！と思いいろんな材料で試した結果、何種類もの花の香のシャンプーができました。

それをうちの魔法少女隊に教え、一時土メイジの間で好みの花のシヤンプーを作るのが流行りました。

僕に感想を聞きに来るので、抱きしめてクンカクンカするのはデフォです。みんな抱き締められて喜んでいるのも仕様です。マチルダさんにももちろんやりました。香水よりシヤンプーの香りの方が僕は好きですね。

あ、もちろん学校にはお風呂がありますよ。清潔にしてもらいたいですし、魔法を使えば沸かすのも楽ですから。

話を貴族の子女に戻しましょう。モンモンとはちょっと話をしたぐらいです。うちのシヤンプーの話をしたら食いつかれたのですが、僕は錬金以外の方法では作ったことがないのでなんとも説明し辛いです。モンモランシ家は水メイジの家系ですしね。

でも、この食いつきっぷり。うちの平民メイジたちに量産を命じてみましょうか。収入のうち幾らかは僕のお小遣いにしてもらえるように父を説得し、企画を進めてみましょう。

その他にも色々顔を出しましたが、キュルケもタバサもないので省略。商売の種になりそうな物はそこそこ見つかったので結構有意義だったかもしれません。

で、ヴァリエール公爵家と王家のお姫様にも会いました。

ヴァリエール公爵家の長女は国の研究所、次女は病弱なのでパーティーには顔を出さず、例のツンデレ三女が相手です。

さすがに12歳にもなると魔法を習い始めているもので、可愛い顔が不機嫌そうに歪んでいました。最年少スクエアメイジな僕を妬んでいるのでしょうか。トリストインの女の子は嫉妬深いことでも有名です。ちょっと違いますか。まあ、それでも可愛く見えるのだから美少女は得です。笑ったらもっと可愛いんでしょうね。

今回のパーティーでは当たり障りのない会話にとどめ、魔法学院で

実際に魔法の実技を見てからルイズの系統についての話を繰り出すことにしましょう。これからどんどん性格が鬱屈していくのでしようけど、そこは見てみない振りです。

あ、僕はスクエアになれましたけど、うちの妹のジョゼットは杖と契約はできてはまだ一つも魔法が使えない、と言ってしまったのはわざとじゃないです。ええ、これでうちに遊びくるかも、とか全然考えていませんよ。

釣れました。

っは。いえいえ。何でもありません。まあ、ピンクのリトルモンスターの話は横に置いておいて、王女さまの話をしましょう。

実は楽しみだったんですね。原作では時にヒロイン以上の美しさで描かれる、麗しの王女様。うちは爵位も高いので、こうした王族の参加するパーティーにも出ることが出来るのです。で、ご対面。

……おお。これはなかなか。なるほどなるほど、美しい。

いや、家でテファやジョゼットを見慣れていなかったら惚れていたかもしれません。あ、うちのジョゼットは多分原作より美少女ですよ。修道院暮らしを経験していないので、きちんと美容に気をつけて驚沢な暮らしをしています。雪のようにまっさらな肌がとても好きです。

テファ、ジョゼット、ルイズ、アンリエッタ。ブリミルさんのご子孫は美少女だらけですね。陛下やウェールズ王子もやっぱり美形なのでしょう。というかハルケギニア全体が美形と美少女が多い気がしますけどね。

アンリエッタ王女からはスクエアになったことをお褒めいただき、今後もトリステインの為に力を貸して欲しいとお言葉をいただきました。いい思い出になりそうです。

ピンクのモフモフ

ピンクのモフモフがやってきました。先触れがあったとはいえ突然の襲来に我が家は一時騒然となりましたが、スクエアメイジである僕に魔法を教わりたいという話なので僕がホストとなりました。家族の紹介のとき、ルイズ嬢の視線がずっとジョゼットを見ていたので目的は丸わかりですけどね。

それはともかく、ルイズ嬢・ジョゼット・テファ・マチルダさんを連れて女子校の練習場に向かいます。男子校は遠いですし、思春期の彼らの前に美少女を連れて行くのは気が進みません。練習場についてから、改めてルイズ嬢に魔法の質問をします、どの系統なのか、どのランクの魔法を使えるのか、と。

口外しないと誓いを立てさせられてから、とても恥ずかしそうに、魔法が使えない、すべて失敗して爆発してしまう、と言われました。まあ、知っていたので、ふーん、です。ジョゼットも魔法が使えませんが、テファは忘却以外はコモンすら苦手です。そんなこともあるのだろうと思っっているので、マチルダさんも特に反応しません。した。

バカにされるとでも思っていたのか、僕たちの余りの無反応振りに混乱するルイズ嬢を尻目に、マチルダさん（ただいま19歳・彼氏なし・未だに僕と一緒に風呂に入っています）にお願いしてゴーレムをちよつと離れたところに作ってもらいました。それを二人がかりで固定化し、僕がみんなのまわりに風の盾を作つて防御。こっそり反射も混ぜます。

そこまで準備してからルイズ嬢に錬金を使ってもらいました。

これは酷い。凄じじゃなくて、酷い。

トライアングルとスクエアメイジが固定化をかけたゴーレムの上半身が木っ端微塵です。三十メートル級のゴーレムを相手にするには効果範囲が狭いですが、威力は桁外れみたいです。

俯く彼女のつむじを眺めながら、凄い威力ですなと褒めました。

驚いて僕の顔を見つめる彼女に、今度は火・水・風の系統も使ってもらいます。

いやあ、これは教室がああ惨状になるだけのことはありますね。

ディテクトマジックで魔力の流れを見たのですが、どの系統も不安定になっています。これは四系統に向いていないですね、と告げると落ち込みました。つむじが可愛いルイズ嬢です。

ぐりぐりしたくなるのをこらえ、貴方はもしかしたら四系統以外の系統 例えば『爆発』とかなのではないでしょうか、とそれっぽいことを言ってみました。ルイズ嬢がフリーズしました。

しばらくしてから再起動し、今まで失敗して叱られたり慰められたことはあつたけれど、褒められたことはなかった。四系統以外の魔法の可能性を教えてくれる人はいなかった、と泣き出します。

おー、よしよし、と抱きしめてやりあなたの魔法は新しい可能性の塊です、これは誇るべきことです、と自信をつけるようなことを言つて長いピンクブロードをモフモフ。いいさわり心地です。

しばらくしたら落ち着いたようで、顔を真っ赤に染めて離れてしまいました。まあ、代わりに嫉妬したジヨゼットとテファに抱きつかれたのでよしとしましょう。テファの胸もだいぶ育ってきました。

マチルダさんだけ仲間外れもダメなのでいっしょにハグです。

その後、場所を移してテラスでお茶会。

魔法の仕組みや精霊の話、精霊魔法（うちでは先住魔法の呼び名を精霊魔法に統一しています）についてわかつていることを話します。うちの領内で亜人が普通に暮らしていることに驚いたルイズ嬢ですが、精霊魔法は彼らに聞いたほうがわかるし、そうすれば僕らの使う魔法についてもより深く理解できる、とそれっぽいことを言った

ら尊敬の眼差しを向けられました。知ったかぶりでごめんなさい。で、そうになると杖と契約はできているのに従来の魔法が使えないルイズ嬢のようなメイジは、新しい魔法を模索する上で大変重要な存在である、とおだててみました。ちなみに、ジヨゼットも杖と契約しているのに魔法が使えませんが、僕がそういう風に言っているの、うちのメイジで彼女を馬鹿にする人はいません。いたら良くて半殺しですけどね。

おだてられたルイズ嬢は調子に乗って、そうよね、私が新系統の先駆者になるのよね、といい気になっていたので、釘もさしておくことにします。

四系統以外の魔法を使うと、もしかしたら精霊魔法と思われて異端審問されるかもしれないので、この場所以外では言わない方がいいですよ、と。

カチン、と凍りついたルイズ嬢にせめて両親とすぐ上の姉にだけは話したいと相談されたので、今度ヴァリエールの領地にお邪魔することになりました。

ああ、あと僕のことをいつの間にか先生と呼んでいましたが、悪い気はしないので黙認です。

鬼の住処へご案内

やってきました、鬼の住処。不安そうなルイズに案内され、ご両親とお姉さんお二人とご対面です。

ルイズの魔法について僕から説明がある、ということなのですが、まだまだ子供の僕に疑いの視線がズバズバ突き刺さります。特にお母さんと上のお姉さんが怖いです。下のお姉さんはニコニコしているので何を考えているのかよくわかりません。

まあ、細かいことは気にしないで僕の立てた仮説、新系統『爆発』についてと、四系統以外の魔法ということで精霊魔法などの例を上げて説明してみました。

いきなり新系統と言われてカトレアさん以外は微妙そうな顔でしたが、ルイズが四系統のどれにも属さないメイジなのは火を見るより明らかです。もやもやしています。

そこで、ルイズにお願いしてちょっとだけ席を外してもらいました。詳しいことは後で説明できるなら説明します、と約束をし、公爵の許可の元、ディテクトマジックとサイレンスをかけます。

今度こそ本題、という雰囲気全員が目の色を変えました。ええ、本題です。

ルイズが虚無の可能性。

四系統のどれに属さない魔法を使ったというブリミルの伝承については誰でも知っています。そして、ラ・ヴァリエール公爵家はトリステインの王家が始祖であり、ブリミルの子孫です。

今度こそ頭が真っ白になったかのような三人とは別に、カトレアさんに僕がルイズを虚無だと思っ確率は何パーセントくらいなの？と聞かれました。

もちろん、100パーセントです。ルイズは四系統のメイジではな

く、それはつまり虚無である、ということと同一なのですから。もしも新系統の『爆発』なんてものがあつたとしても、それも虚無の中の一系統にすぎないでしょう。まあ、爆発の系統が広まり、将来五系統にでもなつたら虚無じゃなくなる可能性もありますけどね。

そこまで聞いて公爵も公爵夫人も理解できたようです。

ルイズが本当に虚無かどうかはわかりませんが、今の魔法の考え方はルイズは虚無の魔法使いに分類されてしまう、ということに。そうなつたらブリミル教に祭り上げられることは確実です。

異端審問か聖女か、どちらであれ今までの暮らしはできなくなりま

す。

ここでの話は絶対に漏らさないこと、ルイズにはもう少し大きくなつてから教える、ということを決めました。

そんなこんなでヴァリエール家を後にした僕ですが、現在、カトレアさんとルイズが一緒についてきています。

これでも水のトライアングルなので有名なカトレアさんの病気を診察してしてみたのです。

なんとなく違和感がありました。魔力が定まっていないで体の中で暴れている感じです。

これはもしかしたら精霊魔法なら何とかなるのでは？と思って我が領地に誘ってみましたわけです。水の秘薬も水メイジの治療も試したそうです。精霊魔法までは試していません。あっちの方が効果は高いです。

エルフであるテファのお母さんもいますし、エルフの宝という謎の指環もあります。何とかなるんじゃないですかね。

何とかなりました。

めちやくちやあつさり治つてしまい、なんだか申し訳ない気分になりましたよ。

ちなみに指環を使うまでもなくテファのお母さんの魔法で一発。本人も今まで感じたことのないほど体が軽い、胸の奥にずっとあった鈍痛がなくなつた、とびつくりしています。一応水メイジにも診せましたが完全な健康体だそうです。

泣きじゃくるルイズを宥め、もう日が暮れていたのものでそのままうちに泊まっていくことになりました。ヴァリエール公爵家には竜騎士を送り一報を入れておきます。

その夜、なぜか僕たちのバスタイムにルイズとカトレアさんが参入。まあいいかと髪を洗い、背中を流してあげます。恥ずかしがっていたルイズですが、カトレアさんにお風呂の中にバスタオルを入れてはだめよ、と剥ぎ取られました。ナイスです。でも、まだまだ子供でしたね。

寝室に移動しましたが、今度もルイズとカトレアさんが現れます。ちよつと窮屈になるけれど平気だろうと招き入れ、寝ようとしたところでカトレアさんに呼び出されました。

夜のテラスで二人きりです。

不思議な人、と言われてました。

優しいのに傲慢で、周囲の全てを飲み込み幸せにしようとする、とても子供には見えない怪物。

それが僕だそうです。

うわー、さすがカトレアさん、正解です。

思わず拍手をしてみました。

で、ルイズに近づかないで、と言われるのかと思ったのですが、なんと私も幸せにしてくれる？と聞かれてしまいました。

僕の考える幸せでいいのなら、と応え、手をつなぎながら一緒に部

屋に戻ります。

その晩はルイズとカトレアに抱きつかれながら寝ました。明かりを消した部屋でカトレアとキスをしたのはみんなには秘密です。

兄、ぐらつとくる

カトレアさんが病気の経過観察の為にうちの館で暮らすことになりました。

もちろん公爵家のご両親と相談済みです。途中で僕だけ締め出されたので何があったのかは知りませんが、その後、外に連れ出されて鬼教官のしごきが行なわれました。

結果は偏在×カッタートルネードの嵐がヴァリエールの領地を切り刻んだと、だけ行っておきましょう。

それにあわせてルイズがちょこちょこうちの領地に遊びにきます。全然進展しない爆発魔法の練習をし、カトレアさんとおしゃべりを楽しみ。

ジヨゼットとテファとも変な魔法同盟とでも言うべきものを作っていたりします。友達ができて明るくなったような気がしますね。ジヨゼットとは更に別の同盟も組んでいるそうで、時々こっそり変な体操をしています。カトレアさんと一緒に微笑ましく見守っています。

一年の半分くらいは我が家で暮らしているので、すっかりお母様にうちの子扱いをされています。優しいお母様にルイズも甘えまくります。お母様とカトレアさんは空気が似てますし、安心するのでしょうか。

僕、テファ、ルイズが13歳、ジヨゼット12歳、マチルダさん20歳、カトレアさん21歳となりました。

マチルダさんとテファさんは娘盛りというのでしょうか、館の使用人や遠くから見かけた男子校の生徒によるファンクラブができるほどの人気振りです。病弱であったせいか儂く神秘的な雰囲気漂うカトレアさんに兄もぐらつと来たようで、時折頭を抱えて何かに悩

んでいます。

それはともかく、せつかくの美貌を損なうのは世界の損失なので、二人には僕が作った若返りの秘薬を時々飲んでもらっています。これは細胞分裂の上限を回復させ、老化を防ぐという脅威の秘薬です。寿命も延び、皺もなくなりません。二人は胸が大きいので垂れないようにクーパー靱帯も強化、修復する作用も追加しました。

そんな二人と、最近ではこっそりと恋人ごっこを楽しんでいます。

この世界では平民では十代前半で結婚も珍しくありません。貴族も完全な政略結婚なら時々ありますが、ほとんどの貴族女性の結婚は二十歳前後。魔法学院の卒業後というのが多いようです。

カトレアさんは病気の為に通えず、マチルダさんはアルビオンで死んだことになっています。暗い青春時代をすごした二人は、年齢的にはもう結婚適齢期。

僕がまだ若いので結婚を迫られたことはありませんが、恋人として隠れていちゃいちゃしています。なかなか二人きりになれないのが悩みですがドキドキ感が癖になりそうです。

カトレアさんの病氣回復から早一年。

後遺症や再発などは見られず、魔法を使っても体調が崩れたりしません。完治のお祝いに旅行にいこうという話になり、エレオノールさんも珍しく参加。

道中彼女と話をする機会があつたのですが、ツンツンしすぎていて話しにくかったです。今までこういう人は回りにいなかったの慣れませんね。え？ ルイズ？ 嫌だなあ、年を考えてくださいよ。それにルイズは僕のことを先生と呼んで慕ってくれている素直ない子ですからね。

エレオノールさんには、人見知りのテファと温室育ちのジヨゼットも苦手っぽいですね。ルイズも苛められるのを警戒しているので、結局、年下組と年上組で分かれます。

で、エレオノールさんたちは少し離れたところで三人で話をして
いるのですが、内容が恋バナのような……？

もっと素直になれば、きっと何とかって言う伯爵さんとも結婚でき
ると思いますよ。多分。

美少女家臣団、結成！

パーティーにもそこそこ参加することにした僕ですが、そこで見つけた商売の種を実現化するために父と話し合いを行ないました。

その結果、僕に直属の家臣をつけてくれるということで決まりました。僕にもそろそろ経験を積ませようと思っていましたそうです。

最初は父が支援してくれるので、商売の経営を僕が自分で行い、家臣には僕から給与を与えます。その収入は僕の懐に入り、支援してもらった分は後で父に返します。

僕にとっては得しかないのですが、僕の見つけたメイジたちがそれだけに立っているので今回はその褒美、というのが父の説明でした。ここは素直に感謝しておきましょう。

さて、僕の家臣ですが、折角なのでマチルダさんとカトレアさんにも参加をお願いしました。カトレアさんは子爵位を持つヴァリエール派閥の貴族なので正確には家臣ではなく協力者ですが、トップの僕を補佐してもらおうという点では違いはありません。役割的には秘書に近いですね。

商売を始めるうえで必要な各方面の人材ですが、二人以外は当然魔法少女隊と亜人隊を呼びます。

それぞれの希望や適正にあわせ、事務処理・経済・経営・組織運営なども学校で教えているので、何とかできないことはないでしょう。もちろん、最初は父の部下を借りてノウハウを教えてもらうつもりではいます。

ちなみに魔法少女たちは僕と同年代の最年長組、13〜18歳くらいですが全員がトライアングルという精鋭たちです。魔法学院では全系統のメイジを集めて同じ時間配分で教えていましたが、うちの学校では系統別にクラスを分けて得意な系統は時間を長く取り、苦

手な系統は少なめにしています。苦手な属性はせいぜいドットが使えればいいのです。

彼女たちの成長振りはその教育方針が正しく一致した結果なのでしよう、もう少しすればスクエアになる子も出てくると思います。

亜人の子たちも優秀で、特定状況下では魔法少女隊数人分の働きをこなすことができるメンバーたちです。種族特化の強みを活かす事、個性を伸ばすことが肝心なのです。

そんな彼女たちに僕が家臣団を作るので入るか確認したところ、全員が全員とも希望しました。僕のことを前々から慕っていたそうで、どこまでも着いていきます！と凄く張り切っています。

大告白大会となりましたが、その際に全員のファーストキスも頂いてしまいました。この子達も僕のものです。

さて、新設した僕の家臣団ですが、最初の指令はシャンプーとリンス作り。マチルダさんもカトレアさんも土メイジですしね。

土メイジが錬金を行い、水メイジが成分の調整をし、風メイジが材料を集め、火メイジは護衛が主な任務です。

亜人の子はそれぞれの得意分野で頑張ってくれています。精霊魔法で材料の栽培なども行なったほうがいいでしょうか。商売なので一年を通じて手に入るかどうかも考えています。

あと、夢魔の子たちも数人いるので風メイジや翼人さんと一緒に諜報部隊作るというのも面白そうです。夢というのは無防備になりやすいですからね。偏在を使えば瞬時に遠くのがわかりますし…

…あ、精霊魔法使えば今までなかったマジックアイテム作れるから、実は電話が作成可能？

便利そうなマジックアイテムを作って量産も視野にいれてみましょうか。

さて、色々と同時進行しながらもシャンプーとリンスが完成です。

魔法の品なので高くなりますが、販売相手は貴族の予定ですし、生

活用品（兼美容品）は永遠に売れ続けると言っても過言ではありません。シャンプーなら男性にも人気が出るでしょう、汗をかく軍人とかそこそこ収入がある人に向けたメンズ商品もいいかもしれませ

ん。いくつか宣伝戦略を考えた結果、まずはうちと付き合いのある貴族の家に新商品の試供品ということでも小分けして配るということになりました。この辺は父も手伝ってくれました。

パクリ商品が出回るかどうかですが、今まで見たこともないシャンプーをそう簡単に錬金できると思えませんし、質は慣れているうちのメイジの方が確実に上。一度使えばその良さが実感できるという自信もあるので考慮はしていません。

シャンプーの材料の栽培もある程度めどが立ち、搜索部隊を秘薬の材料探しや野外の調査に変更しました。領内で今まで発見されていなかった危険な亜人の巣が見つかったり、広すぎて細部が適当だった地図が精密に作りかえられたりいろいろとやっています。秘薬の材料は父にもよく採取を頼まれますね。

あとはゲーム関係で将棋やトランプ、麻雀を作って販売しました。将棋は取った駒を捕虜として扱い、再度盤上に置けると言うことが画期的だと評判になりました。チェスから移ってそちらにはまる人もいるようです。

トランプはいろんなトランプ・ゲームと一緒に広めたので貴族の子供の間で流行り、麻雀は複雑なシステムが一部の熱狂的なファンを獲得しました。麻雀熱はじわじわとハルケギニアに広まっています。

マジックアイテムの開発も順調に進んでいるので、家臣団の規模もどんどん増やしていくつもりです。将来が楽しみです。

麗しき兄弟愛

さて、僕が13歳となったこの年。原作開始の三年前に当たるのですがイベントもいっぱい発生しました。

まずは今年の三月、ジョゼットとシャルロットが12歳の誕生日を向かえ、あの悲劇の幕が上がりました。

シャルルの暗殺、オルレアン夫人の薬による心身喪失、シャルロットがタバサになりジョゼフに復讐を誓う、血まみれの宮廷劇が……。

正直、介入しようかどうか悩みました。

ジョゼフ狂王に頑張ってもらわないとハルケギニアに戦乱の嵐が巻き起こらないからです。戦が起こったほうが僕にとつて都合がいいのです。魔法で無双すれば褒美ががっぽりもらえることでしょう。

それにジョゼットをどうという理由であれ捨てたのも気に入りませんが、ジョゼフとシャルルの仲直りの部分って好きなんですよね。

ああ、二人にはガリアをいい国にしてほしいなあ、と純粋に思ってしまった。

それに一番苦しい思いをするシャルロットには、罪などありません。彼女はただの被害者で、悪いのは大人たちなのに、あんなに感情豊かだった彼女が復讐の為に感情を殺し必死に生きていく姿は見たくないのです。

そういうわけで、シャルロットの誕生日当日。

現在オルレアン公爵夫人とシャルロットの前にいます。怪しいロブ姿の謎の人です。

突然入ってきた僕に怯えた顔で杖を向ける二人ですが、もちろん危害を加えるつもりはありません。

ただ、選択を与えるだけです。

シャルロットを差し出せばシャルル公の命を救ってやるう、と。

まさか暗殺をするつもりなの?!と誤解されましたが、そこは訂正しないと駄目ですね。

我は『魔法使い』。不可能を可能に、願いを現まじに変える者。このままなれば、シャルル公は毒矢に倒れ物言わぬ軀と化すであろう。

顔を隠しているのでノリノリです。不吉な予言を与えてみます。

夫人は恐怖に顔を真っ白に染めており、パニックに陥っているようでした。

そんな夫人を横目に、強い目をしたシャルロットが一步前に踏み出し、言いました。

私がお父様を助けてください。

なるほど、これが感情を殺す前のタバサかあ……と思いつつ、シャルルも娘にこうまで言わせるとは、いい父親をやってきたようですねえ、と思いました。ジョゼットのことは許しません。

ククク……と悪役笑いを漏らしながら、承った、と呟き姿を消します。

夫人がシャルロットに詰め寄っていますが、もう契約はなされませんでした。後は実行するだけです。

ジョゼフとシャルルの元に瞬間移動したところ、ジョゼフが矢を放ちシャルルの胸に突き刺さった場面でした。

現在、シャルロットと夫人がジョゼフの前に引きたてられた場面です。あんなに元気だったシャルロットの目は虚ろで、ちゃんと

現実を認識しているのか不安になりますね。夢じゃないですよ？
あ、毒杯を与えられたシャルロットの手から夫人が杯を奪いました。
いま、まさにそれを煽ろうとしています。

そこで颯爽と僕参上。同時に全員に金縛りをかけます。

イザベラも引つ張り出してその辺に転がしておき、ジョゼフの口だけ麻痺を解除。

我は『魔法使い』。ジョゼフ王よ、お主が願いを叶えてやろう。

はい、またこのパターンです。シャルロットと夫人が僕を見つめて何か言いたそうにしていますが、麻痺状態なので声は出ません。

ジョゼフは鼻で笑い、無理だと切り捨てます。この動じなさ、流石です。

対価にイザベラと始祖の秘宝を頂こう。願いの成就を望むか？

イザベラの顔が盛大に引きつり、必死にジョゼフに視線を送りますが、ジョゼフはチラリとも視線を向けません。

体の麻痺を解いてやると、つまらなそうに指に嵌めた《土のルビー》を外し、僕の投げ渡しました。

できるものならやってみるがいい、と。

ふふふ、すかさず記録を発動！

その場にいた全員を、まず先王の遺言の場面へと案内しました。ただし、現在は意識のみです。

なんだこれは、つまらない手品の類か！と叫ぶ彼に、黙って真実を見るがいい、と伝えます。

こうして彼が本当に王位の指名を受けたと知らしめた後で、場面は代わり先王の居室です。

今回はジョゼフが肉体を持って一人でいます。いらいらとしている様子の彼ですが、物音に咄嗟にカーテンの陰に隠れました。

そして、王位が手に入らずに零れ落ちたシャルルの涙を見ます。

もう一度、これは本当にあつたことなのか、と聞かれたので、ガリアの担い手よ、その身で判じるがいい、ともつたいぶって教えましたが。虚無である彼には、これが実際に過去に起こつたことなのだとわかるはずです。

そして、涙を流す二人が共にガリアをよりよい国にしようと誓い合い、記憶の再生は終わりました。全員の麻痺は解いてあります。

滂沱の涙を流すジョゼフ。今見たこと、シャルルの放つた言葉にシヨックを受けるシャルロット。

そして、俯いて何かに耐える夫人に、想像もしなかつた父の涙に呆然としているのイザベラ。

シャルロットよ。

そこに再び僕が割り込みます。

契約を覚えているか？

あの時の会話を思い出し、頷くシャルロット。

お前を対価に貰い受ける。よいな？

夫人が口を挟もうとしたのをシャルロットが止め、覚悟はできてい

ます、と言いました。

それを受けて、僕は矢の治療跡も真新しいシャルルをその場に転移させました。

シャルルは涙を流しながら眠っていました。シャルロットと夫人が駆け寄り彼を起こすとすぐに目覚めました。

泣き出す彼女等を抱きとめながら、ようやくガリアの王城にいらすと気がついた彼は、玉座に座すジョゼフと見詰め合い、瞳で会話をしていたようです。

ちなみに、殺された記憶を一時的に封じ込め、彼もまたあの記憶の舞台に送り込んでいました。ガリアをより良い国にすると誓い合ったのは、まさにこのシャルル本人です。

シャルロットの願いによりすでに傷は癒やした。二度目はない、道を過つことなく進むことだ。

死んだはずのシャルルですが、記憶操作の魔法もありますし、スキルニルもガリアの宝物庫からかつぱらってきたので入れ替え余裕でした。ああ、偽のシャルルの死体は今偏在がこっそり回収しましたよ。

そして、シャルルに抱きつくシャルロットをすぐ側に瞬間移動させます。細かい演出で大魔法使いらしさをかもし出してみました。体を強張らせる彼女に、耳元で囁きます。

シャルロットよ。研鑽を詰め、2年後にトリスティンの魔法学院に入学せよ。タバサと名乗り、青の欠片を探すのだ。

そう告げて、ローブで顔を隠したままキスをしました。たぶんファーストキス、ゲットです。

そしてシャルロットをシャルルの側に戻し、次はイザベラです。ちよっと厳しくめましよう。

イザベラよ。お前は醜いな。

白い顔をしていましたが、ピクリと額に青筋を浮かべた彼女に、言葉が続けます。

人を僻み、憎み、自らの心を省みることをしない。父に似て心を表すことに不器用な娘よ。

自らの醜き心を認めよ。受け入れよ。

魔力とは感情の高ぶりなり。

心を制御せよ、心を鍛えよ、自らの心を解き放つのだ。

その時、御主の内なる力もまた目覚めの時を迎えるであろう。

ディテクトマジックの応用でスキャンを行い、イザベラの魔力を測ったところ、ガリア王家で父親は虚無だけあり、本来はかなりの素質に恵まれていました。

ですが、ジョゼフの超放任主義とも言える育て方で愛情を知らず、父親が無能王であるというコンプレックスから、自らの魔法の力に蓋をしてしまっているようです。魔法が上手く使えた時に、ジョゼフに邪険に扱われてトラウマになったとかも有り得そうです。つまりは全部父親のせいなんですけど。

心と魔法は密接な関係にあります。心が働かないと魔法もきちんと働きませんし、心が燃え上がれば魔法の威力も上がります。

憎しみによって魔法を染め上げたジョゼフと違い、イザベラの心は出口を求めて迷っています。それが魔法が上手く使えない結果に繋がりが、更に迷宮の奥へと進んでしまします。

その身に相応しい美しさを得るのだ、イザベラよ。私がそなたを迎えに来る、その時まで。

まあ、何となく偉そうでそれっぽいアドバイスを言ってから、何か言い返そうとしたイザベラの唇も頂きました。

怒りなんか恥ずかしさなのか、頬を赤く染めた彼女はなかなか可愛かったです。口さえ開かなければ素材はいいのに、もったいない人ですよ。

用も終わったのでそろそろお暇しようと思ったところで、ジョゼフに声をかけられました。

魔法使いよ、何が狙いだ、なぜシャルロットとイザベラを望む？

その問いに答える必要はなかったのですが、まあ応えた方が面白いですかね。

我が望みはブリミルの血。全ての王家の根絶。ジョゼフ王よ、シャルル公よ。ガリアの繁栄を願うならば、後継者は始祖の血を引かぬ者を選ぶがよい。

そして、僕は姿を消しました。宝物庫からちゃんと《始祖の香炉》もお持ち帰りです。抜かりはありません。

けど、今回の悪の魔法使いは面白かったですね。また機会があれば

……ふふ。

秘密の湖

次は初夏の時期に二週間も催される園遊会。

トリステインの最年少スクエアメイジであり、侯爵家の次男にしてルイズの友人という立場を利用して参加してみました。

ちなみにガリアのトップですが、ジョゼフが王位をシャルルに譲りました。宰相として今では辣腕を振るっているとか。ジョゼフの頭脳はチートですから今後が怖いですね。うちの国の鶏がらさんもかなり有能なんですけど、周囲に味方がいないですからねえ……。

まあ、そういうわけで新トップのお披露目にもちようどいいと思っただのか、忙しいこの時期にも関わらずシャルル王が参加しています。シャルルの社交的な性格の方が外交に向いていますし、城はジョゼフがいれば何とでもなるのでしょいうね。

僕はシャルルと同じ年で同じ風のスクエアメイジになったというところで、相手も興味を抱いたらしく話をする機会がありました。

娘のシャルロットとも挨拶をしましたが、どうやら正体はばれなかつたみたいです。二年後と言っていたのにここではばれたら台無しです。

あ、ジョゼットとテファは家でお留守番ですよ。あの子たちは社交界にデビューさせていません。魔法学院に入学する前のトリステイン貴族は社交界に顔を出さないのも珍しくないのですしね。ゲルマニアでしたらもっと小さい頃から連れまわされるみたいですけどね。

その他の国のトップクラスの人たちとも話をしたりもして、この人が原作のあのキャラかという感慨深い出会いもありましたが。

一番の目玉は、やはりアンリエッタ王女との再会です。彼女も僕を覚えていてくれたようでちゃんと名前を呼んでもらえました。

そこでルイズからも改めて紹介され、彼女に魔法を教えていること

ヤカトレアの病気が治り、僕が治療を手伝ったこと（実際に治したのはテファのお母さんですが、彼女はエルフなので水のスクエアとトリアングルである父と僕が治療を施したという設定です）などをとても嬉しそうに話します。アンリエッタ王女も自分のことのように喜び、僕に感謝の言葉をくださりました。

その後はルイズと一緒にアンリエッタ王女の話し相手兼遊び相手になり、うちで扱っているトランプなどを使って遊んでいるうちに彼女と大分仲良くなりました。

そうこうするうちに二週間の予定の園遊会も半ばが過ぎ、今晚ウェールズ王子が到着する予定だと連絡が入ります。

さあ、作戦決行です。アンリエッタ王女と一気に距離に縮めるチャンスです。常に彼女の側についているガリアの密偵（僕が王家の血を狙っていると言ったので、アンリエッタ王女には監視がついていました。北花壇騎士団のようです）の目を誤魔化してアンリエッタ王女が一人で抜け出せるようにします。

原作のウェールズ王子の立ち位置を僕が奪う……というのでは芸がないので、僕は先に湖で水浴びをすることにしました。風と水が得意という設定で作った水中移動の魔法と水中呼吸の魔法を使って潜り、アンリエッタ王女が来るのを待ちます。

ルイズが今日は両親の元に戻っていることもあり、暇を持て余した彼女は原作どおりに湖の端を歩いているようです。そのままこっそりと人払いの结界を張り、ウェールズ王子をはじめ誰も近づけないように隔離します。

そして、ついにアンリエッタ王女が湖に入ってきました。水浴びを始めたみたいです。

ここで僕が浮上を開始します。

驚かれました。

まあ、突然目の前に裸の少年が出てきたら、それが知り合いでもびつくりするでしょう。

僕は慌てず騒がず、新魔法の練習をしていたら、誰かがやってきたので様子を見にきたと言いました。

両手で胸を隠しながら、全く隠すことをしない僕にチラチラ目をやりつつ、新魔法という単語にちょっと反応するアンリエッタ王女。ちなみにルイズたちのお風呂で慣れているので見られても恥ずかしがる僕ではありません。

折角こんな綺麗な湖にきたので、水中を自由に移動できる魔法を作ってみたと言明し、試してみますか？と誘ってみます。

アンリエッタ王女が頷いたのを確認して、まず水中呼吸の魔法をかけます。そして水の中に移動し、呼吸ができているのを確認した後、彼女の体を抱きしめました。びつくりする彼女をそのまま水の世界へと案内します。

一つの生き物のように抱き合ったまま、月下の湖を自由に泳ぎ回る僕とアンリエッタ王女。世界がぐるぐると回り、一緒に作ったライトの光に照らされて幻想的に移り変わります。美しい湖の夜の姿を二人だけの特等席で眺めます。

どれほどそうしていたのでしょうか、時を忘れて楽しんだ後、夜空を見上げるように湖上に浮かび上がりました。

月明かりに照らし出された美しいアンリエッタ王女。年相応の普通の少女のように僕に笑いかけてくれます。

目が合い、自然と顔を寄せ、二つの月の輝く下でキスをしました。アンリエッタ王女の両手が僕を強く抱き締めました。

その後は、毎晩のようにアンリエッタと二人で宿舎を抜け出し湖へと繰り出します。

生まれたままの姿になった僕たちは、誰にも見られることのない水

中で互いを抱き締め、時を忘れて口づけを交わし、愛の言葉を囁きます。

その途中で将来の話をして、僕は今まで誰にも言ったことのない夢をアンリエッタに打ち明けました。彼女は少し悩みましたが、僕の夢についていくと言ってくれました。玉座は欲しがらる誰かに譲ればいいでしょう。どうせボロボロな国なので大差ありません。

喪に服しているといって王位につかなかった王妃には何も言わせる気がありませんね。現状の原因はあの人ですから。ただ、今まで頑張ってくれた鶏がらさんには申し訳なく思います。心労で今度こそ死にそうな気がするので胃薬を作っておきましょう。

園遊会での最後の晩、アンリエッタは水精霊に変わらぬ愛を誓い、僕もまた誓いました。

……その途中で水の精霊が出てきて、なぜか僕を稀なるものと呼んで気に入られたみたいです。

驚くアンリエッタを他所に勝手に僕についてくることになり、アンリエッタが嫉妬を焼きました。水の精霊の力で遠くと通話できる水鏡の魔法を教えてください、僕といつでも連絡が取れると知ると機嫌を回復しました。

水の精霊は離れていても一つという性質を利用しているそうです。

この魔法を利用したらずくに電話ができるのでしょうけど、騒ぎになること間違いなしなので他の方法を探すしかないですね。

秘密の湖（後書き）

アンリエッタ王女即落ち&水の精霊お持ち帰り。

落ちるの早いな〜と思いましたが、ウエールズ相手でも一目惚れみたいなものだと思ったのでこれでいいかと。異論は認めます。

水の精霊は主人公が他の人間と毛色が違うと気づいています。神の力の残滓とか感じているのかも。

僕の考えた最強装備

なんだかんだありましたが、僕ももう14歳。来年から魔法学校に通います。

ルイズ、テファ、ジョゼットも一緒にいてくるので賑やかな学園生活になるでしょう。しかし、三王家の虚無娘が揃い踏みとは……先生も大変そうですね。

僕も風4水3土2火1と階段状になっている設定、ぶつちやけこれ以上何を学べと？ 水をスクエアにしてもいいんですか？ 火と土をトライアングルに上げちゃっていいんでしょうか？ いっそ全部スクエアでも大丈夫でしょうか？

まあ、学園でのあれこれは横に置いておき、12歳の頃に僕が作り出した家臣団というか、もはや商会のその後の話です。

現在、マジックアイテムの販売も始まり構成員は三百人を突破しました。少ないと思うかもしれませんが、亜人でないメイジは全員スクエアだったりします。

異常です。

もちろん、トップであるマチルダさんとカトレアさんもスクエアです。

本人たちは僕の家臣になれた喜びが限界を突破させたと言っていますが……ええ、嘘のような本当の話です。

さらに亜人の子たちも鍛錬によってますます腕が上がり、魔法を使わずに一人でメイジ殺しを一ダース単位で相手が出来そうなくらい強くなりました。本気になるとこれに精霊魔法が加わります。

思えば設立から早十年。

とんでも戦闘集団になりましたが、容姿は全員とも美少女で文官と

しても有能、僕に忠実で僕を愛する部下たちばかり。更に我が領の女子校の卒業生は今でも僕の家臣団に入ることが希望してくれていますし、僕はハルケギニア一幸せな男でしょう。

ああ、学校の生徒たちですが、流石にもう夜の見回りは行なっていません。ですが、どうやら上級生が僕の代わりに夜の見回りを行っており、小さな子の添い寝をしてやりながら僕をことを布教しているようです。

夜、眠るときに昔話を語り聞かせるように、僕の話が聞かされ育った少女たち　「冗談じゃなく洗脳、女子校の内部はかなり宗教染みてきています。授業の見学に行ったとき、話しかけただけで感激して気絶した子もいました。原作でギーシュがアンリエッタに声をかけられて気絶していましたが、まさにあんな感じです。

男子校の卒業生の方はと言うと普通に父に仕えます。実家の家臣団は男だらけだそうですが、元からそうなので構わないでしょう。父に何人が回して欲しいと頼まれたので本人が希望するならいいですよ、と言っておきました。希望者はいないようです。

男子生徒に人気のあつた兄ですが、念願叶って二年前に魔法衛士隊に入隊しました。現在は王都でスマートフォンに乗っているそうです。でも、スマートフォン隊の隊長って……まあ、大丈夫ですよ？

ああ、女子卒業生が全員僕の家臣団に入って僕の商売を手伝っているのです、女子校の運営費は全て僕のところ負担することにもなりました。これを機会に設備を一新し、商会用の建物や職員宿舎も新設。エルフの技術によるエアコンやクーラーも設置していますし、薬草栽培用の植物園なども作りました。屋内プールのある学校は多分うちだけでしょう。

ちなみに作ったマジックアイテムの販売先の最大手がうちの実家で、その時にかなり割引をかけています。土地代とか含めていろいろと便宜を図ってもらっているのです、そのお返しです。

父はほぼ原価に近い値段で売ったマジックアイテムを付き合いのある貴族の人たちに配り、いろいろ悪巧みに利用しているらしいです。別にどう使おうと構いませんが、少なくとも捕まるようなことだけはやめて欲しいですね。家名を捨てるような事態は避けたいですから。お母様がいるから大丈夫でしょうか？

そんな家臣団商会はとうとう王都まで進出しました。貴族御用達のお店を大通りに開いています。大通りと言ってもあの狭い道ですけどね。

学院から王都の店までは馬で二時間の距離ですが、毎日往復するには時間がかかり過ぎます。フライで飛ぶのも疲れますし。

あの黄金の爪のグリちゃんも大きくなったので騎獣に使えますが、あの子の背に乗れるのは二人か三人。僕・ジヨゼット・テファ・ルイズの四人では残念ながら乗れません。

なので、学院内に店舗ができるそうです。

ええ、僕に毎日顔を出して欲しいという可愛い部下たちの願いです。テファとルイズが心配という二人の姉心もあります。

日本の購買のように学習道具なども扱いつつ、貴族向けの高価な品も店頭に並べる予定だそうです。デパートに近いかもしれません。休日のたびに馬を出して王都まで出向くのも面倒ですからね。

店員は壮絶な死闘の末に一ヶ月交代制に決まりました。

美少女の店員さんが出迎える貴族御用達のお店、お金持ちな貴族の子弟たちがこぞって買いに行く光景が目に見えます。もちろん商品開発は女性、しかも学生たちと大差ない年の少女たちで貴族社会にも精通しているとあつては女生徒向けの商品も充実しています。

大繁盛間違いなしですね。

ああ、そうそう。代表を務めるマチルダさんとカトリアさんが学院長に出店の許可を願ったところ、二つ返事でOKも出されたそうです。

す。その時はスカートの中にスパッツを履く様に厳命しましたが、それはともあれそんなに簡単に学院内に部外者を入れていいんじゃないか。

次はうちの主力商品の紹介でもしましょうか。

まずマジックアイテム。一番の人気商品は電話です。ついに開発しました。水の精霊の力ではなく風系統の魔法を使った電話です。電気ではないし、通信先も一つしか設定できないですけど電話です。大きさは電話ボックスに入っているあのサイズ、かなり重いです。背負って移動とかは不可能ですね。

小型化は可能ですが、携帯電話を流行させるとどんな事態になるのかわからないので止めました。敵は今のところいませんが、下手に技術を進ませるとどういうことが起こるかわかりません。情報の伝達は重要ですので、意図的に制限をかけています。

それでもこれだけ大型なのに貴族・軍・商人を相手にけっこう売れています。定点に使う分には十分なのでしょう。

秘薬関係では、この前作った若返りの秘薬。

あれは寿命も延ばすので流石にそのままでは販売していませんが、女性のスタイルが良くなる部分だけ別の薬として売り出しました。つまり胸が垂れない薬。

バカ売れです。

どこぞの貴族とかが、愛人何人居るんだよと思うほど大量に買っていたりします。ウハウハです。

他にヒップのラインがきゅっと引き締まる薬も売れています。ぼろ儲けです。

マジックアイテムや秘薬を売り出してから跳ね上がった資金を使い、

ちよつと真面目な物も開発しました。

エルフは精霊の力を込めた火石や風石などを作れるのですが、エルフの子たちと研究を進めて金属に精霊の力を込めることに成功したのです。

作成だけでなく加工にも熟練の精霊魔法の使い手が必要とするので、人間がこの技術にたどり着く日は来ないかもしれません。

試験の結果、精霊の種類による金属との相性があるらしく、風は銀、火は金、土は鉄です。水は金属と相性が悪いようでした。

そして、それぞれの精霊金属を風銀、火金、土鋼と呼ぶことにしました。

どれも普通の方法では傷一つつかない強度があり、精霊の力が籠っているので魔法耐性も高いです。スクエアメイジの錬金すら弾きま

す。多分、虚無の爆発クラスの威力が必要でしょう。

その上で、ミスリルは羽のように軽く、ヒヒイロカネは炎を吹き出し、アダマンティスはとつもなく重く硬いという特徴があります。また、水の精霊の力を借りて水石から糸を作り出すことに成功しました。これも他の精霊金属と似たような性質を持ち、これは水系と名づけます。ダマスカスは鋼の鎧すら切り裂くほど丈夫で伸縮性にも富み、汚れなどは自動で洗い流します。ちよつと取り扱いに注意ですね。

この四種の精霊物質は完全に情報を秘匿した上で、家臣団の装備に使用しました。

防具はダマスカスで編みこまれた深い紺色の服と、着脱可能な銀色の混ざったガラスのような材質のミスリルの部分鎧。動きやすさを重視し、鎧を外せば店での制服にもなります。もちろんスカートです。

これまでの装備よりはるかに軽量で防御力も高く、魔法にも耐性があり、汚れも勝手に落ちるといふ夢の服に家臣団の子達も喜んでいました。ダマスカスは色が青しかないが残念ですね。

さらに武器にはヒヒイロカネやアダマンティスも使い、各自の好みに合わせた完全オーダーメイドです。ミスリルのレイピア、ヒヒイロカネの槍、アダマンティスの斧やダマスカスの鞭など、多種多様な武器を使っています。

これを売りに出したら国家の重鎮が頭を下げて買いに来るでしょうね……それだけバランスブレイカーな装備になりました。特に軽くて丈夫な防具は貴族が大枚を叩いても買ったがる垂涎の品でしょう。もちろん情報規制です。

現在、それぞれの精霊武器に魔法を付与する研究をしているので、それも完成したらうちの家臣団に勝てるものがあるかどうか……。

こんな感じで各方面の力を蓄えながら、僕は魔法学院に入学しました。

それぞれの視点から【上】（前書き）

ちよつとだけウィルではなく他の登場人物からの視点となります。
口調とかこうじゃない？というご意見がありましたらどうぞ書き込んでください。原作が手元になくて正直うる覚えの人も何人か……。

それぞれの視点から【上】

【父】

我が子は天才だ！

私を知る全ての人間の中でウィル以上に優秀な人間は存在しない。それは12歳でスクエアになるという抜きん出た魔法の才能だけではない。

たった五歳で平民からメイジの家系を見つける魔法を作り出し、私に彼らを登用するように提案し、さらに才能のある子供を学校に入れて教育を与えるという将来さえも見据えた発想。

本来人間と敵対している亜人さえも受け入れ、領民と融和させることに成功した行動力、カリスマ。

さらにはヴァリエール公爵家をはじめとした多くの貴族と顔をつないでおり、いまや息子の家臣団で開発した秘薬やマジックアイテムを手にしていないトリステイン貴族など数えるほどしかないだろう影響力。

長兄であるスザクに我が家の家臣と領地を継がせたとしても、ウィルなら何の問題もあるまい。逆なら少々不安だが、むしろ重荷がなくなつたと喜ぶかもしれないな。

ただ一つ気がかりがあるとすれば女性関係だが……英雄色を好むという言葉もある。

あの子が間違いなく歴史に名を残す人物である以上、思いを寄せる女性が多いのも仕方のないことだろう。

この私の息子だしな！！

現状、私の見ている限りでは女性同士の関係も悪くはないようだし、

背から刺されるようなこともあるまい。

ならば例え父であろうと口出しするのは無粋というもの。借金だらけなのに女を囲うグラモン家の当主などとは比べるまでもない。

いつの間にかここまで大きく育ったウィルよ。

学院を卒業する頃にはどのような男になっているのだろうか、全く予想もつかない。

私は、未来が楽しみで仕方ない。

【母】

ウィルは本当にいい子で、スザクもジョゼットも、あとルイズちゃんもテファちゃんもマチルダちゃんもカトレアちゃんも、みんない子ばかりだわ。

ああ、早くみんなの晴れ姿が見たいわね。初孫はいつになるのかしら。

あ、でも、スザクのお嫁さんがいつになったら見つかるのかは不安だわ。

もう25歳なのに、あの子ったら恋人の一人も連れてこないで。今度お見合いでも勧めてみようかしら？

【兄】

毎日の厳しい鍛錬に何も考えることができずベッドに倒れ込む。

夢を見ることもない深い眠りから目覚め、また今日も一日が始まる。日々の訓練や街での巡回の際に、隊長からお前が一番真面目だと感心されたが、本当はそうじゃない。

僕はただ、逃げているだけなんだ……。

マチルダさん……。
そして、カトレアさん……。

ああ、どうして二人のことを考えるとこんなに胸が痛むのだろう。
二人の女性を愛するだなんて、許されないことなのに……。

脳裏に浮かんだ二人の笑顔を振り払い、今日も仕事に集中する。
そして、いつの日か自分の心が定まったときは、故郷へ帰りプロポーズを……。

あ、あれは！

マチルダさんとカトレアさん？！

なんで二人が王都に……ここは、確かウィルが始めたという店……

あの制服は、まさかここで働いているのか？

そんな、ああ、一体僕はどうすれば。

ブリミルよ、どうか僕をお導きください！

【ジョゼット】

お兄様から私の出生の秘密を聞かされました。

家族の誰とも違う青い髪　　ガリアの青。

以前、お兄様が参加されたマリアン又王妃さまの御誕生を祝う園遊会に、ガリア王シャルルの娘が参加していたそうです。

シャルロット。私と瓜二つの姿をした、双子の片割れ。

薄々私が養女であるとは気がついていましたが、まさか王族　大
国ガリアの姫だとは思いませんでした。さらにはガリアの王家
に伝わる双子の禁忌故に、もしかしたら殺されてたかもしれないと
いうことも。

そして、どうしてこの家に預けられたのかを知り、更に衝撃を受
けます。

お兄様が一歳を数えたある日、生まれたばかりの私がお兄様のベッドの中で一緒に寝ていたそうです。

私が引き離されそうになるとお兄様が泣いてそれを止めた、とお母様にこっそり教えられました。だから、私はこの家で、お兄様の妹として育てられたのだと。

それが如何なる奇跡の成せる業なのかはわかりません。

ただ、私はお兄様の妹でいられてよかった。この家で、家族とともに育てられてよかったと思っっています。

お兄様に出会えて　そして、血が繋がっていないで本当によかったです。

【テファ】

あの日、私たちは死ぬのだと思いました。

とても恐ろしい顔をした兵士の人たちがやってきて、エルフを殺せと叫んでいるのが聞こえました。

どうして？

お母様はブリミル様に毎日お祈りをしています。私も同じです。

例えエルフの血が流れていようと、私とお母様は人を傷つけたりはしません。

なのに、どうして……。

あの日、私たちを救ってくれたのは私と同じくらいの年の男の子でした。

魔法を使って私とお母様の顔を変えて逃げるのを助けてくれて、そのまま彼のお家でお世話になることになりました。

どうしてエルフの血が流れているのに助けてくれるの？

そう問いかけた私に、彼は笑って、エルフの血が流れているから助けたんじゃない、テファだから助けたんだよ、と言いました。

それはとても自然な言葉で、本心から言っているのがわかりました。この人は私を守ってくれる人。

そして、私の居場所になっってくれる人。

あの家で生まれ育った私の、初めての……。

……あの頃は友達だと思っていたんですが、今はちよつとだけ違います。

【マチルダ】

信用できない。

それが私の最初の印象。

テファと同じくらいの年なのに強力な魔法を使い、兵士たちを次々に眠らせ、記憶を変えて私たちが死んだことにした。その後は顔を变えてトリステインに渡り、彼の家に匿われた。

何故、彼がそこまでしてくれるのか理解できなかった。

シャジャル様のことを狙っているのか、それともハーフエルフとはいえ王家の血が流れるテファが狙いなのか。

世間知らずな二人を私が守らないといけない。

そう思つて、私は必死に両親の死から眼を背けていた。

けれど、私たちが連れて行かれて会ったルルーシュ・ド・ランペルージ侯爵は、テファを政争の駒には使わず。

エルフであるシャジャル様への風当たりが強いだらうかと思つと、他にも里を追放されたエルフたちが領地において。

拍子抜けするほど平和な日々が続いた。

フェイスチェンジの魔法をかけたテファが町中を普通に歩けるのを見て、今までの苦労はなんだったのかと思つてしまふほどに。

それまで張り詰めていたものがなくなつたからだろうか。

私はあの日の夢を見るようになった。

私たちの家で、みんなが生きていて、幸せそうに笑っていて。けれど、突然、その幸福が失われる。

モード様が処刑され、父と母もそれに後を追う様に殺され、シヤジヤル様もテファも私の目の前で血の海に沈む。生まれ育つた館が火の海に沈み、楽しかった思い出全てが燃えてなくなってしまう夢。

いつの間にか私を抱き締める腕があつた。

涙を拭ってくれる指があつた。

泣いている私を、何も言わずに抱き締めてくれる人が居た。

いつの頃からだろう、それに安らぎを覚えるようになったのは。

ずっと抱き締めていてほしいと思うようになったのは。

彼が私を支えてくれたように、私も彼も支えてあげたい。ずっと側にいたい。

私は、彼に恋をした。

それぞれの視点から【上】（後書き）

明日はルイズから。ピンクのモフモフはかなり長くなりました。

それぞれの視点から【下】（前書き）

今回は出だしがルイズからです。登場人物の口調などに指摘がありましたらどんどん教えてください。

それぞれの視点から【下】

【ルイズ】

何で？

私は魔法が使えないのに、何でこんな奴がスクエアになってるの？
おかしいじゃない！
毎日毎日練習して、それなのにコモンすら失敗して、この私が惨めな思いをしているのに……なんでなのよ！

……何、あんたの妹、魔法が使えないの？ コモンすら？ へえ、
そうなんだ。

……。

……初めて聞いたわ、私と同じように魔法が使えないって子。私の
一つ下かあ……。

……その子、どんな気持ちなのかしら。

……私と、同じなのかしら……。

……嫌だけど。あんな奴にまた会わないといけないのは本当に
嫌だけど、あいつの妹っていう子が苛められてないか、立派なトリ
ステイン貴族として確かめに行くべきよね。

私より年下の子かあ。もしかしたら、お姉様って呼ばれちゃうのか
しら。それも悪くないわね。私もちいねえさまみたい……うふふ。

よし、決めたわ。あいつのところに行くわよ。

そうね、会ったこともない子をいきなり尋ねるのも無礼だし、しゃ

くだけど魔法を教わりに来たということにしましょう。
私が魔法を使えないって知ったらその子はどんな顔をするかしら……。

……何なの？

馬鹿にされるかと思っただら何も言わないし、あの子も普通にしてる

……何で、何も言ってくれないの？

え？ 魔法を使ってほしい？ わ、わかったわ。

……わかってるわよ、四系統のどれにも向いていないなんて！

スペルを唱えても何か違っていて、リズムがあわないってわかるのに、私にはどうしようも……え？

え、ちょ、ちよっと待って。

『爆発』……？

新、系統……？

何、それ。知らない。私、そんなの聞いたことないわ……。

私が……新しい魔法の、可能性……。

私の、魔法……。

……私、落ちこぼれなんかじゃ、なかったんだ……。

…………ちょ、調子に乗るんじゃないわよ！ ちよっと気を許したら、だだだ抱き締めたりなんかして！ ああああ頭も勝手に撫でたり、きききき気持ちよかったなんて思っただけだから！！

まったく、油断も隙もないっただら…………え、亜人？ 亜人って人間の敵じゃないの？

精霊魔法……より魔法を理解する……そんな考え方が……。

……すごい。

悔しいけど、やっぱり、こいつすごいメイジだわ。

今の私じゃ、……ううん、お父様やお母様でもこんなこときつと考
えられない。

たまたま才能があつて、運よくスクエアになれただけだと思つたの
に、本当に真剣に魔法について考えてる。

魔法とはこうなんだ、っていう考え方がこの人にはない。

他の人と全然別のものを見ているんだわ。

……バカみたい。一人で勝手に敵視して、一人で空回りして、それ
なのにちよつと話しただけで、……尊敬、してる。
うゝ。

いいわよ、私が新魔法を使うための踏み台にしてやるんだから！
そんな顔していられるのも今だけよ！

……え？ 異端、審問……？

………いいい、いやああああああ！！！！

で、その後も先生がちいねえさまの病気を治してくれたり、…
…な、なんでか知らないけど、ちいねえさまのせいでいいい一緒に
おおおお風呂に入ることになつちゃつて、っそそそそれに私た
ちまだ結婚だつてしてないのに、いい一緒のべべべベッドで、その、
あの……。

ちや、ちゃんと責任取つてよ、ね？

【カトレア】

そうね、一目見たときから気になっていたのかもしいわ。

この人は、他の人とは違う、つて。

ルイズの系統を虚無だと言つたときも素直に信じられたし、もしか

したら私の病気が治ると言われて……珍しく期待してしまったの。もう納得した　いえ、諦めていたはずなのに、この人ならって。もしかしたら一目惚れだったのかしら？

私ができないようなことでも軽々とこなしてしまうあの人に、憧れ以上の気持ちを抱いていたのかも。

うふふ、意外と自分のことはわからないものなのね。

折角あの人にもらえた命だもの、今度こそ私は私の好きなように生きてみたいの。誰かの迷惑になるんじゃないかって不安に怯えて、動物たちと一緒にただ死を待つだけの時間はお終い。

あの人を誘ってくれた商会でいろいろな物を作ったり、まだ行ったことのない場所へ行って、たくさんの人と出会って。

私の知らなかった世界はこんなにも広い。やりたいことが次々に出てきて困ってしまうわ。

でも、一番の望みは……あの人と死ぬまで一緒にいること、かもしれないわね。

【シャルロット】

あの日、お父様は殺され、お母様は私の代わりに毒を仰ぐはずでした。

その後、私はどうなっていたのかしら？

伯父様がお母様の願いを受け入れて、私が生かされたとして……どうやって生きていけばいいのでしょうか？

大好きな両親はいない。

謀反の罪で我が家も取り潰され、協力を申し出てくれた貴族たちも

みんな伯父様に殺されてしまったに違いない。

私を待ち受けていた未来は、決して明るいものではないはずでした。でも、あの日、『魔法使い』が来てくれたから、私は大切な父と母を取り戻せました。

たった二年間だけでも、またあの家で過ごすことができました。

お父様は伯父様とも仲直りをして、この国をより良い国にするために励んでいます。

後継者のことはまだ決まらないけど、きっとこの国は未来は明るいでしょう。

だから、私は約束通り、自らトリステインに赴こうと思います。

『魔法使い』が私に与えてくれた掛け替えのない幸せに報いるために。

あの日の言葉に後悔はありません。

お父様もお母様も、家のみんなも心配してくれるけれど、あの日、あの人がいなかったら私を心配してくれる人だっていなくなっていたはずですから。

何が待ち受けているのか恐怖があります。

でも、きっと、大丈夫。青の欠片も見つけ出してみせます。

だから、待っていてください、『魔法使い』さん。

【イザベラ】

あの日のことは今でも鮮明に覚えているわ。

私をまるで物のようにお父様から譲り受けて、さらには醜いとまで言い放ったあの男。

それに、心を解き放てなんて偉そうなことまで……そう、そうね。

確かに、私はお父様と同じ無能と呼ばれることを恐れていた。従姉

妹のシャルロットの魔法の才に嫉妬していたわ。

でも、それももう過去のこと。

私の誇りに傷をつけたあの男に対する怒りで、今、私の心は燃え上がっている。あの日の光景を思い出すだけで力が湧き上がって来るのを感じるわ。

そのおかげか魔法の腕が上がったことは複雑だけど、あの男だけは絶対に許さない。

嫌いだった勉強もしたし、マナーも一から覚えなおした。

言葉遣いや所作にも気を使うようになったし、教養を身につけて、どんな殿方とだって楽しく会話できるような話術も覚えた。

コンプレックスを抱いていたエレーヌにだって負けていないはずよ。

さあ、覚悟することね、『魔法使い』。

あなたが迎えに来るまで待っているなんて冗談じゃない。

今度こそ、私のことを美しいと言わせてみせるわ！

【アンリエッタ】

あゝ、早くウィルさまと会いたいわ。

あら、マザリーニどうしたの？

え？ 城を抜け出すのをやめてほしいですって？

でも、この城の中じゃウィルさまと会えないじゃない。だから諦めてちょうだいね。

ああ、次の虚無の曜日が早く来ないかしら。
ウィルさま。

……もう、なんです、さっきから！

レコン・キスタ？ 聞いたことありませんわ。

アルビオンのことなど知りません、あなたがどうにかしなさい。

ああもう！ 私は（ウィルさまのことを考えるので）忙しいのです、お下がりなさい！

原作キャラが入学しました

入学式は原作通りでした。学園長も二階から飛び降りてテーブルに……もう年ですね。

で、シャルロットとキュルケを探したところ、いました。隣あった席に座っています。

ただ、シャルロットはかなり原作と違っています。

シャルルが殺され、いろいろとあつて12歳のまま成長が止まったかのように見えた原作タバサ。

こっちのシャルロットは普通に14歳に見えます。表情にもやる気が漲っているように思えますし、ゼロ魔一のクールロリはこの世界には存在しないようです。あ、ジョゼットも食生活が良かったせいか原作より大きくなっていますよ。

大きさはジョゼット≠シャルロット>モンモン>ルイズという感じで、ジョゼットの髪の色とシャルロットの眼鏡以外は二人ともそっくりです。見る人が見たらすぐに気づくかもしれません。

あと、もう一人意外な人物がいます。

イザベラです。

ガリアの王宮にいたと思ったのに、あの人何してるんでしょうね……青い髪二人は目立ちます。二人とも眼鏡かけていますけど、両方とも度は入っていないので変装用みたいです。シャルロットはそこまで本好きじゃないかもしれません。

でも、イザベラは以前とはまるで別人のようです。オーラを纏っているというか、姿勢も美しく全身に意識が行き届いているのがわかります。原作のだらけっぷりとは別人ですね。

彼女はちよつと年上なので気迫のある美人、クールな女子大生みたいな感じですか。あれ、年齢いくつでしたっけ？ まだ17歳くらい？

まあ、女性の年を詮索するのはやめましょう。

で、シャルロットとイザベラが隣に座って話をしているので、キュルケは一人で本当に暇そうにしています。

これは……原作の親友フラグの危機でしょうか。僕に関係ないのでどうでもいいんですけど。

キュルケは制服のボタンもけっこう際どいところまで外しています。ゲルマニアの女性の野生的な美しさという奴ですね。

ただ、確かに色気はあるんですけど……アンリエッタの方が魔性の魅力といいますが、蟲惑的な色気があります。胸の大きさならテファの方が上ですし、残念ですが彼女の色香に迷うことはなさそうです。美人なのは確かですけど。

式は特に騒ぎも起きずに終了しました。クラス分けは僕たち四人がイルのクラス。ギーシュやモンモンがシゲル。シャルロットたちとキュルケがソーンのクラスのように。このクラス分け、絶対何か圧力がかかっていると思います。

自己紹介をする時、ジョゼットたちに向けられる視線がすごいです。ちなみにジョゼットは髪を黒に染めるマジックアイテムのペンダントをつけています。黒髪・青い瞳で僕と同じ色合いですね。

テファにも耳が丸く見えるアイテムをつけてもらっているのでハーフェルフとはばれないでしょう。人に向かってディテクトマジックをかけるような不躰な輩がいたら僕がマナーを叩き込んであげますしね。

一躍クラス中の話題を独占した三人ですが、ジョゼットは気品と優雅さに溢れていてちょっと近寄りがたいクール系美少女。この辺はシャルロットやイザベラとも少し似ているかもしれませぬ。

テファは神秘的な美貌に今にも張り裂けそうな魔乳という破壊力バツグンの組み合わせ。男どもの視線がどこに向いているのか手に取るようにわかって不快ですね、この素晴らしい物は僕のものです。ルイズはすっかり性格が丸くなり、それが顔立ちにも出ているのかとても可愛らしいです。さらにあのヴァリエール公爵家のご令嬢と知って皆さん目の色を変えました。取り入ろうとも思っているんですよ。

虎視眈々とお近づきになるチャンスを狙っていますが、ルイズが魔法が使えないと知ったら掌返すような生徒ばかりなのでしょうか。それは性格も捻じ曲がるというものですよ。

ああ、入学早々にナンパを繰り返す輩は僕が教育しておきました。どこからともなく現れ、テファの胸が本物かどうか確かめさせてくれとか、薔薇の人はバカの人だったようです。今ならもれなくエアハンマーをプレゼントですよ。

魔法の授業は今日はないみたいで、放課後にジヨゼットたちと一緒に校内の購買に顔を出したところ、みんな忙しそうに接客を行なっていました。お客さんは二、三年生が多いみたいです。

早速復活したのがギーシュが店員の子をナンパしているのを見ましたが、カトレアさんが出てきてギーシュに話しかけました。少し会話をした後、彼は満足そうな顔で薔薇の香りのするシャンプーを買って帰りました。

カトレアさん、いつの間にあそこまで接客スキルを上げたのでしょうか。いえ、元から穏和な空気とヴァリエール家の次女という身分もあって、貴族を相手に商売するのに一番向いている人だったんですよ。

うーん、傍から見てると生徒たちが手玉に取られているのがわかります。

平民相手に無理を言うような貴族の子女もいますし、これで安心し

て任せられそうです。

いつまでも外に突っ立っているのも邪魔なので裏に回って中へ。奥で帳簿をつけていたマチルダさんを交えて夕食の時間までお茶を飲みつつお話をしました。初日の売り上げは予想以上になりそうです。

夕食は原作どおりのポリウムで見ているだけで胸焼けします。

三人に目を向けると、同じくげんなりしているのがわかりました。味はとても美味しくてさすがマルトーさんですが、こんなに食べたら確実に肥満になりますよ。

近くに座っていた丸っこい犬に残りをあげたらとても喜んでいました。ジョゼットたちもあげていましたが、今後は量とか加減できないか聞いてみるべきでしょうね。三人が太ったら大変です。

その後は寂しがるジョゼットたちと別れてそれぞれの塔へ。こうして学院生活一日目は終わりました。

風の犠牲者

二日目、今日から魔法の授業があります。

最初は水の授業でしたが、コンデンセイションとか普通は杖を持ち始めた頃には練習していますよね。

ずっとやり続けさせられて飽きてしまいました。この学院の授業はずっとこんな感じなんでしょうか。

超実践主義といいますが、座学がほとんどないってどうなんですか？ ジョゼットたちはもちろん四系統魔法が使えませんでした。今は温かい目で見ている男子と馬鹿にしたような目で見ってくる女子に分かれているみたいですが、一年後はどうなることやら。

ところで。休み時間の度にギーシュがわざわざうちのクラスまでやってきて熱心にテファに絡んでくるんですけど、どうしましょう？

モンモンじゃなかったんですか？

まあ、彼女は彼女でうちであつかつている例の大人気商品、垂れずにキュツとなる薬について必死に探ろうと僕のところへやってくるのですが。

もちろん企業秘密です。あの薬のおかげで他の貴族の人たちからもさらに一目置かれるようになったと父が言っていました。その人たちはうちが卸さなくなるのを恐れているんでしょうね。本当に人間は欲望に忠実です。家が火の車らしいモンモンが狙うはずです。

でも、おかしいですね。指輪が盗まれていないことは水精霊に確認済みなんですけど。

あれ、彼女の実家の財政難の理由ってなんでしたっけ。

……あ、水精霊に向かって床を濡らすなど言っつて、交渉役を降ろされて干拓にも失敗したからでしたっけ。

それはもう、自業自得としか言いようがありません。むしろ水位が上がっていないだけ原作よりましですよ？

お昼頃、決闘騒ぎがあつたので見学に行きました。

シャルロットVS見知らぬ少年。どうやら風メイジらしいので原作のロレーヌとかいう貴族でしょう。風サイコーな先生の授業が原因でしたっけ。

一方的に挑発している彼に、シャルロットがかなり怒っているのが伝わります。名前のことや両親のことでも馬鹿にしたんでしょう。原作では私生児とか散々侮辱していましたが、この学院には高貴な身分の方が偽名で入学することもよくあると父から聞いています。その辺の事情を彼は親御さんから教えてもらえなかつたんでしょうか。

知らないとはいえ一国の姫を相手にあんなこと言ったら、普通に国際問題ですよ。彼が侮辱したシャルロットの両親とはガリアの国王と王妃ですからね。

イザベラは観客に埋もれてニヤニヤ楽しそうに笑っていました。少年が無様に倒されるのを期待しているみたいです。

勝負の結果は一瞬。少年の風の流れを変えて本人が吹っ飛び、壁に叩きつけられたところを氷の矢で貼り付けに。とどめに氷の槍もおまけしていました。

よほど怖かったのか失禁しています。頬にかすめた一発によって血も出ていますし、まあかませ犬の彼ならこんなものでしょう。

杖を返そうとして気絶した彼を残し、シャルロットとイザベラは去っていききました。向かう方向は図書館……あそこで青の欠片について探すつもりですかね？ 確実に無駄ですけど。

あ、決闘のその後の話ですけど。

ギトー先生が学園から去って行きました。

どうも、ガリアからの留学生の書類にきちんと目も通さずに生徒た

ちの不和を煽るような発言をしたらしいんですね。

その発言が原因で今回の決闘騒ぎにまで発展し、一国の姫君が死傷するかもしれないような事態に陥ったのですから、当然責任は取るべきでしょう。

今回は大事になりませんでした。下手したら戦争勃発でしたよ？この先生は他の生徒たちにも「今年是不作だ！」と馬鹿にしたような発言を繰り返していたという話もあります。入学したときからトライアングルやスクエアのメイジなんてそうそういないでしょう。トライアングルはエリート、学院の教師レベルですよ。

トライアングルやスクエアクラスまで上がれるように指導するのが教師の本来あるべき姿なのに罵倒するとか、本質的に教師に向いていない人なんですよね。

さらに、何を勘違いしたのか風以外のメイジを見下したような発言も繰り返しており、生まれ持った資質をもとに生徒を差別していたという話も出て、学院長も首を切ったというわけです。

魔法の腕と人間性は別物だと、トリストインの偉い人はいつになつたら気がつくのでしょうか。魔法の力が全てで、力がなければ人ではないなどハルケギニアで一番野蛮な連中です。ゲルマニアを見習ってほしいですね。

他の先生も見たり寄ったりなので、今回のことをきっかけに少しは態度が変わるといいなあ、と願う今日この頃です。

平民の扱い（前書き）

途中でちょっとだけ性犯罪未遂や暴力表現があったりします。
軽めの描写で後味も悪くないつもりですが、気になる方はご注意を。

平民の扱い

さて、トリステインを愛する一貴族として学院長のところへ出向いた後ですが、夕食のメニューに関して相談をするために学院をブラブラと。

そして見つけました、シエスタです。

黒い髪はやっぱり珍しいですね。そして同時に懐かしい気持ちになります。

こうして見ると、顔はハルケギニアの人とはけっこう違って思えます。鼻がちよつと低いですが、それも日本人っぽくて可愛いですね。それに気位の高い貴族連中の中で素朴な感じのする彼女はかなり癒されます。

話しかけたらビクツと震えられて、怖がられているなあ、と思いました。りしましたが、これも貴族に突然話しかけられた平民の一般的な態度でしょう。うちの地元だと顔を知られているので歓迎されるんですけど、初対面の相手に求めるのは無理というものです。

シエスタに食事の量に関して相談したところ、他の貴族から文句が出るので別の料理を出すのは難しいそうです。

なので部屋まで持ってきてもらうことにしました。自分の部屋で何を食べていようと僕の勝手です。

話のついでにシエスタの珍しい髪色について尋ね、タルブの出身だと聞きだしました。

ああ、あのワインの美味しいところか、とタルブ村についてシエスタとちよつと談笑。最初の警戒心も薄れてきたので、タルブの名産というヨシエナベについて聞いてみます。

一度食べてみたいと思っていたので、シエスタに作れないかと聞き、今晚のメニューはヨシエナベを作ってもらうことになりました。シ

エステの手料理ゲットです。

その後、彼女を連れて購買の裏口から中へ。ジョゼットたちがお茶をしていたので、彼女たちの食事も部屋で取れるように手配してもらいました。野菜多めのヘルシーメニューとかがいいですね。

夜。部屋へシエスタがやってきました。昼間言ったとおりヨシエナベをご馳走してくれるみたいですが、緊張しているのが丸わかりです。

まあ、こんな時間に男の部屋にやってきたらどうなるかわからないわかってでしょうし、平民と貴族でその手の話は多いですからね。

ビクビクしているシエスタにヨシエナベの食べ方を聞き、一緒に食べることにしました。命令です。

タルブのワインも仕入れてきたので一本あげ、貴族と同じテーブルで食事することに恐縮仕切りの彼女にも飲ませます。

いや、本当に酒乱ですね、彼女。

故郷の食事とワインのおかげか、あるいは僕がそれほど酷い命令をしていなかったので慣れたのか。

ポロポロと普段溜め込んでいたらしい愚痴が出ることに。

やれ、あそこの坊ちゃんも平民にどうこうで酷いとか、とあるお嬢様は男を連れ込んで云々とか、裏方の人たちしか知らない噂話の類もたくさん口にしていきます。ロコミネットワークは怖いですね。

それに適当に相槌を打ちながら彼女の杯におかわりを注いであげる僕。貴族に酌をさせながら貴族の愚痴を言ったり、なかなか出来ることじゃないですよ。

最後はべろんべろんに酔っ払ってしまったシエスタをベッドに運びました。

ほら、そのまま寝ると服が皺になっちゃいますよ。脱ぎ脱ぎしまし

ようね。はい、ばんざーい。

翌朝。

目が覚めたシエスタが顔色を赤くしたり青くしたり。うる覚えですが昨日のことも覚えているようです。

そんなシエスタを抱き締めながらニヤニヤしていた僕、彼女の抱き心地はとてもいいです。胸も大きいですし、きめ細かな肌触りも気に入ってしまいました。

そのまま彼女に僕の専属メイドになってほしいと言ったところ、少し悩んだあと、受け入れてもらえました。

昨日の今日でまた顔を出した僕に学院長が心なしか嫌そうな顔をしました。気に入ったメイドができたのでうちで雇いますと一方的に宣言。

渋る素振りをしたので、王宮勅使は学院の平民を買い取るのに僕はできないのですか？とそれとなく聞いてみたところ、ぐうの音も言わなくなりました。

それから一週間。

少々嫌な話題ですが、強姦未遂事件が発生しました。

ジヨゼットたちは大丈夫です。彼女たちは貴族ですし、公爵令嬢と侯爵令嬢なのでこの学院の生徒も強く出れません。テファもさる貴族の娘で、我が家の養女ということになっています。

ですが、うちの購買にいる子達はみんな平民。あの店の店員が全員僕の家臣だということを知らず、ただの雇われた売子だと勘違いしている貴族が多かったみたいなんです。店の中なら他の人の目がありませんが、ちよつとした用事などで一人で歩いているとすぐにナンパされるらしいです。

で、その中の一人に、平民相手と侮って力づくでことに及ぼうとした輩が。抵抗するとお前を雇っているランペルージ侯爵家に迷惑が

かかるぞ、とかそんなセリフを吐いたそうです。

ええ、もちろん、その程度の脅しに屈するような我が部下たちでは
ありません。

責任は僕が持つのでそういう場合は容赦するな、殺しても構わない
と言いつけてあります。その貴族は当然のようにボロボロになりま
したよ。

怪我は水の秘薬で治療され、残念ながら後遺症もなかったようです
が、今度はその貴族が僕に逆切れをしてきました。平民にどうい
う教育を施しているんだ！とか戯言をほざく始末。

彼女たちは僕の家臣となる為に十年近い時間と最高級の設備、多く
の資金をつぎ込んで教育を施してきたエリートです。平民を道具と
侮る貴族にもわかるように言い変えますと、丹精込めて作り上げら
れた芸術品であり、僕の所有物なのです。

侯爵家の所有物に手を出しておいて、ただで済むはずがないですよ
ね？

逆切れしてきた相手に、人のものに手を出したらどうなるか、泥棒
の末路というものを体に叩き込んでやりました。決闘です。

いやあ、かなりぶち切れちゃいましたよ。
具体的には相手が杖を落とせないように接着し、口も封じ込めてギ
ブアップを禁止し、傷は負ったそばから回復するという状態にした
上で、恥も外見もなく泣き出すまで延々とエアハンマーを叩き込む
だけの簡単な作業です。

決闘の作法は杖を落とすか、負けを認めるか、傷を負うかしたら負
けですから。

生まれてきたことを後悔し、目がいつそ一思いに殺してください、
と哀願してきたところで、最後はカッタートルネードで止めを刺し

ました。

服を全部切り刻み、上の毛も下の毛もつるつるに。目の毒でしたけどね。

彼はそのまま学院を辞めたらいいですけど、今でも実家の自室から一歩も出れないとか。もはや再起不能でしょう。

え？ お咎め？

生きて家族と再会できただけましでしょう。文句があるならヤリマスヨ？

この事件の後、うちのお店の売り上げが少し落ち込んだそうです。悪質なナンパとかがなくなったのでちょうど良かったですけどね。それでも女子生徒やギーシュみたいな一部の男子が買いに来るので、意外と根性あるなと感心しました。

あと、学院長は最近偏頭痛が酷いらしいです。もう年ですし校長の座を他に譲ったほうがいいかもしれませんよ。

たれアンアン

先日的一件以降、シエスタの態度が変わりました。僕が平民のために他の貴族と決闘したことに感動したそうです。

確かに波風立てるくらいなら平民を切り捨てる貴族の方が多いいですが、僕はそういう貴族とは違つとわかつてもらえたみたいですね。身の回りの世話をされながら色々と話をするうちに、うちの領地のことを聞かれたので話したところ、あまりの環境のよさに最初は信じてもらえませんでした。

改めて考えてみると反則的に住みやすいんですよ、うちの領地。

まず、領主である父や跡継ぎの兄が威張っていません。平民を徒に虐げたりしませんから、それだけでトリストインの他の多くの領地よりずっと恵まれているでしょう。

次に、メイジが大量に居るので領内の平民たちは様々な面で魔法の恩恵を受けることができます。

畑の土を豊かにしたり、農具を錬金によって作られた鉄製品に持ち替えたり。病院では水の癒しを受けることができますし、盗賊の討伐などもかなり頻繁に行なわれています。

魔法の代価を取る場合、その相場は安く、平民でも気軽に依頼ができる値段設定にしています。鉄製品はレンタル料を取って貸し出しですね。

水の癒しの場合、秘薬を使わなければ料金はかなり安いですが。また秘薬を使ったとしても、材料となる一部の薬草を栽培しているのが普通で買うより低価格に抑えています。

領内には鉄道馬車も走っています。線路を敷いて馬に引かせるだけという実に簡単なものですが、これによって領内の流通が一気に潤滑になり、また人の移動も活発になりました。鉄道にはメイジが乗っているので盗賊や害獣も容易に近寄せませんし、線路が破損して

いてもその場で直せます。

そして、こうした状況なのに税金がとても安いのです。

これはうちの領地の噂を聞いた移民が大量に流れてきて、人口が急激に増加したからです。一戸辺りの農産生産量も土の魔法や鉄製農具のおかげで増えていて、税率を下げてても我が家の収入は増え続けているのが現状です。

以上のことは言うだけなら簡単なのですが、実際に形にするのは大変と相場が決まっています。

僕はこうしたことに関して経験がないので思いついたアイデアを適当に言っていただけなのですが、それを元にこれらの改革を行い、領内を一気に栄えさせた父は本当に怖いくらい有能です。

もちろんその補佐として男子校からの卒業生も活躍していましたし、親世代のメイジたちも海戦術が有効な場合などかなりの作業をこなしていましたけど、一番の立役者はやはり父でしょう。

父がギアスを使えると言われている理由がよくわかりました。人を使うのが異様に上手いんです。

僕の話聞いた後、シエスタは真剣に移住を考え始めました。家臣団の子にも話を聞き、タルブ村の家族にも先ほどの内容を手紙に書いて送ったみたいです。

とりあえず、先祖代々の畑やお墓のことなどもあるので今度帰ったときに家族会議をするつもりらしいです。竜の羽衣の件もありますし、僕もついて行きましようかね。

さて、長かった一週間も終わり今日は虚無の曜日。朝からシエスタに優しく起こしてもらいます。最近抱き枕が気持ちよすぎてぐすり眠ってしまうんですよ。

朝食を取って準備したら、今日はみんな王都へお出かけをします。

道中二時間も暇ですが、馬車の中にトランプを持ち込みカードゲーム大会をしました。やるのは大富豪、今回の特別ルールとして大富豪は一つだけ好きな命令を発することができます。それ聞いたみんなが怖いくらい真剣な目をしていました。

あ、中にいるのは僕・ジヨゼット・テファ・ルイズ・マチルダさん・カトレアさん・シエスタの七人。馬車というよりはキャンピングカーみたいな感じで引いているのはグリちゃんです。賢いので御者とかいりません。

白熱したゲームの結果は、ルイズの一人負け、カトレアさんの一人勝ち状態でした。ヴァリエール家恐るべし……！

なんとなくツヤツヤしているカトレアさんと、それを羨ましそうに見ている五人を引きつれ、王都のうちの店へ向かいます。

王都の店で働いている子達に挨拶をしながら今週の売り上げ等を確認し、少し店の様子を見てから店内の一室へ入ります。

みんなでのんびりとお茶をしていると、フードを被った女性が勢い良く入ってきて僕に抱きつきました。

いつものようにお城から抜け出してきたアンリエッタです。

ウィルさま、アンリエッタは寂しくて死んでしまいそうでした、と涙ぐむ彼女を慰め、隣に座らせてお茶会を再開します。普段会えないので、その分アンリエッタに甘えさせてあげます。羨ましがらない視線がいくつも刺さりますが、今日はアンリエッタ優先なので。あ、王都の店が出来てから時々こうして会っているんですよ。ジヨゼットたちとももう面識があります。

一人だけ知らなかったシエスタは、まさかアンリエッタが出てくるとは思っていなかったようで、王女様の意外な姿に目を丸くしています。ここでの出来事は秘密にするようにと命じると、首が取れそ

うな勢いで頷きました。

ところで、僕に甘えてくるアンリエッタは本当に可愛くて、個人的にはたれパンダ以上の癒し効果が期待できると思うんですよ。たれアンアン、どうでしょうか？

メンバーが揃い、お茶をいっぱい飲んだところで街へと繰り出します。アンリエッタには認識阻害のマジックアイテムを持たせているので注目する人も居ませんし、ガリアの密偵も城を出た頃には既に巻いています。

美味しいものを食べ歩き、興味がある店を適当に冷やかしながら歩く僕たち。アンリエッタは誰にも注目されずのびのびと街を歩けるのが嬉しいらしく、いつもはしゃいでいます。王族は大変なものでしょう。

今回の目的地は裏通りにある武器屋です。

やっとデルフが入荷されたので買いにきました。

この後一年くらい買い手がつかないのかあ……とデルフの口の悪さに感心しつつ、中へ入ります。

なんだか原作でも聞いたことのあるようなセリフを言われました。毎回同じことを言っているのかもしれないね。

その前口上を無視してデルフを抜き取り、いくらか聞きます。

新金貨で1000枚。

……こちら、ぼりすぎでしょう。原作じゃ100枚だったじゃないですか。

デルフだって今の時点で既に錆びだらけのボロ剣ですよ？ 600

0年の年季は伊達じゃありません。

さて、どうやって値切ろうかと思ったところでなんとシエスタが値

引き交渉を始めました。

喧々譁々の交渉の末、ついにはデルフの値段は新金貨50枚に……あれ、原作より安いですね。

まあいいか、とテーブルの上に代金を置いて店を後にします。店主は真っ白な灰になっていました。

意外と長引いたのでそろそろ学院に戻る時間です。

涙ぐむアンリエッタを連れて、商会の店に一度戻ります。今日は彼女にプレゼントがあるんですよ。

はい、というわけで取り出したのはスキルニルです。

もちろんただのスキルニルじゃありませんよ？

血を与えると能力や性格がコピーされるといふ性能はそのままに、外見は最初からアンリエッタに似せて作らせ、水の精霊の魔法で擬似生命を与えています。原作のウェールズが生き返ったのと同じような魔法です。

この魔法を使うことで命あるものとして存在でき、ディテクトマジックでもスキルニルとはばれなくなるのです。これも情報規制ですねえ。

で、これを持ち出したのは当然ですがアンリエッタと入れ替えるためです。

うちの領地の館に連れ込むと認識障害をかけても問題が出ると思って実行しなかったんですよ。いつの何か僕の部屋の住人が一人増えていたら、父もお母様も違和感くらい覚えるでしょう。

その点、魔法学院なら人の入れ替えも多いですし、購買に隣接しているうちの家臣団用の宿舎に寝泊りしてもらえば問題はありません。男子寮の僕の部屋でもいいですね。

アンリエッタはあっさりと入れ替えを承諾し、偽アンリエッタが城

へと戻っていきました。

しばらくは虚無の曜日に城を抜け出したりと、アンリエッタの行動を真似て、徐々に真面目になっていく予定です。

まあ、偽アンリエッタも流石に成長しませんし、そのうち回収しますが、それまでならバレないでしょう。

あ、トリステインの秘室ですがアンリエッタにお願いして持ち出してもらっています。偽アンリエッタの指についている《水のルビー》は僕と水精霊の渾身の贋作、《始祖の祈祷書》は城に外装だけ似せた偽物が置いてありますけど、元から白紙の本だと思われるので大丈夫でしょう。

どうせ原作でも旅費の足しに売られたりするようなどうでもいい秘宝ですからね。

さて、無事に一仕事終わったので帰ったらアンリエッタとたっぷりいちゃいちゃしますか。

たれアンアン（後書き）

たれアンアンはこの作品のマスコットキャラクターです！

二つ名は……

アンリエッタの替え玉はばれていないようです。死体を動かしてもばれないような魔法を元にして改良したので当然でしょう。指環より水の精霊本体の方が力も強いですし。

アンリエッタも王族という重圧から開放され毎日のびのびと過ごしています。今はシエスタと同じように僕の身の回りの世話をしてくれています。料理も勉強中らしく今から彼女の手料理が楽しみです。偽アンリエッタの方ですが、正直このまま裏からトリステインを操るのも可能なんですよね。

でも、面倒なのでやりません。

マリアン又王妃が王位につかなかったせいでボロボロのこの国を立て直すなんて、そんな苦勞を背負い込むくらいなら放り投げますよ！基本的に僕は他人の尻拭いの類は嫌いです。愛国心とかに溢れた人が勝手にやってほしいです。

誰か王位を篡奪してくれませんか？

さて、学院の日常ですが、キュルケが男漁りをしているみたいです。男子三人をその色気で誑かし、告白を受け入れて三股かけた相手が決闘している間に四人目。さらにその後も五人目、六人目と増やして周囲に迷惑を振りまいています。

ジヨゼットたちをナンパしてくる男子もいたのですが、僕の鉄壁の守備と彼女たちの僕以外の男子への関心の薄さ、そして何よりキュルケが男子たちに気のあるような仕草をして相手が本気になるというのが現状の原因です。シエスタ情報では、わざとらしく胸を押し付けたり流し目をしたり、かなり露骨らしいです。

まったく、悪女ですねえ。取り巻き男子の元カノに問い詰められた

そうですが、一番大事なものは取らないのと煙に巻いたそうですが、これは普通に刺されてもおかしくないレベルですよ。

それに、そんな説明で納得する女性陣も大概なのでしょうけど、女だけでなく男に刺される可能性も十分あると思うんですよ。男の嫉妬は時に女より怖いと知らないんでしょうか？ ストーカー殺人とか本気で怖いと思うんです。

まあ、トリスティン貴族は無駄にプライドが高いので僕の魅力で振り向かせて見せる、とかそんなのばかりですけど。これが情熱の国ゲルマニアだったら……ヴィンドボナ魔法学校で起こした騒動は今以上なんでしょうね……。

僕も入学当初に少しだけ誘惑された気がしますが、あれに引っかけたいとは思いませんでした。

ただでさえジョゼットたち三人や家臣団の子たちに囲まれていて嫉妬されているのに、キュルケ争奪戦まで参加したら一体どうなることやら。

友達ならいいのですが、恋人には絶対なりたくないです。

興味がなさそうな僕にルイズが嬉しそうにしていますが、やっぱり寮は隣の部屋なんでしょうかね。

そんなこんなで新入生歓迎会です。

キュルケが胸元の切れ込みがかなりセクシーなドレスで登場しました。男性陣を魅了し、まるで女王様のように振舞っています。ゲルマニア貴族は小さい頃から社交界に出るのでセンスはやはりいいですね。トリスティンの貴族はまだまだ衣装に着られている感じで芋っぽいです。

まあ、ルイズは公爵家のパーティーで慣れているのでドレスを堂々と着こなし大貴族の貫禄を見せ付けていますし、ジョゼットとテファはパーティーに不慣れで初々しいところが逆に可愛いんですけど。三人が入ってきたときも注目を浴びましたが、僕と一緒になのであまり近寄ってくる人はいません。いつものようにギーシュとモンモン

がやってくるくらいでしょうか。あまりに毎日毎日顔を出すので、結局この二人とは仲良くなっちゃったんですね。

そしていつものようにギーシュがテファにダンスの誘いを入れようとして、モンモンに叩かれました。そのまま二人はダンスに……あれ？ あの二人、いつの間にあんな仲になったんでしょう？ そっちは僕聞いていないですよ？

まあお似合いの二人なので祝福しておきましょう。ギーシュくんの浮気癖はどうにかした方がいいとは思いますが、僕が言えることじやありませんし。

ギーシュ・モンモンの二人が離れたので勇気ある男子が何人かジヨゼットたちをダンスに誘いにきましたが、三人とも興味なさそうです。

ダンスくらい別にいいかと思ったのですが、もし誘いを受けたら今度はひつきりなしに来そうですね。三人に断られた彼らは、すぐごとキュルケの方に向かっていきます。いや、今からあそこに向かうとか、凄いバイタリティですね。

彼らの特攻を見送ったあと、突っ立って料理を食べているだけというのもしかたと思い、僕もダンスを踊りました。12歳から社交界にはデビューしています、これくらいは嗜んでいますよ。

お相手はもちろん僕がエスコートしている三人。離れている間に変な虫がたくさん湧いても困るので、偏在を使いました。いや、偏在は便利です。風のスクエア（公式設定）でよかったです。

僕×3とジヨゼット、テファ、ルイズでダンスを楽しみます。複雑な感情の込められた視線が痛かったですけど気にしませんよ。いいじゃないですか、こういう馬鹿なことに魔法使っても。戦争の道具なんかよりよほど平和です。

そんな風楽しんでいたところ、会場の女子グループの一人が不信な動きをしたのが見えました。それにあわせてカーテンの中に隠れていた男子生徒が杖をかかげ、小声でルーンを唱えているのが聞こ

えます。おやおや、風のスクエア（擬態）の聴覚を侮らないでほしいですね。

そうこうしている間に男子生徒の杖からつむじ風が放たれ、キュルケのドレスにまとわりつきました。

ルーンを聞いていてわかりましたが、やっぱり『風』ですか。

なんというか、トリステイン貴族の性悪さは最早どうしようもないレベルです。彼らの行動理由もわかっているので余計にイラツときますね。

杖の一振りでキュルケのドレスにまとわりついた風を吹き飛ばし、念力でカーテンの影に隠れていた少年を引きずり出して、ダンスの輪の中に放り込みました。

杖を手に持ったまま引きずり出され、今の魔法が彼のものだと周囲に知られます。まあ、手を離したくても離せないように接着してあるんですけどね。

驚いて水にあげられた魚のように口をパクパクしていた彼ですが、絞りだすように言いました。

僕はあの魔法を防ごうとしたんだ、タバサとか言う奴が魔法を使つたのを見た、と。

この後に及んでまだシャルロットに罪を被せようというわけですか。

ちなみに彼女とイザベラはダンスをすることもなく、隅の方で黙々と料理を食べていました。

近くの壁に杖を立てかけておりましたが、ハシバミ草のサラダを幸せそうに食べている彼女の姿に魔法を使った気配は微塵もありません。イザベラはワインを手に肉料理に舌鼓を打っていたようです。

マルトーさんの料理はガリア出身の彼女たちからしても美味しいんでしょうね。

それはともあれ、僕はしっかりと彼が魔法を使つたのを見ています

し、彼に合図を送った少女の姿も見ています。再び念力の呪文で、今度は合図を出した少女を引きずり出します。

タバサに決闘で負けた男子生徒と、キュルケに彼氏を取られた女子生徒。

お前たちは二人に復讐するために手を組み、ミス・キュルケを傷つけ、その罪をミス・タバサに負わせようとしていた、その現場もすっかりと見ているんだぞ、と告げました。

流石にもう誤魔化せないと思ったのか、自分たちトリステイン貴族が如何に優れているのか、彼女たちのような野蛮人であるゲルマニア貴族や変な名前の私生児のような相手に教えてやるのだ、とべらべら。

ああ、傷つけるつもりではなく、ドレスを切り刻んで恥をかかせるつもりだったとも言われましたね。

いやー、こういう無駄にプライドが高くて人の邪魔しからないような人種は大嫌いです。

キュルケだけならば日頃の行い故の自業自得なのであまり気にしませんでしたが、今回はシャルロットを巻き込みました。自分のプライドの為に平気で人を利用するような手合いなんて、百害あって一利なしですよ？

入学式で会話をしていなかったのでフラグは折れたかと思ったのに、この国の貴族に対する僕の認識はまだまだ甘かったようです。

彼らに杖を向け、ルーンを唱えだします。いい感じに感情が高ぶっているのを感じますね。

スクエアを超える僕の魔力に今更青くなる二人ですが、許しません。さあ、償いの時間です。

カッター・トルネード。

虫けらのように吹き飛んだ二人。壁に叩きつけられて、そのままへばりつきました。

その姿は身に一切れの布すら纏わぬ全裸。この前の時と同じ状況です。

人を裸にしようとしたんですから、このくらいいいですよ？

ちなみに、錬金で即効性のトリモチに壁を変えたので、標本のように張り付いています。錬金を使っていなかったら赤い花が咲いていたでしょう。衝撃で二人とも気絶しているようです。

あ、ついですが、服を切る為に使ったカッター・トルネードで、薄皮一枚分だけ切つて『愚か者』と顔に書いてやりました。血は一滴も流さない職人芸に我ながら惚れ惚れしますね。はっはっは。

気絶した二人にそれ以上の関心は払わず、同じトリステイン貴族としてキュルケとシャルロットに謝罪をします。もしもまだ許せないのなら好きなようにしている、僕が責任を持つと言いましたが、二人とももう結構だと言って許しました。

一連の騒動にあっけにとられていた他の生徒たちもようやく事態を飲み込み、先生たちも動き出したので、さっさと会場を後にしました。

購買に向かい、口直しに身内だけで飲み直しです。

誇りあるトリステイン貴族が魔法をあんなことに使ったことが気に入らなかつたようで、ルイズがかなり怒っていました。噛みまくりで可愛いかったです。

翌日、学院長に呼び出されて事情聴取を受けましたが、シャルロットは何度も言うようにガリアの姫君で、キュルケはゲルマニアの有力貴族であるツェルプター辺境伯の娘です。

その二人をトリステイン貴族が仕組んで対立させようとしたなど、もし実現していたら両国に踏み潰されてもおかしくありません。

他国の留学生を歓迎会で裸に剥こうとして、さらに無関係の相手に

擦り付けようとしたんですよ？ どう考えても喧嘩を売っていますよね？

結局あの二人は退学となり、僕は少々やり過ぎたということとで謹慎二週間を言い渡されました。前は非公式ながら決闘であり、相手から吹つかけられたので見逃してもらえたんですけどね。

まあ、のんびりするのでもいいでしょう。この学校の授業はうちの領地の学校と比べると幼稚すぎてつまらないんですよ。コモンやドットスペルの練習しかないんですもの。

折角なので一日中購買に入り浸ることにしましょう。

あ、あと二つ名で『風刃』がつかまりました。

『風刃』のウィル……まあ、何も言いませんよ。

二つ名は……（後書き）

お気に入り登録1000件超えたり！

と喜んでいる私ですが、今回の投稿で書き溜めがついに尽きました

orz

最後まで一日一回更新を維持できるのか……頑張ります。

僕の考えた最強装備・魔改造版

暇なので魔改造を施してみました。

前回、精霊物質を使った装備を作成しましたが、それに魔法の力を込めてマジックアイテム化しようと試みですね。

いろいろと試したのですが、精霊物質自体に魔法を込めても威力や持続時間が微妙です。精霊の力を使い切ると元の物質に戻ってしまうのも難点でした。

ダマスカスは金属という媒体がないので威力などは問題がなかったのですが、水の精霊力がそのまま物質になった物なので、使い切ると服そのものが消えてしまいました。いきなり裸は簡便ですね。

この問題に直面し、僕たちは一度マジックアイテムの原点に戻ることにしました。

マジックアイテムは精霊石を燃料にして動いているので、精霊物質によって作った武具に精霊石を直接組み込んでみたのです。

既存の技術の組み合わせなので、あっさり成功。この技術的ブレイクスルーによって性能が桁外れに上がりました。例えば制服ですと、服を作っているダマスカスと、魔法のエネルギー源となる水石の部分に分け、水石の部分からだけ精霊力を汲み上げるようにしました。これで服が消えることはなくなります。

そして、改良を重ねた結果、ミスリルの鎧部分には風石をエネルギー源としたエア・アーマーと気温・気圧の調整機能、加速、慣性制御などを組み込みました。エア・アーマーは傾斜装甲とリアクティブ・アーマーの原理を利用しています。ヨルムンガントのような『反射』を利用した鎧だと100の力に対抗するのに100の力が必要になります。『傾斜』とでも呼ぶべきこの新魔法は衝撃の9割以上を逸らすことに成功しました。恐らく、原作のタイガー戦車の大砲だって弾くことができます。

気温調整や慣性制御などの恩恵によって、雲の上だろうと火山だろうと雪山だろうとどこでも快適な作戦行動を行なうことも可能になったのも素晴らしいですね。

ダマスカス製の制服は自動回復と浄化、鎮静効果となっています。こちらは機能を絞ることでの分強力になっています。ちょっとした怪我ならすぐ治りますし疲労も回復します。沈静効果は精神干渉系の魔法に対する抵抗力も上げるので、僕か水の精霊以外のメイジのスリープ・クラウドなんかは効きません。

ああ、というか、魔法そのものが効かなくなりますね。

この前デルフを買いましたよね？

で、デルフって魔法を吸収できるじゃないですか。

ええ、魔法を吸収する機能を再現しました。攻撃を食らえば食らうほど強くなります。

これは本気で核兵器クラスが必要かも……でも爆風や高熱が『傾斜』式エア・アーマーを抜けるかわかりませんし、水の癒しって放射能汚染すら治しそうですね。放射能って遺伝子を直接傷つけるだけですから、遺伝子治療ができれば後遺症はなくなる気がします。現代のABC兵器ですが、核は何かかなりそう、生物兵器は病気の類なら癒せますし、化学兵器は毒を浄化すれば……あれ、無敵ですか？

まあ、それはさておき、防具だけではなく武器も新兵器を開発してしまいました。

これまでの剣や斧なんかと言った従来の品も精霊石で強化をしているのですが、今回は完全な別物。精霊石を使った銃です。

マガジンに使い捨ての火石・風石・水石・土石を入れるカートリッジ式で、銃身そのものはミスリル製です。

現在ハルケギニアで流行っている火縄銃の親戚みたいな物や、今後

開発されるだろう後詰め式の銃をすっ飛ばしていますが、作れたのだから仕方ないです。

原理は簡単で、まず銃身内部に土石の力で鋼鉄を錬金し、硬化も同時にかけます。次に火石の爆発によって弾が発射され、風石が銃身の固定と反動の制御、銃弾の加速、弾道の補正をかけます。銃身が長いほど弾速が上がり、威力や射程、命中精度が向上するというのが現代の銃の構造ですが、風石によって銃口の先にも道を作り出して銃身を擬似的に長くしています。ハンドガンにスナイパーライフルの長い銃身をつけたと思ってください。最後は水石の力で銃を冷却して終わりとなります。

……革命です、武器の歴史に革命が起こります。これは酷すぎる。何でしたっけ、アンチマテリアルライフル？ 確か戦車を打ち抜くライフルとかありますよね。

これ、ハンドガンですがそのくらいの威力があると思います。厚さ10センチの鉄板とか普通にぶち抜きます。しかも、反動はほとんどなくて命中精度がエアガン並みにいいですし、弾を毎回錬金しているので装填の必要もなく連射ができます。カートリッジのサイズの関係もありますが、装填数は100発です。

しかも、しかもですね。魔法を吸収する機能は健在なので、メイジが持つとカートリッジの入れ替えすら必要なく精神力が尽きるまで連射できます。スクエアクラスのメイジが持つと何発打てるのかわからないくらいです。

……いやー、世界の兵器の歴史を塗り替えてしまいました。ハンドガンには威力を調整できるように細工もしました。さすがに対人に使えませんので。

まあ、個人武装はこのくらいでいいでしょう。

殺伐とした物ばかり作っていたので、もっと面白いものを作りたいですね。

うーん……フネ。

あの空飛ぶフネを魔改造しましょう。そもそも、あれが木造なので金属が重いからです。

ですが、うちにはミスリルという脅威の軽金属があるじゃないですか！

むしろ木よりも軽いですし、風石と組み合わせる相性的にもばっちりです。

外装にカモフラージュとして木板をつけたとしても、かなりの性能が期待できます。

材料に大量の銀が必要となりますが、そこはシャンプーの錬金で鍛えられたうちの魔法少女達が何とかします。

よく錬金で純金を作るのは難しいって言いますけど。

純金や純銀じゃなくても別によくないですか？

例えば、その辺の石ころに錬金かけて銀を作ったとして、例えば5割が銀になったとしますね。

……これ、かなり良質な銀鉱石ですよね？

うちの子達なら8割や9割くらいいけるんで、その銀鉱石を鍛冶場で精錬して銀のインゴットにしています。

ただの石ころが、たった一手間を加えただけで純銀に。まさに錬金術です。

これを成形し、風の精霊力を込めてミスリルに。耐久度はバカみに高くするので本当に薄くて大丈夫です。自重で潰れる可能性も無視できます。

今回は試作品なので小さめ、二十人乗りくらいの大きさにします。

で、出来上がったフネに乗り、認識障害を全力でかけて試験飛行です。ああ、認識障害かけて空を飛んでいると何となくネギまを思い出しますね。

それはともかく、定員いっぱいに乗せて発進したフネですが、速過ぎです。王都まで五分足らずでした。

しかもフネの船体そのものが軽いので風石の消費もかなり少なかったです。

王都に来たついでにどのくらい荷物を積めるか試してみました。人間の変わりに重めの荷物を山積みにしてもビクともしなかった。で、搭載量もかなりのものが期待できそうです。

謹慎中にこんな物ばかり作っていたのですが、やはりこの世界は面白いですね。

精霊物質や魔法吸収機構はエルフの技術ですし、精霊石を消費するマジックアイテムは人もエルフも作れます

。フネの素材の純銀を得るための錬金も、風のスクエアと称している。ので僕は手を出さず、全部家臣団の子に任せました。

つまり、僕が一から十まで作り上げた物は一つもありません。既存の技術を組み合わせるだけで、これらのアイテムが作成できるわけです。

アイデアさえあれば、どんな面白いものでも作り出せる。魔法という力の自由さを改めて感じることができました。

暗躍オムニバス(前書き)

初めて「」がつかました。

暗躍オムニバス

【ある兄弟の語り】

「陛下、宰相閣下。姫君たちからのお手紙です」

ハルケギニアでは珍しい黒髪の女性が手に二通の手紙を持ち、部屋の中へ行ってくる。

将棋盤を挟んで向かい合っていた二人の男が、彼女の声に顔を上げる。

「ああ、ありがとう。兄さん、ひとまず休憩でいいかな？」

「ふむ、休憩と言わず投了してもいいのだぞ？　ここから巻き返すは無理だろうからな」

「いいや、勝負はまだまだこれからさ」

軽口を言い合いながらそれぞれの娘からの手紙を開き、読み出す。

「まだ見つからないか。でも、元気そうで何よりだね」

「ふふ……お前の方の手紙に何が書いてあったか言わなくてもわかるが、これを見ても同じことを言えるか？」

「え？　ちよ、ちよっと見せてくれ！」

慌てて兄の手から手紙を奪い、さっと眼を通す。

「ななな、決闘?!　あの子が？　しかも歓迎会で罪を被せられそうになっただって！」

「やはりお前の方の手紙には書いてなかったか」

ワイングラスを傾けながら慌てる弟の姿を着に喉を潤す。

「兄さん、何を落ち着いているんだよ！　これは今すぐ嚴重に抗議を、いや、いつそあの子を……」

「まあ、落ち着け。あの子からの手紙には何も書いてなかったんだろう？　ならば、お前の干渉を望んでいないということだ」

「で、でも、私の天使が……」

「ほれ、とりあえずこれでも飲め」

手渡されたグラスを一気に空け、少し落ち着きを取り戻す。

「……兄さんは心配じゃないのかい？」

「ふん、何を心配すると？」

「だって……あの学院は奴の住処に間違いないんだろ？」

「ああ、送った北花壇騎士団の連中が一人残らず送り返された。全員無傷でいつの間にかやられたのか記憶もなく、ガリアにわざわざ送りつけられたよ」

「だったら……！」

「それで？　お前はあの娘を大切に金庫にでも仕舞っておくのか？　あの子がそれを望んでいないのに？」

「う……でも、僕は……」

「少しは信じてやれ。あと子離れをしる」

「……兄さんは」

「なんだ？」

「兄さんは、どうしてそんなに強いんだい？　兄さんだってあの子のことを……」

「は。別に強くなさないさ」

手にしたワインをゆ見つめ、自嘲の笑みを浮かべる。

「だが、今更俺が父親面をしてどうなる？ あれもそのようなこと、望んでおるまい」

「違う、それは違うよ、兄さん！」

「いいのだ。……だが、奴を許すつもりもない」

「……兄さん」

「どこかに雲隠れしているというなら、必ず俺のもとに引きずり出してやるぞ」

くくく、と楽しげに笑う姿に、弟もその心情を少しは汲むことが出来た。

あの一件以来、兄はこうして感情を露にすることが増えた、とも思う。

そして、兄がそのつもりならば、自分のすることはただ一つだ、と。

「兄さん。……いや、ジョゼフ」

「ふむ？ 何でしょうか、シャルル陛下」

「どのような手段を用いても構わん、かならず奴を 『魔法使い』 を見つけ出し、ここへ連れて来るのだ」

「はっ、承りました」

笑顔を浮かべ、芝居がかったやり取りを交わす二人。

黒髪の女性、シエフィールドはそれを見守り、我が主に必ずや朗報を届けようと思いを新たにしていたのだった。

【ある従姉妹の語らい】

「ところで、シエフィールドさんはうちのバカ親父とうまくいつてるのかしらねえ？」

「さあ……でも、あの人も意外と奥手そうだから」

とある学院の一室、先ほど書き上げた手紙を受け取りにした黒髪の女性の話題を交わす少女たち。

「運命に導かれた相手だっというのに……お父様は意外とにぶいし、困ったものよね」

「シェフィールドさんがあんなにアピールしているのに気がつかないんですもの。意外だったわ」

「本当よ。全く、私がわざわざ気を使ってこの学院に入ってやっているっていうのに不甲斐ない。もしも夏に帰るまでに何も進展がなかったら……エレヌ、わかってるわね？」

「もちろんよ、イザベラ姉さま。私も叔父様はそろそろ自分の幸せを手に入れるべきだと思うわ」

「そう。ふふふ……今から楽しみだわ」

「ええ、お父様とお母様にも協力してもらうつもり……うふふ、楽しみね」

探し物が遅々として進まない苛立ち紛れも含め、あれこれと計画を進める二人。優秀なその頭脳を今は無駄に高速回転させ、いくつもの立案が行なわれた。

【ある夫婦の語り】

「ねえ、あなた」

「どうした？」

普段の毅然とした態度と違い、歯切れの悪い妻の様子に訝しげな表情を浮かべた。

だが、妻の次の言葉でその疑問は氷解する。

「あの子ももう魔法学院に入学しましたし……あの子の、婚約者の

ことなのですけど」

「……ああ」

彼らの脳裏に浮かんだのは、愛する末の娘　の婚約者の、髭が立派な好青年だ。

「……あの子、完全に彼のことを忘れていますよね？」

「だろうな……彼が魔法衛士隊に入隊してからもう4年か」

「ええ。まさかその間にあの子が……あんなことになるなんて」

「そうだな……」

彼らの愛する娘が師と仰ぐ少年を思い浮かべる。少年に向ける愛娘の眼差しに込められたその想いも。

憂いを帯びた顔で俯く妻。夫も溜息を吐いた。

「……やはり、婚約を解消するしかないか」

「でしょうね。もとより口約束みたいなものでしたけど、彼には何て説明すればいいのかしら」

「隠すわけにはいかないだろう。きちんと説明すればわかってくれるはずだ」

「そう、ですよね……」

幼少の頃から知っている実の息子のように思っていた相手だ。

彼が末の娘に恋愛感情を抱いているとは思えないが、この話をどう受け取るのか夫妻には想像もつかなかった。

「「はあ……」」

今後のことを思い、憂鬱な二人だった。

【となる転生者の思索】

「今期の報告書です」

「ああ、ありがとう」

諜報部から上がってきた書類に目を通す。

ガリアの密偵が学院に潜入しようとしていたという報告は彼自身も対処していたので知っている。現在は学院関係者の貴族の下にそれぞれ散らばっているらしい。これは認識阻害結界が作動しているのも特に対処は必要ないだろう。

レコン・キスタの調査も進んでいる。パトロンからの援助によってすでに北部で一斉蜂起は行なわれているが、そのパトロンの名前や構成員、王党派との戦況などの調査結果だ。

「やはりレコン・キスタは変わりませんか」

王党派は苦戦を強いられているようだ。

かつて王党派の一番の味方だったモード大公。彼の処刑と、その理由が公表されずに行なわれたということが原因で王族から、すでに諸侯の心は離れていた。

自分もいつか理由も知らされずに殺されるのではないか？

そう不安を抱いた諸侯をあの手動者が言葉巧みに取り込み、様々な利害関係が一致した結果、レコン・キスタは実現されたのだった。

現在はやや王党派が不利、という程度だがあの誇り高い王族が他国に救援を求めるはずもない。それに対しレコン・キスタ側には後ろ盾により潤沢な補給が行なわれている。

一気に形勢を決めることが出来ない以上、王党派はじりじりと勢力を削られて最後は玉砕するだろう。

「さて、アルビオンはいつ介入しましょうかね」

偽アンリエッタに指示を出せばいつでも拳兵可能だ。
目を通した書類を一瞬で灰に変え、これからのことに思いを馳せる
のだった。

炎の記憶（前書き）

今日は遅くなりました。毎日更新はきついですね。

炎の記憶

優等生から引き籠もりヘクラスチェンジしました。

いえ、謹慎が終わって授業に出るようになったら、何故かキュルケが度々押しかけてきました。

あの歓迎会の時の一件で微熱が情熱になったとか言われましたが、まずその前に男関係をきちんと清算してほしいです。

キュルケまで加わり、学院トップクラスの美女・美少女のほとんど僕の回りにいます。男子からの嫉妬が、もう酷くて……今までキュルケが他の男子に愛想を振りまいていたから、それが結果的に釣り合いが取れていたんでしょねえ。

というわけで、キュルケの参入で学院生活が一気にハードモードになってしまい、かなり煩わしいです。特にキュルケ信者は何でこんなに決闘をしかけるのが好きなんでしょう。

毎日毎日挑戦者がやってきますし、それに釣られてジョゼットたち三人が目当ての男まで参加してくるんです、息をつく暇もありません。流石にこの前みたいに裸にひん剥くのも可愛そうかと思っ止めているんですけど、いい加減我慢の限界ですね。

そういうわけで、僕は学院を偏在に任せ、のんびり過ごすことにしました。

授業中はマチルダさん・カトレアさん・シエスタ・アンリエッタ、そしてお店の子達と一緒に過ごしマジックアイテムの開発や鍛錬、授業後はジョゼット・テファ・ルイズが合流してお茶を楽しむ日々です。ギーシュたちには学院に通っているのが僕の偏在だと知らせていないので、そのまま偏在に彼らの相手を任せています。

すっかり趣味になったマジックアイテム作成ですが、空飛ぶバイク

や車なんかを作りました。本体を木製に変えたアイテムを店で売りに出し中です。道が悪いので馬車はけっこう揺れたりするのですが、地面に接していない空飛ぶ馬車なら解決です。グリフォンなどの飛行が可能な嚴重に引かせればそのまま空も飛べるので、もしかしたら竜籠に変わる新しい空の交通手段になるかもしれません。

一応燃料に風石を使うので金持ちの貴族くらいしか使えませんが、竜籠の維持費よりは安いのでそこそこ売れています。この前王宮に献上した馬車は偽アンリエッタ姫が使っているそうです。

他にも小物や生活用品を作って細々とやっていたのですが、ふと思いついてコルベール先生を訪ねてみました。彼は天才ですから、何か面白いアイデアを出してもらえないかと思ったのが理由のひとつです。

コルベール先生も僕が商店でいろいろなマジックアイテムを売っていることを知っているので話はスムーズに進み、二人でもっと生活を向上させられるアイテムについて考えました。その際、先生の部屋が汚く、臭いがきつすぎて鼻がどうにかなりそうだったので空気が清浄機を贈呈しました。風石を使ったアイテムで、鉱山などでの使用を考えています。

それで、コルベール先生の発明品を見せてもらったのですが、やはりありましたよ。内燃機関。

正確にはまだ試作品ですが、その原理はすでに考え付いていました。やっぱり凄い人ですよね。

ただ、僕は内燃機関には実は反対です。

化石燃料を使うと環境に悪いですし、木炭でまかなおうとすると普及につれて森が切り開かれます。科学知識や環境意識に乏しいハルケギニアの貴族たちが自然破壊について考慮するとは思えないので、あちこちに禿山ができて地割れや洪水が多発しそうです。

あるいは地球みたいに温暖化でCO₂削減とか、よりエコなエネルギー

ギーを、とかそういう話を未来になつたらするのでしょうか。それなら最初からエコなエネルギーを使えばいいと思います。

そういうわけで、コルベール先生に火石を見せました。

火石は人間に知られていないほど深い場所に埋まっているため、エルフが作った物以外は地上に存在しません。先生も初めて見た様で、僕の説明を聞いてとても興奮していました。

エルフは暖房か明かりくらいにしか使っていないらしいですけど、熱をずっと放出し続けるって、工業的に考えたらかなり有益ですかな。コルベール先生にはこの火石の価値が僕以上に理解できていることでしょう。

これを使ったら蒸気機関がすぐに完成するでしょうね。今のところ火石の存在はうちの家族と僕の家臣団の子達くらいしか知っていませんが、将来的には領内限定で蒸気機関車を走らせることを視野にいれてもいいでしょう。

流石に何に使われるかわからない不特定多数の相手にこれを売る気にはなれませんが、手作りなので供給量もそこまで多くないですし、自家消費くらいがちょうどいいですね。

さて、なかなか有意義な時間を過ごした僕ですが、そろそろ頃合と見て話題を変えます。

学院のコルベール先生ではなく、魔法研究所実験小隊の隊長であるジャン・コルベールに大事な話があるのです。

僕がそのことについて知っていることに驚かれましたが、家臣団の諜報部門がリッシュモンの調査を行なっていると聞いたら納得してもらえました。実際に調査してますけど本当にいろいろと出てきていますよ、あの人。

先ほどまで生き生きと話していた顔と違い、酷く疲れた顔で彼はその事実を認めました。

私を裁きに来たのか？と聞かれましたが、もちろんそんなはずはありません。

当時のコルベール先生の所属していた実験小隊は、言わば王国の秘密部隊みたいなものですからね。上からの命令に従わなければ抗命罪に問われますし、任務の内容も新教徒の虐殺が目的ではなく疫病の伝染を防ぐためと偽の情報を与えられていました。民間人を皆殺しにしたのが事実だとしても、その罪を問われるのは支持を出したリツシュモン、あるいは当時の教皇を初めとしたロマリアの上層部です。

僕から伝えることは二つ。

一つは、あの時の生き残りの女性が一人いること。唯一の生き残りとして聞いて、それが誰なのか先生もわかったようです。彼が逃がした相手が今も生きていると聞いて安心したようでした。

今の彼女は復讐の為に剣を取りメイジ殺しにまでなった一角の剣士です。彼女の居場所も含めて伝えたので、もしかしたら謝罪に行くかもしれません。殺されるつもりならせめて彼女の真の復讐の相手、リツシュモンをの罪を暴いてからにしてほしいと言っておきます。

一人だけ楽になろうとするのは、贖罪ではなくただ逃避ですからね。できれば当時の状況を含めた全てを彼女に説明し、リツシュモンの行なってきた犯罪を白日の下に晒した上で、彼女の手で復讐を遂げさせてあげたいです。コルベール先生にもその気なれば手伝えることはたくさんあるでしょうから、死んでいてもらっては困ります。

もう一つは先生の手元にある《炎のルビー》です。

僕が炎のルビーのことまで知っていることに本気で仰天されましたが、先生があの日殺したヴィットーリアさんの正体を告げて彼女の人生を語ってみました。あの人はロマリア皇家の皇族で、指環も始祖の秘宝である炎のルビーであること。彼女の息子である現教皇聖

下を一人残し、ロマリアを出奔、そのままトリステインに流れ着き新教徒の下に身を寄せたことなどです。

さあ、ここからが本題です。

炎のルビーを処分するから、僕に預けて欲しい。これが今回の真の主題です。

…… 啞然としていますね。まあ、始祖の秘宝を処分するなど普通は考えませんよね。一応その理由を説明します。

彼女が何故、炎のルビーを持ち出し新教徒になったのか。彼女の息子から炎のルビーを遠ざける為だったんです。彼は炎のルビーを手にしてから不思議な力を使うようになり、それをヴィットーリアさんは悪魔の力と呼んで恐れていました。

だからこそ、彼女はわざわざ炎のルビーを持ち出したのです。何せ始祖の秘宝ですから、もしばれたら追っ手も厳しくなるでしょう。換金目的なら他の宝石でもいいですし、実際に現在でもロマリアは秘密裏にその炎のルビーを探しています。

コルベール先生の取れる選択肢は二つ。

ロマリアに返還するか、彼女の遺志を継ぎ炎のルビーを教皇の手の届かない場所に隠すか。

現在、コルベール先生に搜索の手は届いていませんが、リッシュモンが逮捕されたらコルベール先生のこともばれるでしょう。その時、炎のルビーが先生の手元にあればロマリアに返還されてしまうことでしょう。隠すなら今しかありません。

必死にロマリアからトリステインに逃げてきた彼女の行いが、成就するか、無駄となるか。

僕の説明を聞きコルベール先生は悩みました。

いろいろと考えているでしょう。僕の話が本当なのかとか、ロマリアに返還せずに僕に渡してしまってもいいのかとか。もしも本当

に始祖の秘宝だというなら、それを処分するというのは正しいことなのか。

……長い時間が過ぎ、コルベール先生は僕にルビーを託してくれました。

私には何が正しいのかわからないが、君の方がきつと多くを知っている。それに、先ほど話をしていて思ったが、きつと君はこれを悪用しないと思う。その程度は人を見る目があるつもりさ。

気持ちの整理ができたなら彼女に会いに行くよ、と。寂しげに笑いながら、コルベール先生は言いました。

コルベール先生がアニエスの復讐の刃にかからないことを祈ります。先生には何としてもうちの領の機関車を作ってもらわないと困りますからね。

流れる月日（前書き）

夏季休暇に入ってからにはさくっと流して一年目が終了です。

流れる月日

そんなこんなで夏の休暇です。

今年はシエスタと一緒にタルブに行ってみようと思います。来年から忙しくなる予定ですからね。

今回のメンバーは僕といつものメンバーにキュルケとギーシュ、モンモンという大人数です。

一応、侯爵家の次男として領主であるアストン伯にも顔を出したのですが、人数が人数なのであまりお邪魔するのも悪いと思い、お付き合い程度に一泊したらすぐシエスタの家族の住む村に向かいました。アストン伯はけっこういい人でしたよ。

村についてシエスタの両親に挨拶をしたところ、もの凄く恐縮されてしまいました。まあ、貴族がぞろぞろとやってきたら怖いでしょうね。

奉公先が僕のところが変わったということと、改めてうちの領地の現状や移住についての説明を行いました。

実際、開拓はメイジが手伝うのでそこまで重労働ではないですし、移住してきた最初の年の税を免除したりもしています。うちの領民の平均年収は200エキューくらいなのでここでワインを作るより生活も楽になるでしょうね。シエスタは8人兄弟の長女で下に七人もいますから、食費だけでもかなりのものです。シエスタが奉公に出されたのも家にお金がないからなんですよね。

そういうわけで、シエスタの家族全員でうちの領に移住が決まりました。

ついでにタルブに住んでいる他の村人にも同じような説明を行いました。何人かは移住を希望してきましたが、やはり住み慣れている村を離れたくないという人や、現在の領主であるアストン伯に不満がないので移住に不安を覚えるという人が多かったです。

さて、自然豊かで景色も綺麗なタルブ村ですが、正直見るものは少ないです。

シエスタの曾お爺さんの話を聞いてお墓参りもしました。さすがにお墓を持っていくわけにはいかないので佐々木武雄さんとはここでお別れです。

“海軍少尉佐々木武雄、異界に眠る”

ついでに解読しておきました。いや、普通に読めるんですけど、コモンにリードランゲージってあるのでそれで。ところで、この魔法って反則じゃないですか？ アンロツクの呪文もおかしな性能ですけど、知らない言語が読めるという原理が意味不明です。

可能性としては、それこそアカシックレコードにでも接続しているとか。日本語の本だつてハルケギニアの人が読めるようになるんですから、世界の壁を突き抜けてあちらの情報を取得しているとしたかと思えません。不思議ですよね。

まあ、それはともかく。シエスタの家族たちに驚かれながら竜の羽衣に案内され、それを譲り受けます。ついでに引越などで物入りでしょうから100エキューほど渡しました。シエスタの給金も弾んでいますし、このくらいで十分でしょう。

ぴかぴかのゼロ戦を点検し、金属疲労や磨耗などを直していきます。機械部分のエンジンなどはあまり興味がないのでそこそこに、機体に使われている金属に精査を行います。名前覚えていませんが確か何とかジェラルミンとか言う金属を使っていたはずなんですよね。調べたところ、それなりに軽くて耐久性に優れている合金だとわかりました。ミスリルの方が優れていますが、あれは売り物に使えませんが、このジェラルミンで何か考えてみましょう。

でも、単に軽くて耐久性のある素材を求めただけなら固定化でかなりカバーできるんですよ。木板に固定化かければ鉄板にも劣らないですよ。兵器の類は作る気がないですし、ジェラルミンが求められるような場面が想像できません。

うーん、難しい。とりあえず保留しておきます。

何日かタルブに泊まった後、再びアストン伯を訪れました。今回は僕とマチルダさん、カトレアさんだけです。今回の用件は僕の家臣団に関係する内容なので他のみんなには遠慮してもらいました。

というわけで、村の近くにある大草原を使いたいので土地を貸して欲しいと交渉をしました。あそこに船着場と倉庫を建ててアルビオンと交易を行なおうと思います。戦争は物がたくさん売れますからね。

あ、売るのは食料や塩などです。もともとアルビオンは輸入に頼っている国ですし、戦争中なのでフネの往来も減っています。結果、国中で生活用品が不足しているんですよ。うちの領は食料自給率が高いので、移送経費を考えてもかなりの儲けが期待できます。

今回の貿易で使うフネは小型の快速船で、中身は偽装を施したミスリル製です。空賊や空賊に扮した王党派とかが現れるかもしれませんが足の速さが違うのできつと逃げ切れることでしょう。航続距離も長いのでラ・ロシエールを経由する必要ありませんね。

大砲に当たってもビクともしませんが、偽装が剥がれるかもしれないのでそこは注意するように支持を出します。いざとなったら魔法で弾を打ち落とせば大丈夫でしょう。スクエアメイジなら可能です。土地代と貿易での利益を一部を税として納めることで契約できました。警備に関してはこちらで自由に決めていいらしいです。いろいろと楽しいことが出来そうですね。

満足のいく結果に早速うちの家臣団が動き出します。彼女たちに後を任せることにし、アストン伯に挨拶をして僕たちはタルブを去りました。

ルイズとカトレアの里帰りとなるので、キュルケたちとは途中でお別れです。ツエルプストーは仇敵ですし、ギーシュやモンモンも公爵家に気軽に遊びに来るのは無理ですからね。

別れ際にキュルケに頬にキスをされ一騒動ありましたが、残ったみんなは気心のしれいる面々です。のんびりと気を抜きながらの穏やかな旅路となりました。

ヴアリエール家に顔を出したところ、今回は夫婦セットと杖を交えることになりました。何やら鬼気迫る勢いでしたが……。後でルイズの婚約が解消されたと知りました。試練という名の八つ当たりはやめて欲しいです。

エレオノールさんも顔を見せましたが、何やら暗い眼差しで僕を見た後、何も言わずに去っていきました。彼女も婚約を……。次がありますよ、次が。たぶん。

居たたまれないので、というか針のムシロなのでさっさとうちの領地に帰りました。

久しぶりの家でしたが、皆変わりありませんでした。

夏季休暇の間にタルブの港湾設備を整えアルビオンとの交易が始まったりしましたが、むこうの物資不足はかなり深刻のようです。フネを作るのはあまり難しくありませんが、普通の船員に任せられないので便数が増えないの惜しいです。黒字だから今のままでいいんですけど、できれば戦争が終わる前に稼げるだけ稼ぎたいところですよ。

ああ、そうそうコルベール先生は学院の休暇にあわせて暇願いを提出しました。

今はアニエスに会い、ぼこぼこに殴られた後、彼女の復讐の手伝いをしています。僕は二人を支援する代わりに火石式蒸気機関の開発を手伝ってもらいました。

やはり天才は一味違いますね。サクサク開発が進みあつという間に試験走行までこぎつけました。

石炭を燃やすわけではないのでSLのような煙突がついていないスツキリしたデザインで、初めて動いたときはみんなで歓声をあげて

喜びました。これでうちの領はますます発展しますね。領の外を走らせられないのが残念です。

今年の夏の主な出来事はこのくらいでしょうか。

この後は特にこれといった出来事はなかったですね。学院生活も偏在に任せ平穩そのもの。コルベール先生がやめてしまったので尊敬できそうな人も居ませんし、マジックアイテムの開発の気晴らしに授業に参加するような感じでした。

レコン・キスタは予想通りじわじわと王党派を追い詰めています。

僕は王党派にしか売っていませんが、やはり追い詰められている側は金払いがいいです。ちよっと危険な場所などに運ぶときは危険手当を弾んでくれますし、笑いが止まりません。

偽アンリエッタのいるトリステインの王宮はと言つと、半年くらいかけて更生した王女の姿にマザリーニ枢機卿のストレスも減ったらしいです。城を出なくなつた代わりに国を憂うような発言をさせてみたりと、長い時間かけて色々と仕込んでいます。すっかり本物と思ひ込んでいるみたいです。

実際には本物はすっかり僕のメイドが板についてきたのですが、これは知らないほうが幸せでしょうね。

シャルロットたちは未だに学院の図書をあさっています。探し物についてシャルルやジョゼフに相談してないんでしょうね。彼らならすぐに気がつくようなものなんですけど。

そろそろ僕からアプローチをかけましょうかね。春休みの間にどう転ぶかで決めましょう。

そして、僕たちが入学してから一年が経ち。

ついに使い魔召喚の日となりました。

流れる月日（後書き）

ようやく原作時間に入りますぞー！

【追記】

予約投稿の時間を間違えたので次回は24日の0時です（汗）

波乱の使い魔？召喚（1）（前書き）

今日から本気出す！

波乱の使い魔？召喚（1）

ははは……。

まさかコルベル先生が学院を去った影響がこう出るとは。笑うしかありませんね。

「みなさん初めまして。新しくオールド・オスマン学院長の秘書となったシエフィールドと申します。

今回の使い魔召喚の儀の監督を勤めさせていただきますので、どうぞよろしくお願いします」

床に五芒星が描かれた儀式場を集った僕たちに向かいそう告げた女性。

ハルケギニアでは珍しい黒髪は東方出身の証。傷一つない額から何かしらの魔力の波動を感じる、独特の雰囲気を持った美しい女性。

ってというか、シエフィールドって名乗ってますよ？！

それ、（ハルケギニアでの）本名ですよ？

こんな場所で名乗っていいんですか？

原作で秘書をしていたマチルダさんがいませんし、前の秘書の人は学院長のセクハラに切れてやめたのでちょうど空いていたのでしょうけど……。ジョゼフは何を考えているんでしょうか。

シャルロットたちの様子をそれとなく伺っても動揺した様子は見られませんし、知っていたみたいです。

僕も何も知らない振りをしなさいといけませんね。息を潜めて様子を見ましょう。

どうせなるようにしかならないんですから。

「い、五つのち、ちちからをつかさ、司る」

「ルイズ？ もうちょっと落ち着いたほうがいいですよ？」

「は、はははい！ わっ、わかりました、ウィル先生！！」

「いや、あの……」

「お、落ち着くの、落ち着くのよ私！ おおおおちついてやれば大丈夫、おちついて……」

ダメだこりゃ。思わずそう言いたくなるほどのテンパリ具合です。

まだ呪文を復習しているだけなんですけど、ルイズは朝からこの調子です。

原作だと“ゼロ”のルイズとバカにされてながらずつと意地を張って過ごしていましたから、その分だけ殻が固くなっていったんでしょか。こっちのルイズは四系統に向いていないと僕やルイズの両親も認めているので、本来の臆病な部分が出てきているのかもしれない。

「わわ我が名はつ。ルイズ・フフランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。いい五つの力を司るペンタゴン。われっ！ 我の！ 運命めいめいに従いし、”使い魔”を！ 召還せよ！！！！」

鬼気迫る感じで力いっぱい唱えています。あんなに噛み噛みでいいんでしょうかね。

ちよつとリラックスさせますか。

「ルイズ。ちよつとこちらへ来てください」

「っ！ は、はいっ！！」

飛び跳ねそうな勢いです。とりあえず深呼吸をさせてから、話をします。

「難しいことは考えなくていいんですよ。使い魔は主人と一心同体だと習いましたよね？」

「う、うん。主人といつでも一緒にいる、大切な相手よね」

「そうです。だから、ルイズは緊張しなくていいんですよ。自分の気持ちを感じてください」

「私の、気持ち……？」

「ええ。ルイズの気持ちです。ルイズがどんな相手と一緒にいたいのか。ルイズの隣に誰が居て欲しいのか。

ルイズ自身の気持ち、使い魔を選び、この場に引き寄せる。全てはルイズは心次第なんですよ」

「私の心が呼び寄せる、ずっと一緒にいたい相手……」

口の中で僕が言ったことを繰り返すルイズ。

しばらくそうして考え込んでいた彼女は、しっかりと両目を開いて笑みを浮かべました。

「ありがとう、ウィル。私、何かわかつちやったかも」

ふわりと幸せそうに笑うルイズ。その微笑みは本当に妖精のように可憐で澄んでいました。

「次、ミス・ヴァリエール！ 前へどうぞ！」

ちょうど他の生徒の召喚も終わったようです。残ったのはルイズ、テファ、ジヨゼット、そして僕の四人。

すでに召喚された使い魔たちを見てみると、モンモンは黄色のカエル、ギーシュは人より大きいモグラ、キュルケが立派なサラマンダーで、シャルロットとイザベラはどちらも子供の竜です。あの二人の竜は韻竜みたいですね。力が普通の竜とは大きく離れているのを

感じます。

イザベラがいること以外は原作と同じですね。

さあ、ルイズの使い魔はどうなるか。

“彼”か、それとも……。

僕が固唾を呑んで見守る中、ルイズがひどく優雅な仕草で杖を振り上げます。

まるでダンスを踊っているかのような軽やかな動きで、彼女の杖が振るわれました。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。我の運命さだめに従いし、”使い魔”を召還せよ！」

呪文を唱え終わると同時に儀式場の中央で爆発が起きます。

周りにいた生徒たちが目を閉じる中、僕はただ一人、それを見つけてました。

銀色のヴェールのような、中に浮かぶ扉。

僕の前に現れたその扉に触れました。

一瞬の酩酊感にも感覚の後、僕は儀式場の中心に立っていました。すぐ目の前には、泣きそうな顔をしたルイズがいます。

「ありがとう、ルイズ」

思わず僕の口からその言葉がこぼれていました。

「……なんで、ウィルが言うの？」

ちよっと不満気に頬を膨らませます。

「僕とずっと一緒にいたいって思ってくれたんでしょっ？」

「……バカ」

「ふふ、バカでもいいですよ」

「もう……応えてくれ……がと……」

真っ赤になって小さく呟いた言葉に思わず口元がほころびます。それを目ざとく見止めたルイズが更に赤くなるのですが……。

「え〜っと、ミス・ルイズ。それと……ミスタ・ランペルージ？

コントラクト・サーヴァントをお願いできますか？」

シエフィールドさんがおずおずと口を挟んできました。

……ああ、そういえばいましたね。

周りを見てみるとシエフィールドさん以外は全員啞然としています。テファとジョゼットが何となく「その手があったのね！」という顔をしています。気のせいでしょうか。

「あう、ウイ、ウイル……」

ルイズも周囲の視線に気がついたようで、固まってしまいました。

衆目の中でキスをしるというのですから、恥ずかしいでしょうねえ。でも逃がしませんよ？

「ひっ」

がしつとルイズの肩を掴みます。

「さあ、ルイズ。呪文を」

「ああああ、あああの、わわわたしたちままだがく、学生だし、こ

「こころいうことは……」

「僕が使い魔だと嫌なんですか？」

「ち、ちがつ！　そ、そうじゃなくて……！」

「でも、例え嫌がってもダメなんですよ。使い魔の召喚はいかなるルールより優先される神聖なものですから。」

「ねえ、ミス・シエフィールド？」

「え、ええ、そうですね。呼び出された使い魔とはちゃんと契約しないといけません。さもないと留年ですよ。」

「りゅ、りゅうねん?!」

ビックリするルイズ。まあ、そうでしょうね。ここでキスしなかったら留年だと言っているのですから。

混乱しているところを悪いですが、このまま押し切りましょう。

「ルイズ」

「ふえ、は、はい？」

「僕は君とずっと一緒にいると誓います。例え使い魔じゃなくても、君の側から離れません」

「ウウウイルルル！　な、何を突然！　で、でも、わ、私も……」

あの……」

「我が名はウィル・ド・ランペルージ。五つの力を司るペンタゴン。如何なるときもこの者の側を離れず、この者と永久を歩むことを誓う我らに、祝福を与えよ！」

《コントラクト・ブライド》

「え、えっ?!　ウイ……っ?!」

僕の唱えた呪文に目を丸くするルイズの唇にキスをします。

「む、むう　　ふあああああ?!」

ルイズが叫び声を上げ、同時に僕の左手に激痛が走ります。

左手の、薬指。

そこにルーンが刻まれました。

その意味は『花婿』。

そして、ルイズの左手の薬指にもよく似たルーンが刻まれています。

彼女のルーンの意味は『花嫁』。

効果は単純で、花嫁が危機に陥ったときに花婿にそれが感じ取れるというもの。

これが僕が創り出した魔法、コントラクト・ブライドです。

「……ミスタ・ランペルージ?　今の魔法は一体?」

ぐったりとしたルイズを抱き締めている僕にシェフィールドさんが
厳しい目を向けてきます。

やっぱり新魔法だとばれちゃいましたかね。

僕が『魔法使い』だという疑いを持たれたでしょうが、さすがにこ
の場では仕掛けてこないようなので、構わないでしょう。

「契約の魔法ですよ、ミス・シェフィールド。これがルーンです」
「……確かにルーンが刻まれています。なぜミス・ヴァリエール
がそのように憔悴しているのですか?」

何か危険な行為をしたというのなら、あなたを捕縛しないといけま

せん」

視線が突き刺さりそうですね。
でも、一つだけ間違いがあります。

「ミス・シエフィールド。ミス・ヴァリエールは憔悴しているので
はありません」

この魔法、痛いのは僕だけなんです。正確にはルイズの分の痛みも
僕が受け持っています。

その代わり

「 気持ち良すぎて腰が抜けてしまったみたいです」

そう、女性は気持ちよくなるという副作用があるんです。
俯いて耳まで赤くしたルイズにぎゅっとマントを掴まれましたが、
気絶するほど痛いよりはいいですよね？

「 ……後でその魔法について説明をするように。」

では、次。ミス・ティファニア・ランペルージ！」

「は、はい!!」

「わかりました」

一人で歩けないルイズを連れてジョゼットの待っている場所へ。
途中テファとすれ違います。

「ウイ、ウイルくん」

「頑張ってくださいね、テファ」

「う、うん！ 頑張るから、あの……わ、私も、……が、頑張りま
す!!」

気合十分、といった感じで儀式場にかかるテファ。
未だに真っ赤になって恥ずかしがるルイズを座らせ、テファの儀式を見届けようとしたところ、横にいるジヨゼットに話しかけられました。

「お兄様」

「うん？ どうしたの、ジヨゼット？ テファの儀式をちゃんと見てあげなきゃダメだよ」

「わかっています。でも、絶対にお兄様を呼んでみせるって言いたくて」

「そう。頑張つてね、待ってるから」

「はい！ もしお兄様以外の人が出てきたら、私、この場で自害します！！」

「……そ、そう……。……うん、頑張つてね」

「はい！！！！」

……その後、無事に二人の『花嫁』が増えました。死人が出なくてよかったです……。

「運命」、そして「愛」。

この二つが使い魔の召喚に関わってくるのですから、この結果は当然だったでしょう。

もはや彼女たちの運命が……このハルケギニアの運命が、“彼”と交わることはない。

そう決定付けられた瞬間でした。

波乱の使い魔？召喚（2）

次は僕の番ですね。

三人にキスしたせいかな周囲の視線がかなり刺々しいのですが、柳に風と受け流します。

「ミスタ・ランペルージ。儀式をどうぞ」

視線の刃が十倍くらいになったシェフィールドさんに急かされながら儀式場の中央へ。

いつまでももつたいぶるのも何ですしさくつといきましょう。……ルイズたちが期待の眼差しを向けてきますが、完全に僕の使い魔を狙ってますよね？ 何でストレッチとかしてるんですか、走りこむんですか？

……ゴホン。

さて、気持ちを入れ替えて儀式に挑みましょう。

正直何が出てくるのか自分でもわかりません。僕は四系統に虚無、さらに精霊魔法まで使える世界でただ一人のメイジですからね。すぐくドキドキします。

「我が名はウィル・ド・ランペルージ。五つの力を司るペンタゴン。我の運命さだめに従いし、”使い魔”を召還せよ」

サモン・サーヴァントを唱えた途端、儀式場の中央から光があふれ出しました。光の爆発と言ってもいいかもしれません。

あまりに眩しくて僕でさえ目を開けられません。「扉はどこなのよー？」「ウィルくん、眩しすぎて見えないよー！」「お兄様ー！」何か聞こえましたが気のせいでしょう。

さて、光が収まるとそこにいたのは……。

エルフでした。しかも二人。

あれ、本当に二人いますよ？

一人は何とも露出の多い緑色の服です。これはエルフたちがよく着ている服ですね。もう一人はぴったりと体の線を出す制服。軍隊の制服に似た服を着ています。

どちらも美少女ですが可愛いというより芸術品めいた美しさ。民族衣装の方は瞳に好奇心を漲らせ、周囲に忙しなく視線を向けていて、軍服を着ている方の少女は地面に両手をつきただ呆然としています。

「エルフ?! ミスタ・ランペルージ、すぐに離れなさい!!」

生徒たちが悲鳴をあげて距離を取り、シェフィールドさんが懐から銃と短杖型のマジックアイテムを取り出しました。ルイズたちは不安そうにこちらを見つめています。

警戒心をあらわにした彼女の姿にエルフの少女達二人も注意を向け、今にも一戦始まりそうです。

これは困りますね。僕の使い魔（予定）に勝手に手荒なマネをされては困ります。

《ストーム》

竜巻の壁で儀式場の上の僕たちと他の人を区切ります。風の壁がちよと視線も遮ってくれるので丁度いいですね。

「はじめまして、砂漠の民の方々。僕はウィル・ド・ランペルージ。あなた方をこの地に呼んだ者です。おっと」

自己紹介ただけで制服着ている方の子に切りかかられました。ス

トームの流れを一部変えて防いだの怪我一つありませんが、せめて会話くらいはしてほしいです。

「人間風情め！ わたしを殺しても同志たちがお前たちを皆殺しにしてみせるだろう！！」

「いえ、殺しませんよ……」

「なんだと？ ならば何故……いや、たとえどのような理由であろうとわたしたちは屈しないぞ。この蛮族どもめ！」

「……」

いえ、あの、会話をしてくれませんか？

何で僕があなたたちと敵対すること前提なんでしょう。殺すつもりなら今頃あなたは死んでいますよ？

「ねえ人間。先ほどの鏡みたいなのはあなたの仕業なの？」

「……！ 貴様、誇り高き砂漠の民が……っ！」

「少し黙っていて。話が進まないわ。……それで、先ほどの銀色の鏡はあなたの魔法なのね？」

「ええ。僕が唱えたサモン・サーヴァント 使い魔を召喚する為の魔法です」

「使い魔だと？！ き、貴様……！！ ……っ！！ ……っ！！！」

いい加減うるさいのでサイレントで黙ってもらいました。

もう一人の方は少しだけ黙り込み、会話を続けました。

「使い魔……確か人間のメイジが従える下僕のことだったわね。知恵なき獣を使役する魔法。……その使い魔に、わたしたちがなれと
いうのね？」

「ええ。選んだのは僕ではないのですが、召喚の儀に承えてもらった以上は使い魔になっていただけるとありがたいです」

「ふうん……まあ、それも一興ではあるかしら。人間の使い魔になったエルフなんていないし、サンプルになるかもしれないわね」

口ではそう言っていますが、目がちよつと怖いですね。好奇心とプライドが混ざり合っているような感じですよ。

少なくとも僕に対する好意の類は見えず、静かな怒りと珍しいモルモットを見るような視線が混ざっています。

「あれ？ 人間の使い魔になったエルフならこれまでにもしましたよ？」

「え……？」「……？」「……?!」

サイレントをかけた方が“でたらめを言うな！ 我々誇り高き砂漠の民が蛮族などの使い魔になるものか！”と言いたげですが、残念ながら音声は伝わりません。静かな話し合いはいいですね。

「そのエルフの使い魔というのは誰なの？」

「サーシャというエルフです。名前を聞いてもわからないでしょうね」

「サーシャ……聞いたことないわね」「……」

必死に該当する人物に心当たりがないか考える二人ですが、まあ、知らないでしょうね。

「二人が名前を聞いて心当たりがないのも当然だと思いますよ。別の名前が有名すぎますからね」

「別の名前？」「……？」「……!」

“もったいぶらずにさっさと見え!”という感じの視線がビシビシと。

まあ、最初から話すつもりなので答えを教えます。

「虚無の使い魔“ガンダールヴ”。6000年前に始祖ブリミルの使い魔となった神の左手です」

「ガンダールヴが、エルフですって?!」「……! ……っ!」

“デタラメを言うな!” でしょうか。……サイレントの意味がなかったかもしれないと思い始めました。

「もしも人間について詳しいのなら、“イーヴァルデイの勇者”と言う名前もありますか」

「イーヴァルデイの勇者……待って。その名前は……まさか、聖者アヌビスは本当に……?」

「……?」

「どうやら気がついたみたいですね」

「……それは、本当なのかしら? ブリミルの使い魔、ガンダールヴがエルフだったということは……」

「本当です」

意味深げに見つめあう僕たち。「……? ……! ……??」と一人蚊帳の外ですが、この子もそろそろストームで動きを封じるのをやめていいでしょうね。僕の話にも興味を持ってくれています。

「そう、かつてブリミルが従えた神の左手、ガンダールヴ。彼女は確かにサーシャという名前のエルフであり」

その手でブリミルを殺した、聖者アヌビスです。

なんなら後でブリミルを刺し殺した凶器を見ますか? デルフブリンガーというインテリジェンスソードで僕が持っていますよ、と一

緒に告げた時の二人のあきれ返った顔……きつとかなり珍しい表情だったでしょうね。

「……で、そこまで知っているあなたは何者なの？」

「そうだ、貴様の話が本当かどうか証明できるのか！」

サイレントを解いたところ、またきゃんきゃんと……子犬みたいな子ですね。

「僕の説明をしてもいいんですけど、そろそろ名前くらい教えてもらえませんか？」

「あら。面白い話を聞いてすっかり忘れていたわね。私はルクシヤナよ」

「……蛮族に名乗る名などない」

「ふむ、じゃあ、ルクシヤナと、そっちのあなたは仮にチワワちゃんと呼ぶことに」

「ファアティマだ！ なんだチワワとは！」

「じゃあ、ファティと呼びましょう。で、僕の正体ですけど……想像はついているのでは？」

「……ええ」

「何だと？ さっさと答え！」

「私に怒鳴らないで。……それで、あなたの正体だけど」

騒ぐファティをかわすルクシヤナ。

先ほどまでの余裕のある態度に見えますが、わずかに震えていました。

「あなた、虚無の担い手よね？」

「ええ。虚無も（・）使えますよ」

僕がそう答えた瞬間、ファティが剣を振りかぶり切りかかってきました。

虚無の担い手 エルフにとっての悪魔。

それが目の前にいるのですから、彼女にとって当然の行為なのでしようけど。

「なっ！」

「えっ？」

彼女は剣が、見えない壁に弾かれます。

「カウンター
反射?!」

やっぱり、人間が精霊魔法を使ったら驚きますよね。

さあ、そろそろ正体晒しネタバラをしましょうか。

「虚無の担い手にして神様おおいなるいしの使い、それが僕ですよ」

ええ、嘘は言っていないですよ？

この世界の理を司り、生物を超越した力を持つ大いなる存在 神様から僕はこの力を貰ったのですから。 神

エルフが信じる存在と完全に同一かは知りませんが、アレは神であり、同時に大いなる意志と呼ぶに相応しい存在であると僕は思っています。

「な……ふ、ふざけるな、蛮族などに大いなる意志がわかるものか！ これも何かトリック、そう、虚無あくまのちからに決まっている！」

何度も何度も剣を振るい、銃を抜いたファティですが、彼女の攻撃は全て反射によって跳ね返されます。

「あなたたちならわかるはずですよ、この場の精霊は全て僕と契約していることが。人間である僕が精霊魔法を使えることこそ大いなる意志の使者である証拠です」

「そんなことはありえない。わたしは絶対認めないからな！」

「……この人間の言葉は嘘はないわ」
「貴様！」

「あなたもわかっているのでしょうか？ 反射が使えるんですもの、少なくとも彼はわたしやあなたよりもずっと強力な精霊魔法を使えるはずよ。」

ただの人間にそんなことができるとは　まして、虚無の担い手に精霊魔法が使えるとは、私は思えない」

「……………それは」

「それで、大いなる意志の使者を自称するあなたはこれからどうするの？　今度こそ人間たちを引き連れてエルフを皆殺しにするつもり？」

剣を下ろしたフェアティに変わり、ルクシヤナが前に出ます。こうして見ると二人はけっこういいコンビな気がしますね。

さて、彼女の問いに関する答えですが、僕の答えなど一つしかありません。

「もうすぐ聖戦が行われるので、それを秘密裏に止める。それが望みです。話を聞いてもらえますか？」

僕の発した聖戦という言葉に息を呑む二人。

虚無の担い手である僕が言うのですから説得力も一際です。目覚めた四人の虚無の誰かを旗印に祭り上げ、聖戦を行なうというのが一番わかりやすいストーリーですから。

「それは……詳しく話を聞かせてもらうしかないわね」
「そうだな。戦ったところでもちろん負ける気はないが敵の情報は多いほうがいい」

腰を入れて聞く態勢に入った二人に、僕の知っている現在の情勢と今後の僕の計画を打ち明けます。

「……馬鹿げてる」
「そんなことが可能……なのよね」

まるで子供の夢物語か悪夢でも聞いたかのような反応をされました。ですが、本当に実行できるなら否やはなさそうです。

ルクシヤナは人間の世界への興味、ファティは僕という虚無から目を離さないという意味も込めて、僕を手伝ってくれることを約束してくれました。

「さあ、それでは契約を行ないましょう。説明にも少々時間を取られましたし、いつまでもここに居るわけにもいきませんからね」

「だいたい五分くらいですかね。ストームの外でどうなっていることやら。」

さくつと契約して早めに出た方がいいでしょう。

「うーん、一応わたし、婚約者がいるんだけど……」

「使い魔のルーンがないと流石に外を出歩けませんよ？ どうしても嫌なら砂漠まで送りますけど」

「それはいや」

ルクシヤナは契約の方法がキスだと聞いて迷う素振りを見せましたが、砂漠に戻るくらいなら、とあっさり意見を翻しました。

「まあ、エルフじゃなくて人間だし構わないわよね。あなたと一緒にの方が色々面白いものも見れそうだし」

軽い、婚約者の扱いは軽すぎです。今のセリフを聞いたらきつと怒り狂うことでしょう。

遠く砂漠の空の下にいるまだ見ぬ婚約者の彼にそつと黙禱を捧げ、呪文を唱えます。

「我が名はウィル・ド・ランペルジ。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、私の使い魔となせ」

軽く唇を重ねて、離れました。

これで終わり？と不思議そうな顔をしていた彼女ですが、急に左手を押さえてその場へたり込みます。

しばらくして、涙の浮いた顔を上げました。

「何これ……痛くて気絶するかと思ったわ……」

左腕に浮かんだルーンを睨み、手で擦っています。原作の“彼”はルーンが刻まれたとき毎回気絶しましたね……。

「ガンダールヴ」……光り輝く左腕、ね」

どんなルーンが出るかと思いましたが、どうやら虚無の使い魔のルーンようですね。

そうになると、ヴィンダールヴ、ミヨズニトニルン、ガンダールヴの三つまで揃ってしまったことになります。

……ふむ、少しだけ仕組みがわかった気がしますね。やはり「四の四」ですか。

「ファティ。ルクシャナに剣を貸してもらってもいいですか？」
「……ほら」

ファティの剣をルクシャナが受け取り、左手に持ちます。するとガンダールヴのルーンがわずかに光り始めました。

「すごい……体が羽のように軽いわ。力が溢れてくるみたい。それにこの剣の使い方も自然と感じられる……」

どうやらガンダールヴのルーンの効果は正常に出ているようです。イレギュラーな存在ですが、一応僕も虚無の担い手扱いみたいですね。

「さて、では次はファティですね」

「ああ。いいか人間、勘違いするなよ？ わたしの果たすべく使命の為に協力するだけだ。下僕になったなど思い上がったことを考えないことだぞ」

「はいはい、じゃあ始めますよー」

「こ、この………ちっ」

ファティが待ちきれないようなのでさくさく行きましょう。

「我が名はウィル・ド・ランペルジ。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、私の使い魔となせ」

ファティとキスをしましたが、特に反応がないですね。嫌そうな顔をしています。これは嫌いな動物に顔を舐められた時みたいな感じ。人間⇨動物なんでしょうね。

「ぐ……あ、あああああー!!」

さて、胸を押さえてのた打ち回る彼女ですが。
このままなら、第四の使い魔・神の心臓“リーヴスラシル”になる
でしょう。

……でも、リーヴスラシルっていらないですよね？

どう見ても生贄フラグですよ。器とか始祖の虚無の復活とか、僕は
全然興味ないです。

そういうわけで、新魔法！

「我が名はウィル・ド・ランペルージ。五つの力を司るペンタゴン。
私の命を持ちて使い魔に名を与えよ。すなわちその名は“ヴィンダ
ールブ”!!」

《エン 그레이ブ・ルーン》

素早く呪文を唱え杖を振るい、彼女の右手に向きました。

「ひっ、ぐ、あ？ ああっああああ………?!」

悲痛の叫びを上げながら胸を押さえていた彼女が一瞬動きを止め、
右手を抱えてまた叫び声をあげます。

その声が聞こえなくなり、後には気絶をしたファティが横たわって
いました。

彼女の右手に刻まれたルーン。

“ヴィンダールブ”

そう、しっかりと書かれています。確認の為に彼女の胸元を開けてみましたが、そこにもう一つルーンが！という展開もなく綺麗な肌でした。

さあ、これで使い魔の契約もお終いです。

ストームを解いてみんなに説明しないといけませんね……ちょっと面倒くさいですが、頑張りましょう。

「ジュリオ！」

美貌の教皇ヴィットーリオがその知らせを受けたのは子供たちに字を押している時だった。

逸る心を抑え、普段のように穏やかに振る舞い、自らの手で片づけをおこなった彼は、自由の身となった途端足早に目的の場所へと向かった。

聖歌隊の訓練の最中、突然ジュリオが倒れ医務室へと運ばれたというのだ。

彼には珍しく心配に表情を曇らせたヴィットーリオは、医務室のベッドの上に身を起こしているジュリオの姿を発見した。

一時意識を失ったと聞いていたが、どうやら無事に目を覚ましたようだ。

「体調はどうですか？ 何か違和感などがあればすぐに言うのですよ」

優しい言葉をかけるヴィットーリオに対し、ジュリオの顔色は悪かった。

心配する彼に、のろのろと服を脱ぎ、問題の箇所を見せる。

「これは……？」

見たこともないルーンが、ジュリオの胸に浮かび上がっていた。それは彼らの知る虚無の使い魔のルーンと酷似している。

ジュリオが右手の手袋を外す。

本来そこにあるべきはずのルーン “ヴィンダールヴ” のルーンは消えていた。

波乱の使い魔？召喚（2）（後書き）

ちなみにこの時点では始祖の円鏡に“生命”の呪文が浮かんでいません。

ですのでヴィットーリオたちは“リーヴスラシル”のルーンも知りません。

エルフって野蛮

エルフを使い魔にしたということで学院長の部屋へ連れて行かれま
した。

さすがオールド・オスマン。エルフを相手にしても動じることなく
生徒と同じ待遇を約束してくれました。

でも、使い魔の基本は主人と常にいることです。部屋の中に入らな
いようなサイズならともかく、人間とエルフの大きさはほぼ同じ。
同じ部屋で寝泊りするべきでしょう。

ルクシャナとファティも僕が男だとか気にしていませんね。人間
を動物とみなすような価値観ですから、原作でルイズがサイトに裸
を見られても何も感じなかったのと同じでしょう。

ですが、一応僕はジョゼツトたちの使い魔でもあるわけで。
それに専属メイドとなっているシエスタとアンリエッタまで加える
と八人に及びます。

これでは寮部屋は狭すぎるので、購買の子達用の宿舍の一室を使う
許可をもらえました。生活用品も揃っていて学院の寮より居心地い
いのでラッキーです。

一つだけ問題があるとするとしたら、シエフィールドさんにルクシャナ
とファティのルーンを見られたことでしょう。

使い魔と証明するために隠す訳にいかなかったもので、見せるしかな
かったのですが、相手は神の頭脳“ミヨズニトニルン”です。“ガ
ンダールヴ”と“ヴィンダールヴ”のルーンくらい知っていること
でしょう。そうなる僕が虚無の担い手だとばれてしまったと思っ
たほうがいいですね。

彼女が途中で用事がある、と言って退出したのもジョゼフに報告に
行ったに違いありません。《コントラクト・ブライド》の説明を聞
いて目の色を変えたようみに見えたは気のせいでしょうね。

まあ、そのおかげで特に追求もなく話がスムーズにすんだのでとりあえずはよしとしておきますか。

ところで僕の使い魔として二人が召喚された理由ですが、おそらく「四の四」の関係でしょうね。

現在、虚無の担い手が六人います。ルイズ・テファ・ジョゼフ・ヴィットーリオ、そして控えらしきジョゼットと、イレギュラーの僕。そして僕が使い魔を召喚する前の虚無の使い魔たちですが、

ジョゼフ ミヨズニトニルン

ヴィットーリオ 元・ヴィンダールヴ

ルイズ 僕（ただし、コントラクト・ブライド）

テファ 僕（ただし、コントラクト・ブライド）

ジョゼット 僕（ただし、コントラクト・ブライド）

となっています。

そう、五人が使い魔を召喚していて、実際にルーンが刻まれたのは二人だけしかいないのです。

これで僕が召喚し、一人しか出なかったら、使い魔は三人。

なんと、「四の四」が揃わなくなります。

……まあ、ジョゼットが使い魔を召喚できたように他の虚無候補のところにも四人目が出て数あわせをする、ということもありえましたが、虚無の覚醒者はテファ・ジョゼフ・ヴィットーリオの三人がすでにいて、僕も虚無が使えるということを考えると……。

サモン・サーヴァントの呪文を行なった際に虚無のシステムが、未だに虚無に目覚めていないルイズではなく僕を「四」人目だと認識し、残った二人分の使い魔候補を同時に召喚させた。

こういう推理もできるわけです。

まあ、実際はこの魔法の効果はいまいちはつきりしませんし、確証を得ることは出来ないでしょう。虚無の使い魔が四人とも揃った。その結果こそ事実であり、重要な意味を持つのです。

さて、あれやこれやでけっこう手間取りましたが、改めて全員で顔合わせです。これから一緒に暮らしていくメンバーなので最初が肝心ですね。

アンリエツタは今回はメイドではなく姫としてテーブルについてもらい、シエスタがお茶を入れて回ります。

いやー、それぞれの自己紹介を聞いた二人の顔が面白かったです。

何せ、ガリア・トリステイン・アルビオンの三王家　虚無の血統が勢ぞろいですから。問いただしたそうな目で見てきますが、彼女たちの前で話すことではないので今は無視しておきます。で、順番が巡り、テファの自己紹介となったところ。

「貴様の母親のせいで、わたしの一族がそれほどの苦勞を負ったと思っている！」

ファティが大爆発しました。テファがハーフェルフで、母親がシャジャルさんと知った途端、剣を抜こうとまできました。

彼女はテファのお母さんがいた部族の出身らしく、シャジャルさんが追放されてからはエルフ中からのけ者にされていたらしいです。パンを買うことすらできないとか、酷い話です。

大好きな母のことを責められテファが酷く落ち込んでしまい、初めての顔合わせは何とも言いがたい空気に。ハーフェルフって初めてみたわ、と興味津々だったルクシヤナまで空気を読んで静かにしていました。

室内の居心地がとても悪かったので、空気を入れ替えるために一度

場所を移すことにしました。

場所を改め、お風呂場にきています。

……え？ 何でお風呂場なのか？

いや、先ほどのストームで砂がけっこう舞い上がってしまったので、全身が埃っぽかったんですよ。みんなも同じらしいので、ならお風呂にみんなが入って親交を深めようということになったわけですね。裸になればみな同じ、みたいなことをワンピースのアラバスタ編で言ってみましたし、仲良くなるのに打って付けでしょう！

あ、僕と一緒にいることに関してですが、ジョゼットたちは今更ですし、ルクシヤナたちも人間に裸を見られようが気にしません。飲み物なども持ち込んで中でくつろぐ気満々ですよ。

「これ、本物だったのね」

「え、あの、あの……何で触るんですか？」

「生命の神秘だわ……」

ルクシヤナとテファがさっそく仲良くなっています。

「何で同じものを食べてるのにこんなに違うのかしら……」

「ちいねえさまよりもおつきい……私と同じ年なのに……」

「ふ、二人も？ あ、あの、やめて……ウィルくん、助けてええ……」

微笑ましくじやれあう四人から離れ、一人で未だに険しい顔をしているファティの横に腰掛けます。

何か話題でも……と思ったのですが、さっき感じたことをそのままぶつけてしまいましたよ。

下手に言葉を飾るより直球勝負ですよ。

「エルフって思ったより野蛮ですね？」

いやあ、何故だか彼女と話す時は、ついからかい混じりになる気がします。反応が力いっぱいな感じが微笑ましいんでしょうか。

ほら、今の一言でもう目を釣り上げて睨んできます。

「……何だと？」

「エルフって思ったより野蛮ですね、と言ったんですよ」

「貴様……！」

勢いよく立ち上がったファティですが、腰に手を伸ばしたところで剣がないことに気がつきました。目の前で仁王立ちとは……眼福眼福。

激怒している彼女ですが、精霊魔法を使おうにも僕の方が力量は上です。憎憎しげに一睨みし、腰を降ろします。

「どういつつもりだ。侮辱するというのがなら」

「そのままの意味ですよ。テファの母親であるシャジャルさんは、サハラから追放されてこのハルケギニアにやってきたのでしょうか？」

「……だから何だと？ 追放されてかわいそうだ、とでも言うと思つたか？」

「いえいえ、そうではなくて。シャジャルさんが罪を犯して追放されたのだとして、部族の他の人たちが追放されていないのは何も罪を犯していないということだからでしょうか？」

「……当然だ。わたしの部族のみんなは、罪など犯していないに決まっている。だがあの女の」

「それなら、犯罪に何の関わりもない相手をエルフたちは不当に虐げということになりますよね。」

犯罪者の身内が全員が犯罪者なんてことはありえない。

だというのに、そんなことをするのなら、エルフは理性的な判断すらできないただの野蛮人ですよ」

「……それは……っ！」

僕が言ったことに反論ができず、目を泳がせています。

当然でしょう、僕の発言　犯罪者の身内が全員犯罪者なわけがない、という言葉を否定してしまえば、自分たちの部族の全員が犯罪者だと認めることになります。

ではエルフが野蛮人かどうかという点ですが、罪もない相手を不当な理由で蔑視し、差別を行なっているのですからとても理性的な行為とは言えません。

感情の赴くままに他を虐げる、これを野蛮と言われても否定できないでしょう。

「ファティたちの苦勞は誰のせいなのですか？　テファのお母さんが全て悪いんですか？

違うでしょう。理由を見つけたからと嬉々として人を貶める心卑しい人たちのせいでしょう？」

「……」

「いきなり仲良くなれとは言いませんが、八つ当たりはダメですよ。ファティは怒りの矛先を間違えています」

不満をぶつけるのにテファはぴったりかもしれませんが、それは間違った行為です。

そう告げる僕に目をあわせられず、握り締めた拳は色を失ってしまいました。

「……」

「はい？」

「綺麗ごとをグダグダと抜かすな！ それじゃあ、わたしのこの気持をどうすればいいんだ！ あの女のせいだと歯を食いしばっていた生きてきた部族のみんなに、それは八つ当たりだ、憎むなら他のエルフを憎めというのか！ それで刃向かって今度こそ一族全員死ねというのか！！」

溜め込み続けていたものが一気に溢れたように彼女の言葉が続きます。

それは酷く感情的で支離滅裂で怒りに満ち、そして何より悲しい叫びでした。

ファティもいろいろとあったのでしよう。

追放者を出した部族の出身であり、今はエルフの中でも急進派の『鉄血団結党』に属する若き海軍将校。その地位に就くまでどんなことがあったのかは知りませんが、その動機の一部にテファの母親の一件は重くのしかかっていたのではないのでしょうか。

ただの推測でしかありませんが、例えば、エルフの敵である虚無を彼女の自身の手で滅ぼすことで一族に押された不名誉な烙印を払拭する、というような思いがあったのかもしれませんが。

こちらの様子を伺っていた四人に心配しないでと仕草で返し、一転して火が消えたように静かに泣き出した彼女を慰めます。

ああ、彼女をからかってしまう理由がわかりました。

単純に、可愛い女の子が肩肘張っている姿に我慢できなかったからです。

怖い顔して任務だの指名だのエルフの理想だのと……女の子はもっと笑顔でいるべきです。今ここにいるメンバーもそうですし、家臣団の子達だってもっと生き生きとしています。

軍の制服を着た彼女の姿は、とても息苦しそうに見えました。

うん、エルフの意識改革や彼女の部族の救済をするのに何が必要か考えてみますか。

実際、食料の輸送とか住む場所の提供くらいならいくらでもできます。そこまで劣悪な境遇なら、さっさと他のエルフたちから距離を取ればよかったですよ。

こちらが一方的に我慢してまで、くだらない人種と付き合う必要ないでしょう？

もっとみんなが笑顔になれる未来を探すべきですよ。

決闘フラグを拾いました……え、これ決闘？（前）

一夜明けて今日は二年生の最初の授業。使い魔たちが教室に溢れています。

けれど、生徒たちの視線を集めるのは教室の一角。僕たち　　といふよりは僕の隣に座るエルフたち二人をチラチラと見ているいる言っています。

その瞳には恐怖や嫌悪の色がベツタリとついていて、彼らには美少女ではなく怪物に見えるのでしょうか。

本当に宗教って怖いですね。

で、僕たちも僕たちでそんな居心地の悪い空気もどこ吹く風。

ジヨゼットは僕の隣に座れて腕を絡ませ幸せそうにしていますし、テファとルイズはそれを羨ましげに見つめています。おや、シャルロツトとイザベラも同じクラスになったみたいです。それとなくジヨゼットを見ていますが……ようやく気がついたんでしょうか。

ちなみに席順はルイズ・テファ・ジヨゼット・僕・ファティ・ルクシヤナの順です。え、キュルケですか？　彼女も同じクラスですね。今はルイズの隣で彼女をからかっていますよ。

あの二人は原作開始時より仲がいいみたいで、よくじゃれあっています。僕がキュルケに靡かないので、ルイズがちょっと強気なのが微笑ましいです。

隣に座っているファティは朝から大人しいです。あの後布団を被ってずっと丸くなっていました。恥ずかしくなっただけでしょう。今朝、例の軍服ではなくうちの購買の服に着替えてもらおうとしたら素直に受け取ってもらえました。僕の保護下にいると他の人にわからせる為に、絶対に着てもらわないと困るからいいんですけど、棘が抜けたら一緒に元気も抜けてしまった感じですよ。これはそのうちどう

にかしましょう。

昨夜のルクシャナですが、人間とエルフたちの生活様式の違いについてずーっと質問していました。エアコンがここにもあると知り驚いていましたが、この場所が特別なだけで普及はしていないと聞いて納得したようです。その間にルイズたちとも大分打ち解けました。そういえば、彼女たちはうちの制服の性能に目を丸くしていましたね。精霊魔法に熟達したエルフなら水石も作り出せますが、それを糸状に加工したり魔法を付加したりするという発想は今までなかったようです。

うちも水の精霊の協力で開発した技術ですし……ああ、水の精霊に会わせたら「もう何があっても驚かない」と言われましたよ。どうやら『僕〃非常識』という公式が確定したようです。正しいんですけど……、ねえ？

さて、人間のメイジがどのような勉強をするのかはルクシャナだけでなくファティも興味はあるようです。

虚無を倒すために人間世界に攻め入ろうとか考えていたようですし、仮想敵の戦闘力を知っておこうということかもしれません。穿ちすぎですかね。

ミス・シュヴルーズが入ってきたのでみんな静かになります。

「み、みなさん、こんにちは。春の使い魔召喚の儀を無事に終えられたようで大変嬉しく思います」

あれ、なんだか震えていますね。額に脂汗が見えますよ。

「毎年、みなさんの使い魔を目にするのが私の楽しみ……なのです
が、ええと、とにかく授業に入りましょう」

話を途中で切り上げて、さっさと授業に入ってしまった。

これは……あれですね。

彼女、全くこちらを見ません。エルフの二人に完全に怯えています。たぶん、使い魔の話が続けたら二人を刺激すると思っただけでしょうね。大げさかもしれませんが賢い選択だと言えるでしょう。

その後、丸っこい犬がルイズをバカにすることもなく、静かに錬金の授業に入りました。彼女が真鍮を錬金してキュルケが「ミス・シユールズ。それは金ですか？」と聞いたのは原作通りでしたよ。

「……やはり、人間はこの程度か」

ぽつりとファティが呟きました。生徒が一人一人錬金をかけていくのを見ての感想です。

「でしょうね。ここにいるのは生徒ですし、土に向いていないメイジがほとんどですから、エルフたちから見たら幼稚だと思いますよ」

「エルフはこんな風に理を捻じ曲げることはしない」

「……まあ、確かに捻じ曲げてますね」

確かに石を鉄とか金とかいろいろと変化させるなんて、物理法則を完全に無視していますね。

そういった法則を無視する分、応用は広いですが威力は低いのが系統魔法ということでしょう。

「え、えー。みなさん、私語はやめてくださいね」

おっと、話を振られたのでつい。でも、気持ちはわかりますがピシツと言えないあたり教師としてどうなのでしょう。ファティと話を切り上げ、授業に戻ります。

「で、では次は……ミス・ヴァリエール。お願いします」

その一言で教室中がざわめきました。

「この人、何言ってるの？」という空気です。

「ミス・シュウルズ」

「は、はい！」

あれ、軽く声をかけたただけで直立不動のポーズを……地味にシヨックですが、言うべきことは言っておかないとダメですね。

「ミス・ヴァリエールに錬金をさせるなら、外に出て行ったほうがいいと思います」

「外……ですか？」

「はい」

「大丈夫よ、ウィル。ちゃんとサモン・サーヴァントもできたのよ、今日は成功する気がするの！」

「ええと……ミス・ヴァリエールもこう言っていますし、やっていただこうと思うんですけど……」

何故か僕の顔を伺っています。その態度でいいのかと真剣に問いたいところです……。

「ルイズ、ちょっとだけ待ってくださいね。では、ミス・シュウルズはミス・ヴァリエールにここで錬金をさせるつもりなんですな？」

「え、ええ」

「それは、教師として生徒の情報を踏まえた上での判断ですか？」

「ミ、ミス・ヴァリエールは授業態度も真面目で、魔法の発動こそ成功しませんが大変優秀な生徒だと聞いています」

「そうですね……では、ルイズが魔法を失敗しても、それは故意で

はないとご存知なのでしょう。失敗は誰にでもあるのですから、まさか、その責任をルイズ個人に取らせたりはしませんよね？」
「もちろんです！ 失敗を繰り返してこそ成長があるのですから。まさか生徒を責めるなど……」

よし、言質は取りました。

「わかりました、僕から言いたいことは以上です。授業の邪魔をしまして申し訳ありませんでした」

失敗前提で話す僕にちよつとルイズがむくれています。でも、コモンならともかく土の系統魔法はどんなにやる気があっても無理です。これもルイズの為なのです。

「いきます！」

ルイズが勢い良く杖を振り上げたのにあわせ、生徒たちが机の下に避難します。

僕はエア・シールドと反射をみんなの周りに張り巡らせました。キルケもまあ友達ということで入れてあげましょう。

そして、爆発。

教室中がしっちゃんかめっちゃんかで、ミス・シュヴルーズは気絶しています。

煤一つついていない僕たちに恨めしげな視線が集中しますが……教室の中でやることを最終的に決めたのはミス・シュヴルーズですからお門違いですよ、文句は彼女へどうぞ。

もちろん、その後の授業は中止です。罰掃除などありません。魔

法の失敗は生徒の責任ではありませんし、僕の忠告も聞かず、ルイズの魔法が失敗すると爆発することすら知らない方が悪いです。本当に有名なんですよ？ 教え子のことを調べたと言っなら知らないはずがないんです、去年の先生方だってみんな知っていますから。それなのに知らないなら、完全に彼女の調査不足、自業自得です。ミス・シュヴルーズが目覚めたら、教師としての責任を取って綺麗に掃除してくれることでしょう。

あと思ったのですが、あの人、教科書とか書いているみたいですし本質は研究者。大学の教授みたいな人だと思います。良き研究者が良き教育者とは限らないのですが、どうなることやら。

昨日はいろいろとあって学院内を案内できなかったので、それぞれの塔や学内の施設について説明しながら一回り。その後は学内のテラスでお茶をします。

僕たち 特にエルフの二人が入ってきて一瞬テラス内が静かになりましたが、気がつかずに騒いでるテーブルが一つあります。

「薔薇は多くの人を楽しませるために咲くのだからね」

ええ、今の発言でわかるでしょう。

薔薇はかの人と愉快な仲間たちです。

……おや、香水瓶が。

「ギーシュ、落とし物ですよ」

床に落ちていたそれを拾い、渡してあげます。

「え、ああ、ウィルか。ありが……」

ピタリと動きをとめました。受け取ろうかどうかどうしようか悩んでいま

すね。

平民相手じゃあるまいし、僕が手渡そうとしているのを無視するわけにもいきません。

でも、悩むのはいいですが、そろそろタイムアップですよ？

「おいギーシュ！ それはモンモランシーの香水じゃないか！ お前彼女と付き合っているのか！？」

その一言に騒ぎ出す取り巻きたち。

ギーシュがなんとか誤魔化そうとしたところで一年生のマントをつけた女子生徒とモンモランシーが現れ、絶交を言い渡されました。

「ひ、酷いよウィル！ 君のせいで二人のレディを悲しませてしまったじゃないか！」

「いや、今のはギーシュの自業自得でしょう」

半分以上はわざとでしたが……浮気は早いうちにはれた方が傷は少ないですよ？

これからも繰り返すでしょうしね。

僕の言葉に周りのみんなも同じ意見のようで、ギーシュを諭そうとしたり慰めようとしていますが。

「君に、君にだけは言われたくないぞ！ そんなにたくさん女の子をはべらかして、さらに使い魔まで！ しかも二人も！ なのに、なんで君は振られないんだ！」

そんな発言が飛び出してきました。

「何でも言われましても……人徳でしょうかね。あるいは積み重ねた時間の違いというか……まあ、僕のことなんて今はいいじゃない

ですか」

「よくない！ 今だから言わせてもらおう。僕は君が羨ましい！
ティファニア嬢のあの胸を独り占めして他の女の子までなんて許さ
ない！！！」

「いや、何ですかそれ、ちよっと」

「よくぞ言った、ミスタ・ギーシュ！ ぼくにも言わせてくれ、実
はジョゼット嬢とは前から親しくなりたかったのに、いつもいつも
ミスタ・ランペルージばかり……さらにはキスマで！ 羨ましいぞ
おおおおお！」

「俺だつて、俺だつてミス・ヴァリエールに本当は……！ なのに、
ハーレムなんて作つて……貴様だけは！ 絶対に！ 許せねえええ
え！！！！」

「何で俺の使い魔はトカゲで君の使い魔は美少女、しかも二人も！
天罰よ下れ、もげろ！！！」

「……」 決闘だ、ウィル（ミスタ・ランペルージ）！！！！！！

……え、後の三人誰？

決闘フラグを拾いました……え、これ決闘？（後）

ヴェストリの広場で決闘をすることになった僕ですが、何故か相手が四人。

「えーと、これは決闘と言っんですか？ ただのいじめじゃないですか？」

「ウィル、君に対抗するにはこうするしかないんだ！ 君はスクエアで僕たちは四人いるが皆ドット……数の上ではこれでしょうやく互角さ」

ふさあ、と髪をかき上げながら情けないことを言うギーシュ。後ろに控える取り巻き×3もうんうんと頷いています。

いえ、まあスクエアを相手にするならドットじゃ四人でも少ないくらいですけど、決闘ってお互いの誇りをかけて一対一で行なうものじゃなかったんですか？ 建前は。

「ハーレム野郎に天罰をくらわせるー！」「頑張れ、ギーシュ！ボクたちの敵をとってくれー！」「君たちならやれる、むしろ殺れ！ そして俺が代わりにハーレム王になるー！！」

なのに、何故か観客席は満場一致でギーシュの味方……最後の発言したキミ、すっかり声は覚えましたよ？

あ、ジョゼットたちは不安そうな顔で僕たちのやりとりを見ていますよ。ルクシヤナとファティはギーシュたちに憐みの視線を向けていますけど、僕の応援してくれていますよね？

「誰か、審判をしてくれないか！」

「私が」

ギーシュの呼びかけに答えたのは……シャルロットでした。あれ、原作だと審判は確か丸っこい犬だったような……。期待の眼差しをヒシヒシと感じます。

ルールはいつもの通り、杖を落とすか、傷を負うか、負けを認めるか。

お互い同意したところで決闘開始です。

「エア・ハンマー」

最初は軽く様子見、と四発のエア・ハンマーをぶつけてみたのですけど。

「最初から本気でいくよ！ 僕のワルキューレたちよ、いけー！」

ギーシュが薔薇の杖を一振りし、青銅で作られたゴーレムたちがそれを体で受け止めます。

中身が空洞なので四体のゴーレムがエア・ハンマーの一撃で破壊されましたが残りの三体はまだ健在。ゴーレムの影に隠れるようにして取り巻きたちも動き、魔法を唱えてきます。

「ファイア・ボール！」

「エア・カッター！」

「アイス・ニードル！」

……普通に殺しにかかっていませんか？

狙いが甘いのか、それとも最初から打ち合わせているのか、微妙に散らばるように打ち込まれた魔法は普通の方法では避けられそうにありません。

エア・シールドで防いだところで、ゴーレムが接近して直接攻撃をあれ？

「ギーシュ？ 何で破壊したゴーレムが直っているんですか?!」

そう、取り巻きたちの護衛についた3体はそのまま、最初に壊した4体がいつの間にか復活していました。

「わからないのか、ウィル！ 今の僕は君を倒すためなら悪魔にだって魂を売っても構わない、その思いが僕に更なる力を与えてくれているんだ!!」

「……はあああああ?」

なんですか、それ。こんなことでパワーアップしなくても……つと。本当にゴーレムの動きの切れが増してきています。この同時攻撃はなかなかですね。

雨霰と打ち込まれる魔法をエア・シールドで弾き、ゴーレムが振るう剣は体術で避けます。魔法だけじゃなくて剣でもそれなりに戦えるんですよ。

「くそつ、どうして当たらないんだ、俺たちじゃダメなのか!」

「諦めるな！ 信じるんだ、ぼくたちなら勝てるよ。ウィルに勝つて本当の愛を証明してみせるって誓ったじゃない!」

「……そうだったな、すまん、弱気になっていたみたいだ」

「大丈夫、ぼくたちは仲間だろ？ フォローするのは当たり前じゃないか。なあ、そうだみんな!」

「「おう!!」」

「……何で僕、こんな扱いなんでしょうね?」

彼らが青春しているのが無性に悔しかったので、杖にブレイドをかけてゴーレムを全部切り捨てました。
エア・ハンマーを打ち込み、護衛役も含めて一瞬で全部のゴーレムを破壊します。

「さあ、そろそろ終わりにしましょう」

彼らの動きが止まった一瞬の隙を突き、詠唱を始めます。
選択したのはカッター・トルネード。僕の二つ名『風刃』の由来となった刃の暴風です。

「みんな、集まれ！」

ギーシュの一言で全員が集結しますが……ドットやラインクラスの魔法でこれは防げませんよ？

取り巻きたちの顔にはつきりと絶望の色が浮かんでいるのがその証拠です。

しかし

「僕たちは負けない、負けるわけにはいかないんだ。ウィル、ここで僕たちは君を超える……！」

ギーシュが先頭に立ち、僕に相對します。

「この魂の全てを魔法に変え、君を討つてみせる……！」

そうして唱え始めたのはブレッドの魔法。本気でスクエアスペルにドットスペルで立ち向かうようです。

面白い、本当に勝てると思っっているのなら、その傲慢ごと吹き飛ばして差し上げましょう。

後から唱え始めたギーシュですが、ドットスペルの方が詠唱時間は短いです。これは、同時か……そう思ったところで。

「俺もやるぜ！」

「ギーシュ、君だけにかっこいいところを持っていかせないよ」

「嵐に立ち向かうのに風メイジの力も必要だろ？」

なんと、取り巻きの三人まで立ち直り、それぞれ呪文を唱え始めました。

ギーシュ……いい仲間に使われましたね。

ならば、僕も本気で相手をするのが礼儀というもの。
さあ、詠唱は完成しました。

《カッター・トルネード》

触れるもの全てを切り裂く暴虐の嵐が、今その牙を向きます。
地面にその力の一端を刻みつけながら迫る暴風に、しかし勇者^{おろかも}たちは一人として目を背ける者はいません。

《ブレット》

《アイス・ニードル》

《ファイア・ボール》

《エア・カッター》

吹けば飛ぶような脆弱な魔法　そのはずでした。

「え……?!」

四人の放った魔法が歪み、一つに交じり合います。

が打ち破られ、魔弾が僕の体を貫きました。

「まさか、最後の最後ラインに上がるとは思いませんでしたよ……」

地面に横たわる僕が、勇者たちを見上げます。

「どうだいウィル、僕たちの　ウィル?!」

「ふう、どうしたんですか、そんな顔をして?」

「どうしたじゃないよ、凄量の血が……それに、その腕は一体?

「!」

「ふふふ……これですか」

両手がさらさらと砂と化し、崩壊が始まります。

「力の代償、といったところでしょうか……ギーシュ」

人の身で人を超えた力を得た、その代償。結局、僕はこの世界の人間ではなかった、そういうことなのでしょう。

せめて、脆弱な人の力で僕を倒した彼らに、最後に何か言葉を残しましょう。

「力? 代償? ウィル、何を……いや、とにかく水メイジを呼んでくるから」

「ギーシュ。もっと強くなりなさい。僕に勝ったところで戦いは終わりません。……そして、第二、第三の僕が現れた時、君が再び立ち向かうのです」

「戦いは終わらない? それに、第二、第三の君だって? 何を言いたいのかわからないよ、それより早く治療を……」

「その必要はありません。すぐ、君にも僕の言葉の意味がわかり」

《××××》

「ウィル?!」

突然僕の胸に打ち込まれた攻撃魔法によって、一撃で体が崩壊しました。

風に吹き飛び、意識が細切れとなって消滅していくなか、最後の瞬間にギーシュに届けと声を張り上げます。

つ、と。

「誰だ、今の魔法を打ったのは!」

思わぬ光景を目にし棒立ちの観客たちの中、ただ一人ギーシュが声を張り上げます。

何を怒っているんですか?

あやふやな声、性別も年齢もわからない声。

「何を怒っている、じゃない! 彼は僕たちと決闘をしていたんだ! それを横から攻撃するなど許されると思ったのか」

ふふ、怒る必要はありませんよ、ギーシュ

ウィルの口調によく似たその声に、神経を逆撫でされたような気持

ちとなるギーシュでしたが。

あれは、我々四天王の一番の小物
遊びすぎていたからこうなったのです
最初から全てを吹き飛ばせばいいものを、あなたたちを甘く見
て油断した結果ですよ

同じような声が幾重にも響き、そう告げます。

「四天王……？ なにを、何を言っているんだ?!」

ふふ、そうですね。『春風』を倒したのですから、次は我々の
出番ですね

僕たちは遊んであげるつもりはありませんよ
最初の一撃でし止めてあげましょう

そして、広場の中央に竜巻が生まれます。
観客たちが咄嗟に目を瞑った次の瞬間、嘘のように風は吹き止み、
代わりにさつきまでいなかった人影が三人。
その人影を認識し、誰もが自分の目を疑いました。

「ウ…… ウイル？ ウイルなのか？」

「やあ、ギーシュ。そうですね、ウイル・ド・ランペルージです」

「酷いですね、友達の顔を忘れたのですか？」

「まあ、その気持ちもわからなくもないですけどね」

さきほど灰となって吹き飛んだはずのウイル。それが三人に増え、
ギーシュの前に立っています。

「な、なんで三人に？ いや、そうじゃない、さつき君は灰になっ

たはずじゃ」

「ああ、『春風』ですね。油断して手加減した上に最後は完全に行かれるとは……本当に恥ずかしい」

「は、春風……？」

「さあ、ギーシュ。それでは先ほどの決闘の続きといきましょうか？」

「……え？」

「僕は『北風』のウィル・ド・ランペルージ」

「僕は『熱風』のウィル・ド・ランペルージ」

「僕は『砂嵐』のウィル・ド・ランペルージ」

「ちょ、待って、僕はさっきの戦いでもう精神力が。それにみんなも」

「」「さあ、風が最強と言われる所以を見せてあげましょう」「」

「お兄様、先ほどの決闘は少しやりすぎたのではないのでしょうか？」

「え、そうですか？ だって可愛いジョゼットたちのことを引き合に出してアレコレ言ったんですよ？ むしろあのくらいで済ませたあげたのですから優しい方だと思いますけど」

「ウィルくん、時々本当に容赦ないですよ……」

「人の恋人に横恋慕する方が悪いんですよ。あと、ギーシュは自分のことを棚にあげていたのでお灸をすえてやるうと思いましたが」

「ああ、言われてみると、ギーシュってば自分が二股していたのをウィルとの決闘でうやむやにしたわね」

「でしょう?」

いつものお茶会。話題の先ほどの決闘のことです。
え、僕は死んだんじゃないのか?
死んでたら流石にこうしてのんびりお茶していませんよ。

「人間の魔法はもっと幼稚だと聞いていたけど……あれは凄かったわね」

「ああ。偏在と言ったか。ウィルが何人もいるだなんて、戦争になつていたらエルフは勝ち目はなかったかもめないな」

「そうよね……本当に味方でよかったわ」

ファティとルクシャナが言っているように、あれは全部僕の偏在です。

決闘なんて危ない真似、生身でするはずないじゃないですか。ついでにちょっと演出に凝ってみたというわけです。

途中でギーシュもラインに上がったみたいですし、結果オーライでしょう。

「ギーシュ、明日学校にこれるのかしら?」

「モンモランシーさんが看病しているみたいだから、きっと大丈夫ですよ」

「最後、お兄様の姿を見ただけで錯乱していましたけど……」

やっぱり決闘じゃなくていじめになってしまいましたかね?

決闘フラグを拾いました……え、これ決闘？（後）（後書き）

決闘は偏在にお任せ、それがウィル・クオリティー。

……実は四天王を出してみたかったです。

予期せぬ × ×

ふむ、どうやらお客さんのようです。

夜、みんなにちよつと出かけると告げて宿舎から抜け出し、すぐ裏手の庭に出ます。

「こんばんは。今日はどうやらお客さんの多い日みたいですね」

昼間はギーシュと愉快的仲間たちでしたが、今度の客人は少々物騒な方ようです。

「ディスベル
解除」

襲い掛かってきたガーゴイルに解除の魔法をかけます。ただの石像になった元ガーゴイルが地面に激突し盛大な音を立てました。

「今の魔法……やはりあなたは虚無の担い手のようですね、ミスタ・ランペルージ？」

影から湧くように姿を見せたのはシェフィールドさんです。まあ、ガーゴイルを使っている時点ではればれかもしれませぬ。

「ええ。わかっているのでしょうか？ ミヨズニトニルン？」

「……そう、私のことも知っているのね」

パチン、と指を鳴らすと何十体ものガーゴイルがいつせいに飛び出します。

「ちよつと聞きたいことがあるのだけど、いいかしら？」

「ええ。おしゃべりだけでは何ですし、ダンスのお相手でも構いませんよ」

「あら、嬉しいわ。それじゃあ一曲お付き合い願うわ!」

シエフィールドさんの意志に従い、ガーゴイルが殺到してきます。何が狙いなのでしょう。先ほどの僕の魔法を見ていたのなら無駄だとわかっているでしょうに。

「解除」

ガーゴイルにかけられた魔法を解除しますが　そのまま勢いのついた砲弾となって僕に迫ってきました。

それをエア・シールドで受け止め、ガーゴイルの残骸が僕の視界を塞ぎます。

なるほど。エア・シールドを動かして壁を吹き飛ばそうとしたところで、二つの声が重なるのを聞きました。

巨大な水の竜巻が巻き起こりました。

「これは……」

「昼間の決闘でミスタ・グラモンたちの魔法を防げませんでしたね？　さあ、王家に伝わるヘクサゴンスペルをどう受けます?」

竜巻の向こう側で響くシエフィールドさんの声。

なるほど、あの決闘の時に発生した奇跡のオクタゴンスペルと同じ状況を再現するつもり、というわけですか。

狙いはいいですが　甘いですよ!

《ユビキタス》

偏在を使つて自分を二人に増やします。そして、全く同じ自分自身との二重詠唱！

同じ声、同じ音調の詠唱はまるで一つの詠唱のように重なり、互いに共鳴し力を強めていきます。

これこそ、ロマリアの賛美歌詠唱を元に編み出した新詠唱法、そのままずばり『共鳴詠唱』です！

《カッター・トルネード》

僕の放つた二つのスクエアスペルが融合し、オクタゴンスペルへ。刃の暴風は水の竜巻を飲み込み、一瞬たりとも停滞することなく吹き飛ばしました。

「「「きゃあああああああああああつ「「「

ふっ、ミッション・コンプリート。完勝です。

もちろん、彼女たちの肌には傷一つつけていませんよ。肌には。

服は別ですけどね。

さて、ちよつとおいたが過ぎた三人に錬金でコートを作つてあげました。春とはいえ夜は冷えますからね。

え、最初から裸に向くな？ それじゃあつまらないでしょう。

木がなぎ倒され広場のようになった空間にテーブルと椅子を錬金で作り、ティーポットとカップをゲートから取り出して準備します。

何という虚無の無駄遣い。あ、お茶菓子も出しましょう。

手品のようにアレコレ取り出す僕にジヨゼットとイザベラは驚くだけですが、シエフィールドさんは盛大に顔を強張らせませす。僕が使っている魔法を一人だけ理解できてしまったのでしょね。エルフ

二人と似たような反応です。

「さて、それじゃあ今回の襲撃の目的をうかがいましょうか」

まあ、聞くまでもないんですけど。

僕がそう尋ねると、シャルロットがおずおずと口を開きました。

「あの……あなたが、『魔法使い』ですか？」
「そうですよ」

あっさりばらしてみます。今更記憶をいじるのもあれですしね。

「え……ほ、本当、ですか!？」

「『青の欠片』、見つけたんですか？ シャルロット？」

「っは、はい!」

『青の欠片』。

僕が彼女に与えた課題であり、同時にあの場にいた者しか 正確には彼女に囁いた僕と、囁かれた彼女しか知らないはずの言葉。シャルロットの口からイザベラやシェフィールドたちにも広まったようですが、本来なら接点のない僕がそれを知る術は皆無です。

「いつ気がついたのですか？」

「あの、実は昨日の儀式の時にシェフィールドさんが……」

「ああ。なるほど、髪の色を変えていてもすぐ近くで見たら流石にわかりますか」

原作のペンダントみたいに顔を変えているわけでもありませんから、間近で見ればすぐばれるでしょうね。

シャルロットたちとは去年は別のクラスでしたし、一年のときはシ

ヤルロットもイザベラも周りの生徒に注意が向いていなかったの
見過ごしていたのでしょう。

とすると、『青の欠片』について、シャルルか夫人から話を聞いた
のは、この前の春休み辺りでしょうか。

「ねえ、ちよつといいかしら」

「ええ、なんでしょう。イザベラ」

「ええと……その、この前、私に言った事を……お、覚えてるわよ
ね？」

「もちろんです」

あの時は奮起してくれればと思つて厳しい言葉をかけたのですけど。

「美しくなりましたね、イザベラ。入学式で見かけたときは別人か
と思ひましたよ」

嘘偽りなく今の彼女は美しいです。

錬金で作つた間に合わせのコートを着ていても隠せない高貴さ、気
品。

自らを厳しく律し、作り上げた美がありました。

「あ、そう。まあ、やっとあなたも私の美しさがわかったみたいね」
ツーン、と顔を背ける彼女ですが、顔がちよつと赤いです。

これがツンデレなんですね。ルイズも大分デレデレになっているの
でなんか新鮮です。

「……ごほん。ミスタ・ランペルジ。話を進めたいのですけど、
よろしいですか？」

「あ。どうぞどうぞね」

「……………。それでは、我が主からの伝言です。」

『おお、『魔法使い』よ。』

この程度のテストは軽く退けるだろうと思っていたぞ。ちなみにお前を襲うように支持を出したのは俺だ。

虚無も虚無の使い魔も揃ってこの程度にてこずる様じゃ話しならんからな。詳細はシェフィールドに説明させるが、よもや無様な姿を晒してはいないだろうな？

ああ、それとシャルルからも伝言がある。娘がほしいなら一度顔を出せ、話はそれからだ、だそうだ。

いいな？ それまで傷物にするんじゃないぞ？ ではな、来るときは連絡を入れてから来い、それくらい朝飯前だろう？』

以上です。……………。あの人は、また素直じゃないんですから……………」

うわ……………。すごい、声色までそっくりです。マジックアイテムを使ったようには見えなかったのですが、いつの間にこんな芸を

「もちろん愛の力ですわ」

シェフィールドサンが覚醒なさっておられる?! な、何故……………。って、あのルーンは?!

「それでは、私は報告に戻らせてもらいます。……………。コレ、ありがとうございます。うございますね」

にこやかに去っていったシェフィールドさん。弾むような足取りでした。きつと何かいいことあったんでしよう。

で、後に残るは僕と二人の姫君。

「『魔法使い』……………。ウ、ウィルト、呼んでも?」

さてどうしようか、と思ったところでまたシャルロットから話を切り出しました。けっこう物怖じしない性格なのでしょうか。

「ええ、どうぞ。シャルロット」

「……あ、ありがとうございます。……あの、一つ質問があります」

「なんででしょう?」

「どうして、あの子は 妹は、あなたの側にいるのですか?」

「ああ……」

そういえば、その説明はしていませんでしたね。

『青の欠片』 シャルツロットの双子の妹であり、ガリアの青をその身に隠す、ジヨゼット。

彼女を探せと支持を出し、こうしてシャルロットたちは見つけたが、何故彼女がここにいるのかヒントも何もなしではわからないでしょう。

「実は、ジヨゼットも虚無なのですよ」

「え?!」「まさか!」

「驚くのも無理はありませんが、確かに彼女はガリアの担い手……それも、ジヨゼフが死んだ後にその力を受け継ぐことが決まっています」

「叔父様が、亡くなられた時……? それはどういう」

「詳しく説明してもらおうかしら」

二人には特に隠すつもりないので、虚無の力とその仕組みを説明します。

「……というわけです」

「……そんな」

「まさか、伝説の虚無が……」

「僕からするとただの妄執ですけどね。六千年という長きに渡る、過去の負の遺産そのもの」

「……でも、ウィル？」

「はい」

「その虚無の仕組みと、ジヨゼットがあなたの側にいることこの理由に何のつながりもありませんよ」

「あ」

え〜っと。

……そうですね、何の理由にもなりませんね。

「ええと、ジヨゼットが赤ちゃんの頃に、突然僕のベッドに現れたという」

「どうしてベッドにジヨゼットが？ お母様は預けた先の修道院から忽然と姿を消したと聞きました」

「それは、たぶん、先ほど言った「四の四」が集まることと関係

」

「今のガリアの担い手はうちの父でしょう？ なぜジヨゼットがあなたの下にいかないといけないのよ」

「え〜っと、いえ、その……」

「「ウィル？」」

「す、すみませんでした！！」

ええ、誤魔化し切れませんでした。

結局僕の知る『未来』の記憶を話すことになったのですが……これ、どうしましょう？

とある父娘の死別について（前書き）

今日はあまり筆が進まず……会話文もほぼ皆無ですが、ご了承ください。

とある父娘の死別について

前世で読んだラノベの知識があつたので、ジヨゼットをさらってききました。

……なんてことを言ったら僕が可哀想な人みたくなつてしまいます。無難に『未来』がわかるとしておきました。

未来を知る方法？ 虚無です、虚無。時空を超えて未来のことを知ることすら虚無なら可能です。たぶん。

ごり押しで二人を納得させたところで、ジヨゼットが本来辿るはずだった人生について話しました。

ああ、前提として『ジヨゼフがシャルルを殺し、そのジヨゼフにシャルロットが復讐を行い、ガリアの王位についた未来』でのことだと言っておきます。

あの日の光景を思い出したのか二人とも複雑そうな顔をしながら、ジヨゼットの話の聞きました。

ロマリアが虚無の担い手を集め、聖戦を発動させようとしていること。

ガリアの担い手であるジヨゼフが死に、その血族に力が移ること。修道院に暮らしていたジヨゼットに虚無の力が宿り、教皇の策略によってガリアの国王シャルロットと入れ替わること、そして、そのままガリアの王として聖戦に協力をするようになること。

ジヨゼットの話はこのくらいでしょう。……ジュリオ？ そんな人いましたっけ？

「ロマリアが、あの子を利用しようとして……」

「この話が本当なら保護しようとするのも当然かもしれないわね」

「結局僕がこの未来を変えましたが、あの子がみすみすロマリアの手先になるのを見過ごすのもどうかと思ひまして。うちで暮らしたほうが修道院より楽しいですしね」

現状で『ジョゼフがシャルルを殺し、王位を継承した未来』という前提はすでに崩れています。けど、やはりガリア王家の血と虚無の候補という存在はロマリアに狙われるものとなるでしょう。

そこで、修道院に預けられた時点で僕の家に来て、義理の兄弟として暮らしていたわけです。

もちろん、その方法として、当時一歳の僕が虚無の魔法を使って彼女を連れてきたのだと言いましたよ。

……なかなか信じてもらえませんでした。本当なんです。仕方ないですよ。

で、今後の未来のこともある程度知っていますし、僕が何を企んでいるのかとかいろいろとお話した上で彼女たちにお願ひしました。

僕が未来を知っているということ黙っていてほしい、特にテファには秘密にしていってほしいと。

まあ、これもいつかは言うかもしれないませんが、僕がその気になればテファのお父さんであるモード大公を救えたんですよ。

処刑されそうなところを適当に魔法で誤魔化してくれば終わりです。

ただ、あの人を助けようとは思えなかつたんですよ。

うちの諜報部の調べもありますが、テファのお父さん、何度も何度もアルビオンの国王に説得されていたようなんです。

エルフの親子を引き渡せ、それが嫌ならせめて国外追放にしろ。

はっきり言つてとんでもない譲歩ですよ？ 王家を揺るがしそうなスキヤンダルを見逃してやるというのですから。

引き渡したら処刑されるかもしれないので断るのも納得ですが、国

外追放なら二人の命までは取られません。ガリア辺りの土地でも買って与えるとかして匿うとか、あるいは二人と一緒に彼自身も国を出るとか、いくらでも方法があります。

仮にも王族ですから、財産持ち出して逃げれば生活費の数年分くらい捻り出すのも簡単でしょう。

なのに、頑なにあれも嫌、これも嫌だと……いい年して駄々っ子ですか？

それに、彼、何も対策とっていませんしね。フェイスチェンジくらい使っていればテファを屋敷に閉じ込める必要すらなかったのに……サハラのエルフたちだって人間界に来るときは人間の変装位しますよ？

顔を変えるペンダントなんて原索のジョゼットがつけていたように普通のマジックアイテムにありますからね。素顔の方が自分だからとかもしそんな理由で何もしていなかったのなら、ただのバカですよ。

……と、まあ、いろいろとあって彼の印象が最悪だということが理由の一つです。

もう一つ理由を上げますと、彼が自分の命をかける程に正直だったことです。

何せ、モード大公はあの（・・・）ウエールズ王子が生まれ育ったアルビオン王家の出身ですからね。

アンリエッタに迷惑をかけたくないと言って特攻しようとして何も出来ずに殺されて、さらには死体を操られてアンリエッタを誘拐した、あのウエールズ王子の血統です。

たとえ偽りであっても愛する人を虐げる真似はできない、とか考えて国王が示した追放の提案を蹴ったのかもしれないと本気で思うのです。

愛の為に殉じるとか、命をかけて真実の愛を示すとか、そういう考え方が好きそうじゃないですか、レコン・キスタ相手に喜んで死んでいくようなアルビオン人って。

ですので、死を望むというのなら勝手にどうぞ、というのが僕の考えです。シャルルみたいな暗殺と違って自分で受け入れているのですから、わざわざ助ける必要などありません。

助けを求めない相手に差し出す手はない。

そう考えてモード大公を助けなかったわけです。

でも、これは僕の理屈リブルですから、テファにとってはきっと納得できないんじゃないでしょうか。

僕が彼女の父を見殺したと考え、きつと悩むと思います。

その悩みを与えたくないの、今は彼女に伝えないと決めているのです。

いつかは、伝えないといけないでしょうけどね。

まあ、そういう事情なので詳しい説明を省きましたが、シャルロットとイザベラの二人に口止めをお願いしました。

代わりに今度本当にガリアに行くことになったのですが……うわあ、本気で嫌ですね。あの天才が何を企んでいるのかわかったものじゃありません。

無事に終わるといいのですが……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4195x/>

ゼロ魔の王族でハーレムを作る

2011年10月29日23時35分発行